
幻想の運び屋

Seven dayS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想の運び屋

【Nコード】

N9212R

【作者名】

Seven days

【あらすじ】

今昔のいつの時代も変わらず、商業の中には必ず物流と言う要があり、それを消費者たちは必ず必要としてきた。（前略）

そして、それは採る者（生産業）がいて、運ぶ者（運送業）がいて運び、売る者（商業）がいて……

買う者（消費者）がいて消費し、成り立つのが商業であるというのも何時の時代も変わらない。（中略）

……これは、そんな運ぶ者に属す

今日の始まり（前書き）

震災から少し落ち着き、やっとアイディアが出てきたので……………

震災前……………

いや、受験前から考えていた物を書きはじめることにしました。

今日の始まり

やあ、諸君。

私は上松光という者だ。

悪い、少し調子に乗った。許してくれ。

………んで、俺はとある時に幻想郷に来てしまった悲しい元高三。

………普通に悲しくないっただろって？

まあ、本心はそんな感じ。………なのだが
でも、ここは空気を読むべきだろ？

ああ、そう……

そんな配慮は別にいらない。

はい、そうですか。

何かすみませんね。

………え？どのように今までやって来たかって？

何か話が突然ぶっ飛んだな

てか、唐突さが…

分かった、分かった……って、本当に分かったからそんな顔はするなよ。

~~~~~

「卒業証書授与。」

あゝあ、また退屈で暇な時間が始まったよ。

まったく、この長さには毎回呆れさせられる……ぜ。

「あゝあ………」あゝあ、また退屈で暇な時間が始まったよ。まったく、この長さには毎回呆れさせられる……ぜ。

「あゝあ………」卒業証書授与ってさ、自分がもらうまでが長いかなそれとも待つのが長くてしんどいよね。

でも、はつきり言えば真ん中でも変わりはしないんだけども。

「あゝあ………」

よし、決めた……俺は寝る!!

さてと、寝るか

………

と、言う感じに俺は不謹慎極まりないことをやった訳だ。

んで、「ああつと、信じられな〜い。　昼寝？をして起きてみれば  
知らない所に。（棒読み）」

「で、あんたは誰なの？」

「てか、『知らない天井だ。』と言わせてくれ。」

「……………」

「悪い悪い。」

で、ここは何処なんだ？」

「私の家だけど。」

「違う違う。　市とか町とか村とか（ry」

「し？　ちよう？　なにそれ？」

「はあ！？」

「いや、。。。県。。。市とか。。。町。。。村。。。とか……………は  
？」

「じゃあ、あんたは外人なんだね。」

「外人？」

まあ、だいたいこんな感じに俺は幻想入りした訳だ。

……何処に居たのかも、誰と会話していたのが簡略的過ぎて分からないって？

いや、それじゃなくて大雑把すぎると……

いや、そんなの俺は知らん！！

それに、いずれに分かるさ。

うん、多分。

あつといけね……

まあ、今日はこのくらいでよろしくお願いしますよ。

俺はこれから仕事があるんでね。

何の仕事をしているのか？

それは簡単に言えば『物流』がキーワード。

まあ、これで分かる……筈。これだけ言えば分かるだろ？

~~~~~

ガラガラ……

倉庫の扉を開けた俺に飛び込んできた光景……は。

「うわっ！！　今日はやたらと多いな……」

俺は倉庫を開けて昨日に受け付けた荷物の量を見て驚いた……………うん、びつくら驚いた。

昨日は人がどんどん来るからちよつと調子に乗り過ぎたな

……………まあ、どっちにしろ生きていく為にはやるっきゃあないんだが。

いや、仕事が面倒臭いとか、しんどいとか……………そんな訳じゃないんだぜ？

「よいしょつとー！！」

俺はひとつひとつ丁寧に荷物を荷台に乗せていく。

正直、これが一番手が込んでいて一番疲れるが、肝心な物が壊れてしまうとマズイので、まず気は抜けない。

いや、抜きたくても抜けないんだ。

前にも類似した事を言ったが、俺はこれで飯を食って生活させてもらってる。

さらに、仕事と言うものは当たり前のようにシビアな世界であり、現実的に何かのミスをして信用を失ったら俺の仕事は終わり。まあ、どの時代も同じだろうけど……………な。

「これで、最後だな！！」

最後の荷物を持ち上げると、気合いを入れる。

「よいつしよつと!!」

やはり定番のようでジジくさいような掛け声を出し、俺は最後の荷物を荷台に積んだ。

実のことをぶっちゃけよう。

いつもは一日の宅配量が荷台の三分の一。多くても半分くらいである。

しかし、なのにも関わらず、今日は助手席にも荷物があるくらいに多い。

まあ、その分収入がこーゆー時に多いがな。

苦勞と収入は比例する。

あくまで身体的な苦勞なので疲勞だが……

「おゝい!! 光ゝ!!」

おっと、何だか呼ばれてるみたいだ。

「少年、移動中……」

俺が小走りに店の倉庫の出口までに出て行くと

「この荷物を夕方頃迄に届けてほしいんだが……」

いつも、いろいろな面でお世話になっている酒屋のおじさんが居た。本名は許可なしでは明かさない。これが個人情報扱うにあたって……いや、何でもない。

「ああ、別に夕方頃迄なら大丈夫ですよ。」

まあ、どんなに時間を見積もっても運ぶ荷物が多い今日でも絶対に夕方頃なら間に合う筈だ。

……おそらく。

それに、おじさんにはいつもお世話になっているからなう
それを考えれば簡単には断れないし。

別に、俺が断る理由もない。

「ああ、頼むよ。」

「行き先は？」

「ああ、例の銭（ry）」

長いので、省略させてもらう。
滞納してるのは分かったから。
俺には愚痴らないで………くれ。

この後、場を移して酒屋前。

「で、このビール10ケースと日本酒が三十本。」

そして、請求書を運べば良いんだな？」

「ああ、頼んだよ。荷物はこの店に取りに来てくれ。」

と、言うとおじさんは店の中で酒を選んでいた客の元に走って行ってしまった。

まあ、仕事柄を考えれば気にする事でもないか。

あの人も自分の仕事があるし………な。

…というか、ひとつ俺がこの荷物を見て思ったことがある。

「この酒の量。多すぎないか？」

宴会をやつてるとしても一回に頼む量が多過ぎ………まあ、もうどうでもいいか。

そして、俺は荷物を運ぶのにいつも使っている軽トラへ乗り込むとエンジンキーを挿してキーを回し、エンジンを掛けた。

エンジンは無事に点火を終えて回転し出す。

うん、大丈夫だな。

そして、今日の荷物を運ぶ場所が書いてある一覧表を見て確認すると

「さてと、時間もそんなにないし………行きますか!」

俺はNから1にレバーを入れ、軽トラのアクセルを強く踏む。エンジンには勢い良く回りだし、そのまま車を勢い良く発進させた。

そのままクラッチを入れて2に変速する。

………うむ、今日も調子が良い。

~~~~~

さて、これから俺はこの幻想的な世界でどんなことを経験し、そして最期に何を見て何を思うんだろうか？

まあ、これは随分と臭い？ありきたりな台詞になっているのだが…

……

とりあえず、この地で俺は生きる事を決めたと言うことは初めに言っておく。

## 今日の始まり（後書き）

修正しました。

お得意様……？（前書き）

修正番になります。

お得意様……？

さて、今日に運ぶ場所、配達先は人里の。。。さんと。。。さん。（ry  
そして、こーりと滞納者だな……

（ちなみに、滞納者と言うのは博麗霊夢のことだ。）

こーりんはガソリンを買ったりしたりしてるから良いが、あの、巫女はな……

まあ、本人の前では殺され兼ねないから言えないけど。  
いろいろとあるし、ヤバいんだ。

言いたいことはたくさんあるさ。

でも、理不尽な事に力の差は歴然。

さらに俺はスペルカードを持たない………いや、諸事情的に持ちたくはない。

まあ、戦えないその時点で何も言えない訳だ。いわゆる…無条件で戦いを挑まれ、そのままの圧倒的な実力差で叩き潰されるという理不尽さ極まりない出来事を避けるためにな。

キキキッ！！

おっと、そういえば……あのお得意様を忘れてたな。  
あそこはちゃんとやっとかないと行けないんだ。

何故かって？

そんな事は行けば分かる。

通常なら縁も無いような大きさの屋敷の前に車を停止させると、荷台から荷物を取り出して鍵を閉める。

そして、門の前で止まって溜め息を一度つくと、「すみませ〜ん、宅配便です！」と、叫び声とはいえないもののそれに比例するような声を俺は発した。

~~~~~

俺が運送業を始めたのは数ヶ月前。

きっかけとかは今言うことじゃないが、営業当初は車、自動車自体が珍しく……いや、いろいろな理由でうけなかった。（自動車自体が走っていなかった為だろうが。）

まあ、いろいろだ。いろいろな理由があるから突っ込まないでくれ。頼む。

で、ここからが本題だ。

……ある時からその受けなさが変わったんだよ。

ある時から……な。きっかけとかは今言うことじゃないが……一番最初、営業当初は車、自動車自体が珍しく……いや、いろいろな理由でうけなかった……まあ、いろいろだ。いろいろな理由があるから突っ込まないでくれ……頼む。

で、ここからが本題だ。

……ある時からそれは変わったんだよ。
ある時から……ね。

確か、それは俺が運送業を始めてから何週間かたった日の朝方だった……っけかな？

いらない？

いや、今日は何となく話したいから話させる。

くくく

とある日の朝方…

「あゝあ………」

今は朝の5時……

俺は今日も少ない荷物の為に早く起きている。

やっぱし……眠い。

そして、今日も軽トラと運ぶ荷物が置いてある倉庫へ行く。
眠いな…

ガラッ

俺は家から倉庫に繋がる扉を開けて倉庫の中に入ると、今日の配達

物が置かれている場所へと向かって歩き出す。

そして、俺が愛用する軽トラの横を……「……………って、えっ!？」

何故、突然俺が何に驚いたかつて？

それはな……………

「……………」

静かに軽トラの前でしゃがみ、凄く真剣に軽トラを観察？をしている少女がいるんだよ。何故だ？

まあ、観察してる時点で強盗じゃないし、別に何か物を壊しに来た訳じゃない。多分。

しかし、な、何か何だか気味が悪いんだよ。

俺は普通に音を発ててこの中に入って来たし、歩く時も足音がしたはず……………

それに、鍵は閉めてるのに一体何処から入った？

強盗ではなく、壊しに来た奴でも無い。

一体全体どうなってる？

まあ、俺はこう自問自答をし、考えながら数分間少女が動かないか待つことにした。

~~~~~

が、数分たっても「……………」全く少女は軽トラのそばから

動かない。

いや、動こうとしないのか？

じっと軽トラの周りを移動しながら観察している……………

さらに、まだ俺という人物の存在に気がついていない。

これは、どうしたものか？

気は進まないけども、しょうがないかなあ。

俺は、そう思うと背後から音をなるべくたてずに近寄る。

そして、

トントン……………

少女の肩を軽く叩いた。

すると、

ビクウツ！！！

跳び上がるように背筋を伸ばし、固まってしまった。

で、何だか見たくない現実がすぐそばにあるらしく、ゆっくりとこちらを向きはじめる。

それはまるで、漫画やアニメのよう……………だ。

「……………」こちらを完全に向いた少女は真っ青になった。

えっ？

何で？

「おゝい……………」

顔の目の前で手を振っても、頬を指で突いても何も反応しない……  
……いや、別にやましい事など考えてもいないし、してもいない。

しかし、何故？

てか、頬が気持ちいいな。

まあ、これ以上待っても拉致があかなそうだから、作業を続けるか、  
それとも少女が復活するのを待つか……………どうする？

一瞬考えた俺だが、

まあ、当然のこと

『……………よし、作業するか！！』

となり、結局俺が最初に折れた。

俺は立ち上がって荷物を置いてある場所へ行き、荷台に運び出す作業を始める。

暫く時間が経ち、残りの積み込む荷物も少なくなってきた頃。

あの頬さわり心地が良かった少女は……………「あゝ……………」ついに、声をかけて来た。

「うん？ 何？」

対応の仕方は迷ったが？

とりあえず、恐怖心を与えないように……いや、誤解を与えないように笑って返事を返す。

「えっと、その……… ごめんなさい！！」

が、返ってきた返事は正反対。

……… 笑顔が誤解されたのか？

「い、いや……… 大丈夫だよ。」

「ほ、本当にごめんなさい！！」

「だ、だから大丈夫だって……」

一応、謝られるのは予想の内だったけれども……こんなに謝られると、何だかかなりひょうし抜けするな……

まあ、そんな彼女は彼女で俺に対して謝らなければ気が済まないだろうなんだろうけれど。

「で、その、もしかしたら………」

え？

突然、どうした。

……… 一体何だ？

「……………」

「あれに乗せてくれませんか？」

「うおおー!!」

ドテッ!!!

「大丈夫ですか!？」

「あ、ああ……………」

流石に初対面の人に期待をした俺が馬鹿だったな……………うん。

いや、別に变なやましいような事を考えてた訳じゃあないよ……………ホントだよ？

「別に良いさ。運ぶ荷物もそんなにないし。」

「あ、ありがとうございますー!!」

まあ、良い暇つぶしになりそうだから良いさ。

~~~~~

……………まあ、そんな感じに宅配に乗せて行ったら。

「また、乗せてくださいね!!」

と、目を輝かせて言ってきた……………何か、災難？

で、この出会い、俺の上手く行くようになったきっかけだな。

いわゆる『ロコミ』がその時から広がったらしい。

話が分からない？

そりゃ、俺もわからないから仕方ないさ。

ただ単に俺は話したかっただけだからな。

少しだけ思い出して考えふけていた俺。

しかし、時は止まらない。

そんな俺にたいして目の前にある門が迫ってきた……いや、開けたから迫ってきたんだがな。

「おっと、危ない………だから突然門を開けるなって。」

「今日も来てくれたんですね!!」

「ああ、そうだな………荷物を運びに来た意味でな。」

「そんなに荷物が多い訳ないじゃないですか。そんな嘘を並べて私を振り切れると思ったのですか？」

彼女は何にも自分の考えが間違っていないような勝ち誇った笑みを俺に見せ、まだ発展途上で無いような胸を強調させてしまっている事にも気がつかずに胸を張る。
そして、嬉しそうにそう言った。

しかし、何か、何となく普通に俺の心の中が傷付くような事を言うな……

「じゃあ、見てみる!!」

少し、苛立った俺は、彼女に背を向けて自らが運転する軽トラを停車させている場所まで歩いていく。

そして、そのまま歩いて軽トラが停車している場所まで辿り着いた時、彼女は絶望したような表情を俺に見せてこう言った。

「……………そうですか、私は見捨てられたんですね」

えっ!?

「てか、助手席が乗れなかったら何処に乗るんだよ？」

普通、何処にも乗れないだろ？
いや、何処に乗せれば良いんだ……

「そんなの……………」

な、何か嫌な予感がする……………な。

俺はその嫌な予感を背に一步彼女から引いて、彼女の解答待つ。

「そんなの……………／／／
そんなの光の膝の上に決まってるじゃないですかああああ！！／／
／」

ま、ま…………マジで！？

彼女は頬を紅く染め、息を荒げて何か恥ずかしそうに俺を見ていた。

恥ずかしいなら、言わなきゃ良いのに…………

「さ、流石に…………あ、危ないだ「いや、大丈夫ですよ！！」……………」

「だから……………」

「だから何ですか？」

『だから』と言ってその後言葉と並べようと思った俺だったが、
ふと視線を彼女に向けると彼女の目には涙が貯まって来ており…………
…仕方ないか…

「分かった分かった……………」

しかし、俺が許可を出した瞬間…………彼女は下を俯いたかと思うと、

そのまますぐに顔を上げて点数をつけたなら100点を軽く取れる
ような笑みを俺に送ってこう言う。

「それで良いんですよ（ニコッ）」

結局、また押し切られたな……………

「阿求はわがままだなあ」

「光がマイペース過ぎるんです!!」

そう、彼女こそが俺の常連客第一号であり、俺に好意を向けている
……………九代目阿礼乙女で稗田家当主の稗田阿求である。

まあ、

マイペースなのは否定しないけど……………この軽トラってそんなに面
白いか？

今はそんなのはどうでも良いか？

それでも阿求は当主だから……………自己主張が激しいのか？

の、ような疑問が以前に浮かんだことがあったようななかったような……… 気もする。

「じゃあ、行きますよー!!」

「わっかったよ。」

の、ような疑問が以前に浮かんだことがあったようななかったような………

「じゃあ、行きますよー!!」

「わっかったよ。」

結局、今日も押し切られた俺は軽トラに乗り込み……… その次に阿求を膝の上に乗せる。

そして、シートベルトを閉め……… 「じゃあ、行くか………」

「出発進行!! ですね。」

阿求の声と共に発進した。

「うん………」

こうゆうこともたまにはいいですねー!!」

「……… そうか？」

でも、あんまし動くなよ。運転に集中出来なくなつて危なくなるから。」

「まあ…な。」

「グズグズしてると日が暮れちゃいますよ。」

「おお、そうだった。」

まあ、別に今考える必要がある物は見当たらないし……配達に行きますかあゝ

俺は目の前に居る……いや、俺に乗って居る阿求に「あまり動くなよ。」と、とがめると目の前から流れてくる景色を見ながら俺は長いような欠伸を一度する。

余談だが、

途中、横の窓から空を見ると、それは見事な日本晴れで今まで半年間の苦勞を忘れられる。そんな、濁りもなく綺麗に透き通っていて何処までも続いているような『青空』がそこにはあった。

「今日は天気がとても良いですね。」

「ああ、そうだな……」

阿求が俺の上に乗っていると言う恥ずかしいも気持ちも忘れろくらいに……

今日は客の機嫌が良くはないようだ……（前書き）

一部内容を修正（2011 6/29日）

今日は客の機嫌が良くはないようだ……

ある程度里の配達が終わったこの頃。

俺はとある里の重要人物の家へと宅配物を配達に来ていた。

家の戸の前までにやってきた俺は、戸に手をかけ

ガラガラ!!

何故か勢い良く戸を開く。

「えっと、ごめんください!!」

シーン……………

おっと、いつもならすぐに出てくるんだけどな。

俺は、玄関先でこの家の住人を待つが……

今日は配達先が多いこともあることもあり、とある考えが思い付く

……………

荷物を玄関先に置いて行けば良いんじゃないか？

自分の考えの通りに荷物を玄関先に置いて、帰ろうとした所……………

ココココココ……

「？」

後ろからどす黒いオーラが……

前途多難？

「なあ、何で客の帰りを少しでも待とうとお前は思わないんだ？」

ああ、死亡フラグが……立った。

~~~~~

「もう一度聞く。何でお前は客の帰りを少しでも待とうとしないんだ？」

「えっと、その……まあ、そんな感じ？」

そういえば……今日は満月の次の日だったっけ？

ちなみに今俺は、どす黒いオーラに押されて家の中に追いやられます。  
恐い？

いや、それを超越してる…………マジで。

「えっと、今日は予約が何十件も入ってて。

……………夕方頃迄に借金滞納者にも配達しなきゃならないんですよねえ……………」

「そう、か……………」

俺が勝ったの「でも、今回は客に対する態度がなってならんな。」

「へ？」

俺は、そのまま肩を掴まれ壁際に寄せられる……………まさか！？

「そうゆうやつには教師として鉄槌をくださなければならんな。」

「いやあああ！！」

叫び声がアレ気にしない、気にしない……

……………

……………

「何だか光が戻って来ませんね……………」

一体、何をやっているのでしょうか？」

「いやああ!!」

あれは、光の叫び声……………何かあったのでしょうか？

……………でも、厄介事に巻き込まれるのは嫌ですね。  
そっとしておきましょう。

触らぬ神に祟りなしですから……………

~~~~~

「た、ただいま……………」

「何だか顔がやつれてませんか？」

「気のせいだ、気のせい。」

「それなら……………良いのですが……………」

いや、本当は散々な目にあっただけどね……………
変な心配をかけたくはないしな……………

「じゃあ、助手席が空いたから……………そっちに移動してくれないか
？」

「……………す／／」

「何？」

何だ……………よく聞こえないぞ？

更に顔が真っ赤だし。

「い、い、い……………」

い？

「嫌ですっ！！／／／」

何だと！？

何故、そうなる！？

「えっと、何故そうなる？」

「だって……………私の身長が小さいおかげで
外が見えにくい……………」

から。／／」

……………はあ、どうしようか？

阿求は顔を真っ赤にしながら言ってくるし……………
恥ずかしいなら言わなきゃ良いのにな。

分かった分かった。

しょうがないし拉致があかなそうだから……

だから……

だからあ!!

「分かった。分かったから……乗って良いぞ。」

了承してやった……

運送業社の苦悩？（前書き）

修正番になりまあすよ。

運送業社の苦悩？

「……………ふう」

「はあ……………」

俺と阿求は今「やっぱり長いですね……………この階段。」

「ああ、それには俺も同意する。」

あの有名な滞納者の所に酒と『請求書』を届けている。
それにしてもやっぱり階段が長いな……………角度も急だし。

これじゃあ、無理して参拝しに来ようとも思わない理由が分かる気がする。

……………しかし、思っのは毎回毎回の話だが。

……………運送業社の苦悩……………

「宅配便ですー!」

.....

うん、おそらく、完全にシカトだな。

ならば、どうすれば良いのか？

こうゆう時は.....これ、

チャリン

賽銭一択だ！！！

.....

あれ？

留守か？

『普通なら賽銭が入ったら.....目を輝かせて出てくるんはずだからな。』

『まさか、居留守な訳ないよな？』

と、俺はすぐさまに考えを広げていく.....が。

バシッ！！

「痛っ！！」

後頭部を誰に何かで殴られた。

まあ、軽くだから叩かれたに近いだろうけどな。

「んな事を考えてるんだったら……………ちょっとはお前も手伝うんだぜ……………」

「ああ、魔理沙か。

てか、じゃあ魔理沙は何に手伝ってるんだ？」
てか、何がお前に分かる？

「霊夢の看病なんだ……………ぜ？」

「どうしてそこでクエスチョンマークが付くんだよ……………」

「まあ、そんなことはどうでもいいからこっちに来い。」

何故かは分からないが、俺は問答無用で魔理沙にズルズルと引きずられていく……………

「阿求……………」

そんな俺は、弱々しく阿求に助けを求めるが……………

「ちょっと、待ってくださいよ!!」

俺が思った事をよく分かっていなかったようだ。

あまりに予想外な事ばかりが起きるので、俺は思わず苦笑いを顔に浮かべる。

てか、今日はいろいろと………散々だな!!
ホントに!!

~~~~~

「霊夢　　客なんだぜ。」

「……………何、魔理沙。今、私は大変なんだけど……………」

「宅配便です。」

「ゲッ!!」

「霊夢?　どうしたんだぜ!？」

よし、予想の通り。

…でも、顔色と表情を見れば……………具合が悪いのは一目瞭然だなあ  
……………これは。

「ま、ま、魔理沙あああ!!　　アンタ、アンタっていうのは…  
…私がこんな状態が悪い時になんって事をしてくれるのおおお!!」  
叫んでいる本人は基本的に無視をするが、俺はあの叩かれた後に何  
往復もして運んだ宅配物を並べていく。

「はい、注文した酒。　ビール10ケースに日本酒。　これだけだ  
ろ?」

「へ？」

「何だ？　まだ何かあったのか？」

「い、いや……」

追加で金を取り立てに来たのかと思ってたんだけど……」

「何なら取ってやつても良いぞ？」

「……………」

言い返す気力もない……………」か。

これは本当に具合が悪そうだな……………」仕方ない。

借りは作っておけば役に立つ時があるだろうから、仕方ない。

「ホレ！　受け取れ！！」

ビュ！！

俺はそう言つとバックからある物を取り出して霊夢に投げる。

パシ

「な、何よこれ？」

「チョコレートだ。」

甘いから良いエネルギー補給になるぞ。」

追加で例のアレをはつつけてあるがな。

「ちょ、これアンタ……………」

「な」に気にする事はないさ。

俺はこれから今日、最後の配達先に行かなきゃならないからじゃあな！！」

俺は、その言葉を残して神社から出て行った。

「あ、ちょっと……………待ってくださいよー！！！」

あ、そういやあ…阿求を忘れてたな。

~~~~~

「さっきは霊夢に何を渡したんですか？」

「気になるか？」

「はい。」

……………ここは、一発冗談でもかましてみるか。

「ラブレターだよ。」

「え？」

「いや、うそだ」

「……………」

わっははと、笑い飛ばす俺だが……………

「ホント、ですよね？」

何故か阿求は、何処か不安げな顔をしていた。

何故？

「ああ、そんなことを嘘ついて何の得になる？」

「です…よね。」

しかし…何か阿求の表情が暗くて寂しそうだな。

と、思った俺は……

「誤解を招くことを言って、ゴメンな。」

「あ、っえ……………／／」

詫びの言葉に添えて、お姫様抱っこというものをしてやった。

~~~~~

「何だ、何だ……」

「つて、霊夢…… あいつらイチャイチャやってやがるぜ!!」

「…………… 近くで大声を出さないでくれる… 頭が痛いから。」

「悪い、悪い……」

「でも、イチャイチャやってやがるんだぜ!!」

「!？」

「ホントね…………… でも、私には何にも関係ないから別に良いわ。それに、弱みにもなるだろうから…………… ブツブツ」

「おい、私を一人にしないでくれ!!」

「な、会話が… 二人が出た後の神社であつたらしい。」

本日、休業日？（前書き）

修正番になりまゐす。

本日、休業日？

最初に言っておく。

店には必ず言っても良いと思うが、当たり前のように休業日がある。

特に個人経営な状態の業態ならばこれは完全当て嵌まるだろう。

こんな事を言っている俺だが、それには訳がある。  
そんな訳というモノを答えは簡単だが予想してみてほしい。

簡単に分かる答えなんだがな。

俺も本日は輸送機（軽トラ）の点検の為に……『休業』だからだ。

そう、それだけ……

本当にそれだけだ。

~~~~~

「ふう……………」

突然だが、今現在俺は、車（軽トラ）の点検をしている。

何故、そんなに突然なのかだって？

それは、約半年くらいに一回のペースで軽トラの点検をしているからさ。

壊れたらた代用品の営業車はないし、さらに今は初夏…………『これからの季節にエアコンとかが壊れたら…………』とか、考えると恐ろしくてね。

まあ、そんな訳で不定期に店の休業日を決めて点検をしている訳だ。不定期だから…………サボっている訳じゃないから別に大丈夫？だろ。

カチツカチツ

よし、タイヤを固定するボルトもちゃんと締まってるな…………

~~~~~

A M 11:30

ようやく、軽トラの点検が終わった。

俺は首を一回程回して一息つく。さて、昼飯でも食べるかな？

と、思つて倉庫から歩き出したがしかし、その時だった……

「すみません!!」

『ちよつ、マジで………幻想郷に居たのかよ!?!』

「荷物を届けて欲しいのですが………」

そこでだ、銀髪のメイドにあつたのは………

~~~~~

「あ、さつき点検が丁度終わったんで………」

汚れたこの服を着替えるのでそこで待つててくれませんか？」

「あ、はい。」

とりあえず、汚れたこの服では接客も出来ないのだから………悪いが待つてもらふことにしよう。

~~~~~

「はい、お待たせしましたー」

「あ、別に大丈夫ですよ。」

「で、今日の依頼される荷物と場所をお聞きしてよろしいですか？」

「荷物はここに置いてある物で、場所は紅魔館でよろしく願いますわ。」

『……………は？』

てか、この荷物の量をこの人はどうやって運び込んだんだ？

「私の能力の一部とを考えてくだされば。」

はは、心を読まれるとは……………

「で、配送先ですが……………」  
「貴方がわからない？」  
「はい、そうですね。」

紅魔館……………か。

噂でもそのような洋館など聞いたことがないな。

何故分かったと言われてもさ……

メイドがいるなら洋館って普通予想がつくだろ。

「大丈夫、私も乗って行きますわ。」

てか、何か……完全に運送業者を便利屋扱いしてやがる。

何か、腹が若干立ってきたから…かまをかけるように何か言ってるか？

「何か？（ニコツ）」

「いや、何でも。」

はあ……しょうがない客は客。

さらに初対面だから評判の為にこれくらいだったら我慢に我慢を重ねろ。

ぐつと堪えた俺は立ち上がると……

「さて、暗くなる前に行きましょうか？」

「そうですね。」

とりあえず、軽トラを駐車している場所へ行くように促した。

…早くも、『この人と喋っていると精神力が削られる……』と思い、  
気がついてしまった俺。

今回はちょっと道のりが長そうなのに……大丈夫か？

『大丈夫だ、問題ない』とは笑い事でも言えない……  
言えない俺がいる。

到着からの……………（前書き）

修正番になります。

後話と連結したので、結構長くなっています。

到着からの……

「さて、まず最初にシートベルトという安全装置がそこにあるので……これをこうゆう風につけてください」

「こうですか？」

「はい、そうですね」

さて、向かうとしますか。

途中に絶対、問い詰められるな………まあ、良いか。

~~~~~

「はい、ここです。」

「……………ずいぶん大きな屋敷ですね。」

俺はあのあと、いろいろと車内で質問攻めに合い、こつてりと搾られていた……………変な意味じゃないよ？

まあ、事故やハプニングが全くなかったのが不幸中の幸いだが。

「で、この荷物は何処に運べば良いんですか？」

「ちょっと待っててくださいね。」

と、咲夜さんは言い残して門の前まで歩いていく。
門番に許可でも取るのだろうか？

……しかし、俺の考えは遥かに外れ……
とんでもなく、俺は度肝を抜かされることになる。

俺が門の方に視線を向けると、そこにはチャイナドレスを着た女性が居た。

うん、流石こうゆう所の門番。無駄に微動だにしない。

しかし、咲夜さんは怪しい笑みを浮かべながらその女性に近づいていく。

正直、やられたら震え上がって動けなくなりそうだ……………

そして、そのまま口を開いた。

「はい……………
起きてください。」

は！？

あんなに普通な感じに目を見開いて寝れる奴がいるのか！？

と、上を向いて考えていた俺は……………ずらした視線を急いで再び門に向ける。

すると……………

「あんギャアアア!!」

とんでもない悲鳴が聞こえた……………

うん、俺は何も見えてないし聞いてないさ。

うん、悲鳴なんて聞いてないし……………血の激流？なんてみてないさ。

うん、オデコの部分にナ「お待たせしました。」

「あ、ああ……………」

あの人は大丈夫なのか？」

「妖怪だから大丈夫です。」

それは、違うと思う……………

と俺は、いろいろと思ったことがあったりしたが……………言ってしまうとこの世にいられなそうな気がしたので、それを全部心の中で飲み込んだ

うん、流石腹黒メイド……………コワイね。

「誰が腹黒ですって？」

え？

「冗談ですよ。 ついて来てください。」

いや、流石にタイミングが良すぎて冗談に聞こえなかったぞ。
本当に声には出してないのにな……

~~~~~

「ここに置いてもらえれば……」

「はい、わかりました。」

その後、館の中の食糧庫に案内をされて今に至る。

「あ、速めに終わらせるんで待っててください。」

終わったらいろいろと渡す物もあるしな……

少年、作業中……

「はあはあはあ……」  
「待たせてすみませんね。」  
「別に私は大丈夫で!？」

「？」

「ちょっと……待っててくれませんか？」

何故か突然咲夜さんが慌ただしくなった……な。

何かあったのか？

「別に大丈夫ですよ。

自分のことは気にしないでください。」

「ありがとう。」

そう言うと、咲夜さんはその場から消えた…

『能力か？』

まあ、そうだろうな。

『転移系？』

そしたらさっきの門番は何だった？

投げる動作も無く突然ナイフが刺さってたぞ。

何か違う。

『じゃあ、空間系？』

てか、空間系ってどんなのだ？

「うん……………」

俺は、咲夜さんの能力が何なのか凄く気になってるようだな。

いや、なってますけど……………ね。

くくくくくくくく

とある部屋にて……………

「お嬢様、本気ですか？」

「ええ、本気よ。」

「じゃあ、なんで……………」

「面白いからよ。」

「へ？」

「だから、彼が自体が面白いからよ。」

.....

..... さつきから20分くらいか？

咲夜さんはまだ戻って来ない。

何か重大な事でもあったのか.....？

と、

俺はこれから降り注ぐ『災難？』いや、出来事にも気が付かずに感じなく...

今日出会った人のことを暢気にも心配していた。

そう、暢気にもね.....

~~~~~

「ああ、咲夜さんは.....」

まだ、戻って来ないのか.....」

あれから約一時間くらいが経過したけれども.....

咲夜さんはあれきり戻って来ていない。

やはり一大事な事でもあったのだろうか？

..... あと、立ちっぱなしで疲れてきたなんて言うのは余談だ。

てか、本当に大丈夫「お、お待たせしました!!」

「のああ!!」

うわ、び、ビックリした……………

アンタの能力が何かは知らないけどさ……………
それがあれば暗殺とかやり放題だね、ホントに。

「随分とお待たせしてしまいました……………」

「いや、これ以上長い時もあつたから…………… 大丈夫さ。」

あの、例の滞納者の時だよ……………でも、あれより前のことだけだな
!!

あの時は最終的にお札が飛んで来たり、スペカが発動したりと、殺
されそうになったりして……………散々だったな。

「あ、あの……………よろしいでしょうか？」

「あ、ああ。 悪いな。」

てか、咲夜さんの口調がまた変わってますよ……………いわゆる『仕事
モード』ですか？

まあ、俺にも仕事中はこうだからそうだろうけどな……………比べるな？

いや、それは人の好き勝手でしょ。

「お嬢様、客をお連れしました。」

「へ？」

えっと、さっきまで食糧庫の前に居たはずだよな？

じゃあ、今なんで俺は「お嬢様？」

……………あれ？

どうした？

「ちょっと、お待ちください……………」

そう言っただけで、お嬢様は部屋の中に入って行った……………のだが！！

「お嬢様！！ 人に客の案内を頼んでおいて……………お嬢様は一体、何をやってるんですか！？」

「だって……………」

……………

「だってじゃないです！！ お嬢様はこの家の当主なんですから少しは自覚を……………」

「咲夜？ 鼻からアレが出てるわよ……………」

「あ、すみません。」

一体なんなんだ？ この家は……

いや、この屋敷は……

~~~~~

「では、中にお入りください。」

「ああ、どうも。」

お嬢様……ね。

俺は、あの時の待ち時間からようやく部屋の中に案内され……  
まあ、一安心したと言う事。

てか、お嬢様〃当主で良いんだよね？

さっき咲夜さんが言っていたし。

俺が部屋の奥に進むとそこには……

「ようこそ、紅魔館へ。」

と、言う…後ろに黒い羽が付いた少女が居た…………

うゝん…………

コウモリのような羽に鋭い犬歯…………

あれは間違いなく…………俗に言う『吸血鬼』だなあ。

俺、幻想郷に来てから初めて見たよ『吸血鬼』。

「はじめまして。 自分は人里で運送業を経営している上松 光と申します。」

ここは、ちゃんと礼儀良くしておこう。

「あら、礼儀が良いわね。 私を初見の人は良くナメてかかって来るんだけど…………」

確かに、こっちに來たばかりな人やこっちの非常識的な常識を知らない人々は…………彼女を見れば、最初のうちはナメてかかるだろう。

『最初』だけはな。

『吸血鬼』自体の能力はかなり常識的にも高い事をご存知だろうか

…………

その中でも彼女はひとつの名家の当主。

そこら辺の奴らとは格が違う。

…多分。

「では、貴女のお名前を教えてくださいませんか？」

「ふ、良く分かっているみたいね……………」

良いわ、私の名前はレミリア・スカーレット。

種族は「吸血鬼ですよね？」……………そうよ。」

そして、ここ（幻想郷）では一般的な『常識』など通用はしない。

……………つまり、妖怪などを筆頭とする人外種族は、容姿と年齢が結び付かないのだ。

そう、彼女のように。

（彼女が何百年生きているなど知るよしもないが……………）

今、何故突っ込んだのかは気分的な物なので、特に理由はない。  
それこそ礼儀とかがヤバイ？

大丈夫、大丈夫。

そんなことで突っ掛かるような程気は短くないだろうから。

「では、レミリアさん。貴女は何故自分のような物をここへ呼んだのですか？」

とりあえずここで人外と関わって生活し、生き残りたいのなら、初対面なら自分を下に下に下げて対応する。

これがまず必要となるだろう。

この世界に『ヒト』のプライドなど気にしている暇などないのだ。  
ただし、一部を除くが……………

だから、さっきはちょっとやってみただけだって!!

「うーんと……」

貴方を見た時に興味を持ったから……だわね。」

いや、今の詰まり方は何か違う。

もしかして、彼女は俺の何かを知っているのか？

もしや、彼女は俺の能力を知っている？

俺の能力は誰にも公表していない。

だから、本当は『誰も』知らないはずなのだ。

ホントの能力の名は誰も知らない。何かカッコイイだろ？

「そんなに警戒しなくて良いわ。

私は貴方について何も知らないし……」

「?」

「貴方を取って喰おうとも思っていないもの。」

そりゃあ、それは貴女の対応を見ればわかります。

もし貴女が俺を喰おうと思って呼び出したのなら、貴女のような妖怪の類なら誰でも変な違和感が漂いだすからな……

まあ、『ヒト』の中にある警報が鳴り響くと言った方が良いか？

「はは、それは喜ばしいですね。」

とりあえず、俺は今回、彼女と笑って話す事にしよう。

うん、そうしよう。

……いや、何だか気持ち悪がられるかもしれないから……やっぱ  
しやめるか。

じゃあ、どうする？

「？」

「何でもないですよ。」

やっぱし、仕事モードで良いや、疲れるし。

会談？ 縛り付け？（前書き）

修正番になります。

会談？ 縛り付け？

「それで、貴方はいつ頃ここに来たの？」

「えっと、去年の春くらいですね。」

「へえ、それじゃあ貴方は新しい生活が始まるっていつ時にこつちに来たのね。」

「まあ、そうゆうことになりますね。」

彼女と話が始まってから……はや数時間。

どうやら俺は彼女に気に入られてしまったらしく……話を切ろうとすると上手く話を繋げられてしまい……  
帰れないでいる。

先程なんか……

「そろそろ、夕食の時間になりますね。」

「なら、大丈夫よ。」

今咲夜が貴方の分まで準備をしているから。」

と、夕食までも帰れずに縛られてしまった。

この吸血鬼……中々やり手だな……

やはり…流石、名家の当主って言う所か。

「そろそろね……」

「何がですか？」

そう言うと、レミリアは横にあったハンドベルを手に取って鳴らした……

すると……

「お呼びでしょうか？ お嬢様。」

咲夜さんが現れた……

おい、一体貴女は何なんだい？

「夕食の準備は出来たかしら？」

「はい、先程に完了しましたが……」

「なら、良いわ。」

「夕食のお時間はどうでしょうか？」

「あと……一時間くらいしたらにするわ。」

「承知しました。」

「…………一時間後だと？」

「まだ話すのか？」

「さて、次は貴方が乗って来た不思議な物について説明してもらおうかしら。」

「マジですか？」

「長くなりますよ?」

「別に良いわ。」

「じゃあ、彼女は最初の犠牲者だ!!」

「まず、自分が乗って来たのは『自動車』と言います。  
じゆうしゃ

自動車は、原動機と言う物が出す動力によって推進し、軌条によらないで進路を変更できる、車（車輪で接地し陸上を移動する輸送機械）です。進路と速度を、運転者の意思に基づき自由に制御できることも条件です（性能と道路の状態）。

（余談：日本法においては、自動車という単語には、三輪以上の普通自動車だけでなく、排気量が50ccを超える自動二輪車も含まれる。）

英語では automobile または motor car  
と言って、automobile はもともとフランス語で、「オ

トモビル」という発音もフランス語読みから来ている。auto - 「自動的」 + - mobile 「動くもの」で、まさしく「自動車」を意味します。英語で単に car といった場合、車輪を有するもの全般を指すので（鉄道車両や非燃料動力の人力車や荷車、馬車、リヤカーなども含む）。自動車の推進には原則として人間による制御が必要ですが、実は自動運転技術も研究されており、実用化されれば文字通り「自動的に動く」交通機関になります。

次に、どうして動くのかの動作原理を説明します。

現在の自動車のほとんどは、次のような原理で動作しています。まず動力源となる原動機が力を発生させる。

← 原動機は、多くの場合、回転運動の形で力を発生、出力する。

（現在のところ内燃機関が主流であるが、外燃機関や電気モーターを用いるものも存在する。）

ちなみに、力を発生させる動力源は、燃焼機関においては燃料、電気モーターにおいては電池（二次電池、燃料電池など）を用いています。

← 次に原動機で発生した力は、クラッチ、トランスミッション、ドライブシャフト、デファレンシャルギア等の動力伝達機構を通じて、駆動輪に伝達されます。

← そして、駆動輪が回転し、路面との摩擦力により推進します。

ただし従輪（駆動輪以外の車輪）は、推進の結果として回転する。ただしこれらの過程は必須ではなく、ある種の自動車はこれらの過程の一部が違ったりなかったりと結構複雑です。一部の電気自動車は、シャフトを使わずに電気モーターと車輪をダイレクトドライブで直結して車輪を直接回転させています。電気式自動車（電気自動車とは別）では、シャフトを使わず、原動機で発電機を回して、そ

の電力で車輪を直接回します。ロケット自動車は、原動機の出力がそのまま推進力となり、駆動輪が存在しません。

それで「もう……………良いわ……………」わかりました。」

よし、ノックアウト!!

俺は、散々付き合わされた鬱憤を晴らし……………  
ようやくすっきりした。

「じゃあ、帰って良いですか？」

「それはダメ!!」

Oh……………結局ダメなのか。

まあ、それならこっちにも考えがある。

「代金の方は今回は初回限定の無料になります。」

「はあ……………」

溜め息？

「それで、これは店のパンフレットなんで、後から見てください。」

「それなら今のうちに見「それじゃあ!!」「ちょっと?」

そして、俺は自分の能力を使って館から抜け出して軽トラの中に転

移した。

「今日は散々な目にあつたな……………」

そして、人里の帰路についた俺は、夜道に軽トラを急発進させるの  
だつた……………

~~~~~

「私は、見捨てられたのでしょうか？」

こんばんは、阿求です。

今まで私は何時間も光の倉庫の前で待っていました……………

何故か？

それはですね……………

「じゃあ、明日の点検が終わったらドライブに連れてってやるよ。」

と、昨日に言われたからです。

でも、昼過ぎに来た私に待っていたのは……………人を待つ寂しさでした。

私との約束は何だったのでしょうか？

ブロロロ!!

あの音は!?

私が顔を上げると…そこにはいつもの軽トラがありました……
なんでここまで気が付かなかったのでしょうか？

「阿求!?!　こんな時間にどうしたんだ?」

やっぱり、忘れてますね……

「光?　何か心に思い当たる事はない?」

とりあえず、最初は優しく聞いてあげましょうか……

「さあ、今日は点検して(r y」

へえ、忙しかったんですね……

「いや、もう許しませんよ!!」

「いや、だから何があった!?!」

「もう許さないです!!」

私を怒らせたことを後悔させてあげます!!

「光の馬鹿!!」

バチン!! バチン!!

「痛っ!!」

バチンバチンバチン!!

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿!!」

「お前ら、ここで何をやってる？」

「へ？」

「阿求、ちょっとこっちに向け……」

「？」

ガン!!

「お前もだ!! 光!!」

「嘘!! 俺は犠牲者だつ ガン!! アアアア!!」

その夜の人里はいつもと違って静かだったとさ……

休業日からの翌日……

「はあ……………」

昨日は何だかすごく散々な目にあつたような気がする。

例えば

軽トラの中での質問攻め……………だったり

吸血鬼が俺の自由を奪おうとしてきたり……………

ここ（幻想郷）じゃ知らない人はいないほどの名家な子供当主にピ
ンタされ続けたり……………

人里の守護者に頭突きを喰らったり……………

まあ、こんだけ不幸なことが一日の間あれば十分でしょ。
しばらくは安全なはずだ（そんな訳はない）。

（……………）

俺は、朝起きると必ず布団をあげてから一日を始める。

そう、今日もそうする筈だった……
そうする筈だったのに……

「あ、起きましたか？」

なんで……

なんで「なんで？」っていう顔をしていますね。
じゃあ、理由を教えてください。

昨日、私を怒らせた光が悪いんです！！」

それ、理由になってない……

「屋敷の方は良いのか？」

「はい、朝一番に言って来ましたから。」

……そりゃあ、お疲れ様だったね。

「ところで、阿求は俺の能力を知っているよな？」

「暗示をする程度の能力ですよな？」

「そうだ。　そうだったならこれからどうなるかわかるよな？」

さあ、ログアウトしてもらおうか？

「いえ、大丈夫ですよ。」

「は？」

ペタッ

「能力を封じるお札を霊夢さんから買って来ましたから」

『……………どうやら俺に、しばらく自由はないらしい。』

『いや、こんなのはつたりだろ？』

『そうだ、こんな凶悪な物を売るはずがないさ。』

どれが正しい！？

「今日一日は昨日の分を支払ってもらいますよ。」

「はいはい……………」

阿求には勝てねえ……………

これ以上なんかやったら……………

てか、これ以上なんかやったら可哀相だしな……………

……………

「それじゃあ朝食を食べましょう！-！」

「何処で食べるんだ？」

「私が作っておきました！-！」

「マジ？すか……………」

阿求がまさか作ってるとは……………
いや、待て……………

阿求が「昨日の分を支払ってもらいます！！」みたいなことを言っ
てたよな……………

そうならば、変な薬でもはい「はい、どうぞ」

「……………」

うん、子供の割には良いものを作るな……………
えっ？

俺は、その時……………初めて『凶悪』な飲み物を見た……………

「阿求？ 何だこの黒い飲み物は……………」

「はい、これは心や身体に良い飲み物です」

……………

「どうゆう意味でだ？」

てか、本当に『どうゆう意味』で身体と心に良いんだ？

変な意味だったら取り返しのつかないことになるぞ？

「はい、それはもちろん……欲望に「言わせないよ……」何ですか！？」

「これ以上悪化させたら作者に迷惑がかかるだろ？」

「そんなの私には関係ないです！！」

「阿求、お前はさ……まだ子供だろ？」

「いや、私は九代目阿礼乙女で稗田家当主だから……合計で……」「ここもダメだ……」最後まで言わせてください！」

「ええい！！ 阿求は寺子屋に居る 阿求は寺子屋に居る 阿求は寺子屋に居る！！」

「なんで効かないんですか！！」

よし、ログアウト完了……

少し子供だと油断し過ぎたな……

~~~~~

説明しよう。

俺の『暗示をする程度の能力』は自分に声を出して言い聞かせるか、自らの心の中で言い聞かせることによって発動する能力である。

かなり使える能力であるが、『自分の限界が分からない』等の問題もあり……ある意味宝の持ち腐れ状態になっている……

以上、能力の簡易的な説明でした！！

~~~~~

阿求を寺子屋に飛ばしてから（転移させてから）数時間。

アイツもそろそろ反省しただろうから、寺子屋のあの人に荷物を届けるついでに引き取りに行くか……

まあ、『ついで』だけだな！！

本当についでなんだぞ！！

やまない……アレ……（前書き）

ぎりぎり間に合いました……

やまない……アレ……

今日は休業日から開けて一日……

だった筈が、まさかの阿求に今日も休業日にされてしまい……

俺は、散々な状態になっていた……

~~~~~

あれから数時間……

「はあ………」

俺は阿求を引き取り……

いや、荷物を届けるついでに引き取りに寺子屋へ来ていた……  
のだから!!

「なあ、覚悟は出来ているんだろうな？」

何故、ていうかどうしてこうなった!？

「いや、何が何なのか俺には分からない？」

「それは重罪だな………」

いや、だから『なんで』俺は『罪人』なんだ？  
それが良く分からないし、何かいつも通りに理不尽さ満載なんだけど……

「ちょ、待て……」

俺は阿求を反省させる為に寺子屋におくったんだぞ……！」

「それは、初耳だな………」

やっぱりか……

阿求、お前は少しはんせ」だが、私の作業を妨害したお前も悪い！」

「ちょ、待て……！」

だから人の話を………  
うわ、ちょ………  
ギヤアアア！」

~~~~~

ふふっ………ふふふ………

やりました、やりましたよ皆さん……！」

阿求は、やりました……！」

これで光が寝ている隙に………あん「阿求………」

え？

「何ですか？ 慧音。」

「いいからちよつと、こっちに來い。」

「えつと、なんでで「こっちに來い……………」
はい……………」

もしかして……………バレてしまいましたか？

あれ？ なんでか汗が止まらない……………
どうしてだろう？

「阿求？ お前は一体何をやっているんだ？」

えつ……………？

「何が『身体と心に良い飲み物です』だ？
しろー！！」
ちよつとは反省

「そ、それって……………？」

え？……………本当にバレたんですか？

「そうだ……………」

私は、鬼の様な形相をした……………

ガンー！！

「む、無念……………です……………」

ボタンー！！

「これで、ちょっとはこりてくれんな……………」

くくくくく

「うん……………え？」

「起きたか？」

「ああ」

まあ、今驚いたのは……………
布団で寝かされていたのもあるが……………

「コイツは……………いつのまにここに来たんだ？」

「ああ、阿求は寝かせて一時間くらいたった時くらいにお前に抱き
着いて寝てたぞ。　　全く、少しはお前も気がついてやれ……………」

「阿求は、まだ子供だぞ？」

「私から見ればお前も十分子供だがな……………」

阿求に抱き着かれていたからだ……………」

「……………まあ、そうだろうな。」

でも、俺は正直に今回はやり過ぎだと思っぞ……………」

「まあ、そうだろうが……………阿求が30歳まで生きられない運命だっって言っ事は……………お前は知っているか？」

「病気か？」

「いや、原因不明だが御阿礼の子は寿命が短く三十歳まで生きることとは出来ないんだ。」

へえ、確かに噂ではそのような話は聞いたことはあった気がするが……………
本当だったとはな……………」

「転生者の宿命ってやつか？」

「まあ、そうなんだろうな……………」

『宿命』ね……………」

「コイツも……………悩んで焦っているって事か……………」

「それは自分で考えてみる」

と、慧音は言い残すと静かに部屋から出て行ってしまった……………」

俺に考える時間を与えようと思ったのだろうか……

「なあ、阿求？ お前は俺のことがそんなに好きなのか？」

俺は所詮外から来た外来人。

こんな名家の当主とは訳が違う……

そうしたら……何故なのだろうか？

「なあ、俺より良い奴はもっと居るだろう？ なんで俺なんだ？」

俺は俺に抱き着いて寝ている阿求を撫でながら……
問いつづける……

「なあ、なんでなんだ？」

……まあ、聞いている訳無いか。

俺は、俺を掴んでいる阿求の手を優しく解いていくと……

「俺は、仕事があるから先に行くよ………」

その場を後にした……

やまない……アレ……（後書き）

もう、知っている方もいるとは思いますが、神・夜っちEXさんの『東方交差点』∞』に参加が決定しました。

ちなみに、参加するキャラクターは今作品の幻想の運び屋から、上松光一人です。

休業日……了（前書き）

PV15000に22000ユニークを突破！！
本当に感謝です！！

休業日……了

阿求が寝ている部屋を後にした俺は、礼を言う為に慧音の居る部屋に向かった。

それは、

それはもちろん礼を言うためだ……

あれ？

何か文がへんじゃね？

「慧音？ 入っていいか？」

俺は、慧音に確認を取る…… 「お、おい……それは……」

うん、やっぱし止めた……

何だか嫌な予感がする……

俺の体内中の警報が物凄い勢いで鳴り響いてるんだ！！！！

ドタドタドタ……！！

俺は、何も言わずにその場を全力疾走して……やり過ごした。

うん、中に入ったら俺の命はなかったかもしれないな………きっと
そうだ。

くくくく

ドタドタドタドタ!!!

「うん？」

私は、その何が走り抜ける音に反応して起きた……

「うつ………痛い………」

頭突きをされた所は鈍く痛むし………
何だか心も落ち着かない。

………なんでだろう？

慧音に怒られたから？

いや違う。

これは、そんなちっぽけなこと何かじゃない………

いや、ちっぽけじゃないですよ!!
本当です!!

………じゃあ、何？

一体何が私をこんなに焦らせて、落ち着かせないの？

わからない、わからない……………わからない……………

一体、何なんだろう？

私が何に悩んでいるのかも分からずに悩み事を抱えている私……………

いや、何に悩んでいるのかも分からずに私は悩み事抱えている……………

…の、方が正しい。

そう、やっぱり私は……………こガタン！！

？

「光？」
「」

「ああ、戻ってきた……………」

「光、今日はごめんなさい……………」

いろいろと迷惑をかけてしまいました……………」

私は、そう言って俯いた……………」

~~~~~

「光？」

あ、あつと……起きてたのか……

「ああ、戻ってきた……」

俺は何を言ってるんだ？

「光、今日はごめんなさい……  
いろいろと迷惑をかけてしまいました……」

まあ、悪かったと反応してくれたなら別に良いんだけど……

「ああ、別に大丈夫だ……  
逆に俺の方が昨日の事を考えれば悪かったからな……」

「光？　そう思うなら……ひとつわがママを言って良いですか？」

「ああ、言ってみるだけ言ってみろ。」

何か、何かと予想がつくな……

「私を、私を……」

子供扱いしないでください!!」

「あ、ああ……」

それは予想外だったな……

いや、そっちな……

まあ、それはどうでも良いとして?……

「良いですね!!」

「わ、わかった……」

やっぱり女は怒らせちゃあいけないな……

くくく

「じゃあな、阿求。」

「明日から仕事は復活ですか?」

「ああ、おかげさまでな……………」

とりあえず、慧音が言いたかったことを俺なりにまとめてみた……

昨日は昨日。

今日は今日。

明日は明日。

来週は来週と……………

時間は大切なしなきゃいけない。

と、言うことだろう。

俺も不老不死じゃない……

妖怪に喰われたら死ぬし、病気で死ぬ。

しかし、阿求は30までは生きられないと言われている……………

これは、俺の人の『宿命』とは違った……………  
転生者としての『宿命』なのだろう。

そう、この世界の形在るものには種は違えど必ず『宿命』と言う物がひとつひとつ存在する。

なら、ならば人ならどんな『宿命』があるだろうか？

妖怪ならどんな『宿命』が待ち受けてるのだろうか？

しかし、それが何であつても……

それがこの世界に存在する『条件』のような物なのだろうか？  
うがないことなんだろうな……

それには『宿命』からは逃げられないだろうから……

だが、もしその『宿命』に縛られたとしても……  
その中でどうやって『最善』を尽くすかが大切なのだろう。

そして、

例え、戦場へ死に行かなくてはならなくても……

例え、余命がわずかであつても……

例え、縛られた時を過ごさなくてはならなくても……

その人その人は考える事と努力を、この世界に存在する者として辞めてはいけない。

そう、それがこの『世界』に存在する者の『宿命』  
なのだろうから……

これが、今俺の最大級の考える努力をした結果……いや、俺の最大限な解答だ。

休業日……了（後書き）

前言撤回……

ストーリーがずさん過ぎると言う意見があつたので……  
ちよつといろいろと追加することにしました。

風邪を引いた運び屋（前書き）

修正、連結版です。

## 風邪を引いた運び屋

季節は梅雨……

ジメジメとした季節は運び屋をやってる身としても、冬の次に嫌な季節なのだが……

その季節の梅雨や冬それよりも嫌な物が俺にはあった……

~~~~~

うん〜と……

普通に今日も仕事をしなきゃいけないんだけど……

ああ、身体が怠い……

重い……

頭が痛い……

……寒い……

これだけキーワードを出せばわかるだろうが……

まあ、簡単に簡潔に言おう……

つまり、俺は風邪を引いたみたいだ……

~~~~~

ああ……………結構きついな……………

倒れるまでは行かないけど……………

俺はこの言うことが効きにくい身体を何とか動かし、仕事の準備を始める……………

こつゆう時は朝食をちゃんと食わなきゃならないんだろっけど……………食欲はないしな……………

なるべく速く終わらせたいたい俺は、とりあえず軽トラの鍵を持って倉庫に向かった……………

正直、語る気力は持ち合わせてないから……………勘弁してくれ……………

~~~~~

まず、

倉庫に来て、宅配先を見た俺は……………本当にがっかりした!!

「今日の配達先は……………酒屋に八百屋。そして。。。さんに。。。さんに……………」。

そして、人里のそとは滞納者と……鬼畜メイドの所の吸血鬼だな……」

なあ、これを見たらさ……

正直、投げたくならない？

愚痴と言うか、その人たちの陰口が湧いて沸いて止まらないんだけど……

まあ、仕事だから当然投げないけど……さ。
さ、最後にあの二人三人と会って金を出させたり、逃げ切らなかったりしなきゃならないんだぞ！！

何？

かなり……

いや、儲かるけどさ……

嫌な物は……

いや、こうゆう時はかなり嫌なんだよ……！！

「おじさん、注文票どりの包丁だけどさ……」

これだよね？」

今、俺は魚屋に注文された包丁を届けている。

体の調子が悪いのは上手く悟られないようにしてはいるが……

やはり正直、かなり辛い……

「おお、そうだそうだ…… 本当に毎回助かるね。」

「まあ、それじゃ……！」

「次も頼むよ……！」

よし、あと二軒……

……あとは滞納者とともに屋敷の紅魔館……

疲れる……けど頑張らないとな……

俺は、とりあえず自分の頬を叩いて葛を入れると……

「よし……！」

軽トラに乗り込んだ。

~~~~~

その頃の某所……

「ふふふ……」

咲夜……」

「何ですか？ お嬢様。」

「夕方に客人が来るわよ……」

「はあ……」

やるのも良いですけど、今度はちゃんとしてくださいね……」

「ふ、私を誰だと思ってるの？」

~~~~~

「霊夢?? ガタガタ震えてるけど大丈夫か？」

「ま、魔理沙…… や、奴が来るわよ……」

「誰？」

「だ、だから…… あ、悪の化身よ……」

「あ、悪の化身!？」

「そ、そうよ……………」

「で、どんなのが来るんだ？」

「軽トラよ……………」

「何だ……………」

「アイツの事が……………」

~~~~~

「へつくしょん!!」

ああ、本格的に来たかな……………？

本人はどんな事が待ち受けているかも分からねければ……………  
どうゆう風に言われているかも分からない……………

当然の事なんだとは思うが……………

この場合になると……………

流石に少し可哀相になってくる……………

人里の外の神社へ繋がる道……………

それは、現代のようにアスファルトで舗装されている訳でなければ、砂利が敷き詰められている訳でもない。

そして、全く整備に手をつけてない訳でもなく……………

昔のような平らに土が固められた道なのが神社へと繋がる道だ。

しかし、晴れていたり……………曇っていたり、長く雨が降っていない時は良い。

がな、雨が長く降り続ける梅雨になると……………

「ああ、ハンドルが取られる！！  
うっとうしい！！」

と、言うような現象が起こるのだ……………

勿論、四駆（4WD）なのにだ……………

「おいおい……………昔の二駆じゃないんだぞ……………」

おもわず、そんな言葉が漏れてくる……………

「全く、だからアイツの所に行くのは嫌なんだ……………」

まあ、これが本音だけだな……………

いや、客として嫌な面もあるが……………

ホントに途中の道のりが嫌なんだ……………

しかし、体調が悪いからか……………愚痴は出るし説明はあまり良くないし……………

やっぱり休んでの方が良かったか？

~~~~~

「よいしょ……………まったく今日のアイツは簡単に金を払ってくれるか？」

そんな、ことを呟いたからって……………簡単に払ってくれるとは限らない……………

いや、払ってはくれないが……………

「今日の荷物は包丁にまな板……………え？」

なんと……………今回の注文は着払いではない……………

いや、俺の目の錯覚じゃ……………「ホントにアンタは……………私だ
つてたまには払うわよ。」

たまに、たまに……………かよー！
いや、普通に払ってくれよ……………

「わかった、わかった……………今日は何も言う気力がないからこれ
で行かせてもらうぜ。」

「わかったわ。てかそうしなさい。」

何か割とあっさりだなあ……………

そんな感じに俺は神社を割とあっさりに終える事が出来た……………

が、これから……………あの難所が残っている。

居眠り門番、鬼畜メイド……………

そして、我が儘当主……………

何か、ホントに厄介な場所だな……………

とりあえず、愚痴っけていても拉致があかないので届けるとしよう。

どうせ現実から逃げられやしない……………

幻想郷だけ……………

「咲夜、夕方くらいに客人が来るわよ。」

「まさか……………」

「まさかのまさか。そう、この間の彼よ。」

「それで、どうしますか？」

「今回も中に入れてちょうだい。
でも、面白そうね……………」

「面白い事……………ですか？」

「その内にわかるわ。」

~~~~~

今日は雨が幻想郷に降り止むことなく降り続け、道には大きい水溜まりが出来はじめた夕暮れ時……………

「ああ、雨がうつとうしいな〜!!」

一人の少年は、その中をここ（幻想郷）では物珍しい物に乗って目的地へと運んでいた。

「ったく、ハンドルがとられて危ねえ……………」

彼の名前は上松光。

そして彼は、外生まれの外来人である。

「てか、目の前がぼやけるな……………」

彼の仕事は運送業。

通称『運び屋』と言われている。

また、彼の仕事は商業の中では要であり、彼は運ぶ者の『流通』の要を支える一員だ。

「はあ……………はあ……………」

そして、今の彼は体力が限界に近い……………

~~~~~

ザ……………

雨は降り止むことを知らないように降り続ける……………

ザ……………

門の前に居る私のことを嘲笑うように……………

ザ……………

うわ、流石に咲夜さんを怒らせたのはまずかったな……………

まさか、濡れても着替えるのに館に入れないとは……………

鬼畜過ぎる……………

今、変な奴が来たら……………めちゃくちゃエロい目で見られそう……………

ブーン！！

何か来た！？

私は一応、臨戦体制にはいグサツ！！

「アッ！！！」

「何、客人に臨戦体制に入ってるのよ！！」

そんなの、聞いてない…………

「とりあえず、貴女はそこで寝てなさい。」

ひ、酷い…………

~~~~~

「うん、…………あ！！！」

キキイイ！！！！

あ、危ない…………

てっきり、紅魔館に突っ込むかと…………

「あんぎゃゝす……………」

「え？」

後略……………

「とりあえず、今回の荷物はここにある三箱ですが……  
よいしょ！！

何処に運びます？」

「えっと、そしたらまた食糧庫に頼むわ。」

「了解しました。」

とりあえず、さっきのあれは気にしないでくれ……………

……………

「よし、ここだな……………」

ドサー！！

荷物を置き終えた俺は、食糧庫を出て……………

館の出入口へと歩き出した。

が、やはり……………

「ちょっと待ちなさい。」

目の前に彼女が立ちはだかった……………  
てか、そんなに……………アイツは根に持つてるのか？

「は、はは……………」

今日はマズインで帰らせて欲しいのですが……………」

「何がマズイの？」

「それは、たい……………」

しまった……………」

目眩が……………」

「だ、大丈夫!？」

「く……………う……………」

ダメだ……………」

今回は流石にヤバいな……………」

~~~~~

「今日はマズインで、帰らせて欲しいのですが……………」

「何が、マズイの？」

ホントに何がマズイんだか……………

ただたんの言い逃れでしょうに……………

「それは、たい……………」

彼は、その瞬間……………

突然、地面に倒れた……………

「だ、大丈夫！？」

私が声をかける……………

が、返事がない……………

これは、マズイことになった……………

）

「ふ、ふふ……」

ふふふ……

さて、今日は逃げられないわよ。」

少年は今、何を思うのか？

今回は大変なことになった……

まさか、まさか……風邪を引いてここで倒れるとは……

お嬢様ももう少し面白がって見てるのではなくて、警告をしてほしい……

彼のおかげで

仕事が増えた……

仕事が……

「まったく……」

結構、意外に頑張ってるじゃないの……

ガチャ

「どう？ 咲夜。落ち着いたかしら？」

今回私の仕事を増やした原因の私の（ry

「さ、咲夜？ どうしたのかしら？」

チッ……………

「いえ、だいぶ落ち着いて来ましたよ。 お嬢様。」

「咲夜…………… 時間を止めても当主の目の前で舌打ちはしないで
ちょうだい……………」

チッ……………

聞こえてたか……………

「何の事でしょう？」

「…………… まあ、良いわ。」

「それでは、彼をどうしましょうか？」

「はあ…………… それは、前に言ったように落ち着いたら帰らせて
あげなさい。」

「？」

あれ？ そんなことは……

「これは命令よ。 咲夜。」

「はい、お嬢様。」

~~~~~

「ふあああ……」

あれ？

知らない天井だ……

「目が覚めたかしら？」

あれ？

「あれ？      みたいな顔をしているわね。」

昨日の記憶は定かじゃあないし、突然ここで寝てたら驚くさ……

「昨日の配達後にアンタが突然倒れたのよ……」

Oh……マジでか……

「そりゃあ、悪かったな……」

「まあ、あのわがままお嬢様も今回は『落ち着いたら帰らせてあげなさい。』って言ってたから別に良いわ。」

何か、咲夜さん……………アンタはいろいろと苦労してるんだな。

「何か、いろいろと苦労してるんだな……………」

ガン!! ↑壁を殴った音

「いろいろじゃないわよ!!」

え、ちょ……………突然どうした!?

「あれだけじゃないの!! あのをがまま幼女は!!」

あの、アンタは一応従者でしょ……………

いくらストレスが溜まっていてからって言い過ぎじゃ……………

「例えば(r y」

ダメだ……………

もう何を言っても今のこの人には通用しない。

「はいはい……………」

~~~~~

「はあ……………はあ……………
少しスッキリしたわ」

あの、聞いている人のことを考えようよ。人のこと……………

てか、主人がいるこの館の中でそんな事を言っただけなのか？

「大丈夫「咲夜…………… ちよつとこつちに来なさい……………」はい……………」

(^―^;))

「で、気分が良くなってたら帰っていいわよ。」

「ああ、じゃあそうしてもらつ。
ありがとな。」

「ふふ…………… ふふふ……………」

うん、今回の当主は何も言わないで気にしないでもおく……………

「じゃあ、それでは。」

とりあえず、俺はこの気まずい雰囲気から逃れることにした……………

~~~~~

人里への帰路についた俺……………

昨日は最終的に倒れるとは思いいにもよらなかったな……………

「はあ…………… 誰か従業員を雇うか、あんな時は休業日にするか  
しないと次はマズイな……………」

まあ、運転出来る人なんか外来人に限られるから難しいんだけどな  
……………

さらに、儲けも持ってかれるしね……………

いや、事業の拡大が望めるのか？

…………… まあ今、考える事じゃあないか。

まあ、一つだけ言えるのは、  
また、ひとつ人生的には良いような経験をした俺だった……………



ツいてない運び屋……

風邪が治ってから数日が経ち、俺は身体の本来の調子に戻りそうになっていた。

あくまで、身体はまだ本調子ではない。

まあ風邪が治って、体力が回復して、身体が動くようになるっていう順序は分らないことはないだろう？

てか、そんな事よりも……「光、光ッ！！」

なんでこんな説明をしている時にお前は……

阿求は来るんだよ……

タイミングが、俺が計算していたタイミングが……

「あ、阿求…… いきなりどうした？」

いや、やっぱり言わないでおく……

いや違う、言わないでおこう……

が正しいから気にするな……

しかし、やっぱりこの間に阿求の所に行かなかったのがいけなかったのか？

「光――！　　なんでこの間は倒れるまで仕事を続けたんですか！」

いや、俺はその仕事で生活をさせてもらってるんだから、多少の無理は当然だろ…………

「いや、俺はその仕事で生活をさせてもらってるんだから……………多少の無理は当然だ。」

「いや、倒れたんだから多少じゃないでしょ――！」

「何故、そこでツツコミを入れるんだお前は――！　　俺が作ろうとした雰囲気めちゃくちゃじゃないか――！」

「そんなのは別にどうでもいいんです。」

「じゃあ、何がどうしても良くないんだ？」

『……………え？』

すると、阿求は何故か顔を真っ赤にして俯いてしまった……………

『今回は、俺は……………何もしてないぞ。』

いや、ホントに何もしてないだろ――！？

そして、しばらく長い沈黙が続いた後に……………　　阿求は顔を真っ赤にしたままで……………

「こう叫んだ……」

「こ、光!」

「え、あ、ど、どうした!」

「私に、私に……」

「？」

「お小遣をください!」

「!」

ズテッ!!

その瞬間の俺は、酷く間抜けな顔をしてたに違いない……

「い、いきなり、いきなりどうした!」

「だから、お小遣をください!」

そうつ風に言われても困るな……  
てか、理由が聞けてないんだけど……

「だ、だからどうした!」

「お小遣ください!!」

俺の心境とはまったく別方向に進んで行く阿求……

つて、阿求が俺の目の前「お小遣ください!!」

俺は、そのままの勢いで阿求に衿を掴まれ……

「ください!!」

ブンブンと……前後に振り回された……

「ああああ……」

「あじやないです!! 速くください!! 私に恥をかかせといて何ですかその態度は!？」

おい!! 今回は阿求、お前がはじめたんだろ!？」

誰もやってくれとは言っていない「巫女にあげる金はある、私にあげる金はないんですか!？」

いや、あれは……ち「わかりません、わかりません…… 私にはわかりません!! なんですか!!」

いや、今回のお前の行動が俺には理解出来ないぞ!!

「光には私一人で十分なんです!! わかりますか?」

いや、俺はお前の所有「ホントに、ダメな光ですね……」  
光にはちよっとお仕置が必要ですね!!」  
そんな

ちょ、待てお前!!

何故お仕置きを受けなきゃならん!?

てか、俺が急展開について行けない……

「ま、待て阿求!!」

俺はさっきから話をさせてもらってないんだが……  
だから、お小遣をあげないとは一言「ください!!」  
はい……

……」

~~~~~

ようやく阿求が俺の財布から札を奪ってどっかに行った所で……

「今日の配達をしないと……」

今日の配達をとりあえず、することにした……
てか、なんだこの一日の始まり方……
悪い予感しかしねえよ。

俺は軽トラの止めてある倉庫へと向かい……

え？

「お待ちしておりました♪」

どうやら今日の俺は……とことんついていないらしい……

「さ、咲夜さん……
自分は配達が「私がやっておきましたか
ら。」はい……」

ヤバい、ヤバい……逃げ道が……
ないんだけど……

「じゃあ、ちょっと野暮用があるので「逃げるつもりですか？」
え？」

俺は、咲夜さんから逃れようとしたが……軽トラに乗る前にナイ
フを突き付けられて確保された。

うん、この人から逃げたら普通に殺されかねないね……

「で、今日はどんな用事で？」

とりあえず、笑みを浮かべながら……

わかっているようなことを聞いてみた………

~~~~~

軽トラの資料？ 1（前書き）

軽トラの資料……

本編はもう少しお待ちを……

名称のとおり、軽自動車の規格に合わせて作られたトラックのことで、一般に「軽トラ」と略される。最大積載量は350kg以下になっている。

1960年頃までは三輪車が主流だったが、1960年代前期頃から四輪モデルが発展し、市場の主流となった。

また1960年代まで荷台は低床式の後方一方開きが主流であったが、1960年代後期以降は、特装車両を除けば、より汎用性の高い高床式の三方開きが一般化し、後輪のホイールハウスを荷台から排除して、荷台の実効面積を広く使えるようになったようだ。

現行車種はすべて並列2座キャビンを持つキャブオーバー式ないしセミキャブオーバー式だが、実のこと、かつてはポータートラックやマイティボーイなどボンネット式やミゼットピックアップIEのような1人乗り（マニュアル・トランスミッション車のみ）のコミューター的な軽トラックも存在していたこともある。

駆動方式はフロントエンジン・リヤドライブ（FR）が一般的だが、サンバートラックがリヤエンジン・リヤドライブ（RR）・ホンダ・アクティがミッドシップ（MR）を採用している。これは空荷のときでもトラクションを得るためである。

悪路で使用されることが多いため、四輪駆動はパートタイム方式が主流である。また、副変速機を用いて悪路走行に対応した車両も存在し、リアデフロック（リミテッド・スリップ・デフ）機能のオプション設定がなされた車種もある。

軽自動車であるため、通常のトラックと比べると車両価格や維持費（年間の自動車税や2年毎の重量税を含む車検費用）、任意保険、車両保険などが格段に安く、個人や零細事業者による保有・維持が容易である。うん、そうだろうね。

全体の寸法とホイールベースが小さい点から、狭い農道や建て込んだ住宅街の道路などの狭隘路でも取り回しが容易、という長所もある。

特に農家では、農業機械や収穫した作物などの運搬のために必需品となっており、耐候性のある2座席の車室を持つことから、日常の短距離移動の道具としての「下駄代わり」にも重宝されている。

また、その普及ぶりから、軽トラックは日本の農村風景における点景の一つにすらなっている。（まあ、人によってまちまちだけどね……）

「赤帽」など、軽トラックを使った小口輸送専門の運送業者もあれば、個人商店や建築業などでも商品・道具の運搬などに広く用いられており、日本人の生活に大きく関わっている自動車ジャンルであることはまちがいないだろう。

↓日本国外における軽トラ

軽自動車規格が日本独自のものであるため、日本国内での利用が大半であるが、日本国外の一部にも輸出されている。

アメリカ合衆国においては、日本から業者によって並行輸入されたものがごくわずかに使われているが、衝突安全基準などを満たさないため、ほとんどの州では公道での走行が認められていない。↑一応、重要項目……

そのため、牧場作業や狩猟に使うオフロード専用の作業車（ＡＴＶの代用品）、公園や大学構内などの管理作業用（ゴルフカートの代用品）として使われている場合がほとんどである。

また、韓国においては、デーヴ・ラボノダマス（＝キャリイノエブリイ）、アジアノキア・タウンナー（＝ハイゼット）など現地生産された軽トラノ軽１ＢＯＸが存在する。

但し、日本の軽自動車と韓国の軽自動車との規格の違い（例：韓国の方が排気量上限が大きい）から来る差異やＬＰＧ車が存在することなど日本の一般的な軽トラとは違う面もある。

#### ＼販売中の製品

スズキ・キャリイ

マツダ・スクラム（ＯＥＭ）

ダイハツ・ハイゼット

スバル・サンバー

ホンダ・アクティ

三菱・ミニキャブ

日産・クリッパー（ＯＥＭ）

ＣＴ&amp;Ｔ・e-Zone・・・サイズが軽規格内であること、セダン（乗用仕様）が軽自動車として扱われていることからバンノピックアップは軽トラ扱いとなるものと思われる。

#### ＼過去の製品

スズキ・マイティボーイ（４ナンバー登録２人乗りピックアップのため、軽トラの亜種という解釈も出来る。）

マツダ・ポーター

ホンダ・T360

ホンダ・TN360

~~~~~

輕トラの資料？ 2（前書き）

明日か今日の深夜に本編を投下します。

サンバー（スバル）

モデルチェンジを繰り返しつつも、現行モデルに至るまで一貫してリアエンド床下にエンジンを横置きに搭載した「リアエンジン」レイアウトを貫いている。積空差の大きい軽トラックにとっては、荷台の床下にあるエンジンは格好のバラスト役を果たすことから、空車時でも十全なトラクションが確保され、安定した走行、登坂能力を得ている。さらに、乗用車でも導入が遅かった四輪独立懸架を当初から採用しており、この2つは軽トラックの中で未だにサンバーのみが持つ特徴である。これらの構成ゆえ、「農道のポルシェ」などとユーザーから冗談混じりに評されることもある。また、全車前輪ベンチレーテッドディスクブレーキ、直列4気筒エンジンの採用も早く、エアバッグの2センサー化は、同世代の普通乗用車にも採用例は少なかった。

日本では数少ないルーツ式スーパーチャージャー装備モデルも設定されている。58PSを発生するモデルであり、高速道路での走行も多い赤帽使用などに重用されている（赤帽仕様については後述）。また、適切な位置への設置が難しくインタークーラーは非搭載ではあるものの、現行車種として2010年現在、軽トラック唯一の過給機付エンジンが選べるモデルとなっている。これはライバル車種のスズキ・エブリイ/キャリイ、ダイハツ・アトレーノ/ハイゼット等は後に乗用ワゴン系と共通のインタークーラーターボエンジンに移行したが、その後軽トラックの過給機付モデルがラインナップから消滅したのとは対照的である。

これらライバルに対して多くの相違が見られるが、直列4気筒エンジンと機械式スーパーチャージャーによる快適性と、そのフリクションの大きさが引き起こす燃料消費の多さは認知されている。

衝突安全基準の向上により、同種の他社の軽ワンボックス／軽トラックの多くがセミキャブオーバー型を採用しているのに対し、サンバーは初代から一貫してワンボックス・トラックとも全てフルキャブオーバー型を採用している（スズキ・キャリイトラックはショートホイールベース車がフルキャブ型、ダイハツ・ハイゼットトラックおよびホンダ・アクティトラックの現行モデルは全てフルキャブ型）。このため、トラックでは荷台、バンでは荷室長を他社製品よりも大きく確保しており、ガラス屋や畳屋等が一般家庭に配達する際はサンバーでないと運べないというケースも少なくない。こうした理由も、赤帽等軽貨物事業者需要と併せてサンバーの『固定客』として根強い人気・需要があるといえる。ただし、前輪が前席下に存在する為、衝突時に前輪が衝撃を吸収するセミキャブオーバー車と比べると前席の乗員保護性能はどうしても劣る。また、6代目ではフロントにクラッシュアブルゾーンを設けた分オーバーハングが大きくなった為、フロントバンパーにリップスポイラーのある車両では特に実効アプローチアングルが狭い為、水平に近い路面から急勾配に進入する際など、進入角度によってはスポイラー下部分を擦る可能性がある。6代目の中頃までは、フロントバンパープレートがバンパー下に位置していた為、バンパープレートを曲げてしまう事例が続出し、この点で不評だった

ハイゼット（ダイハツ）

1960年（昭和35年）11月に発売され、現在販売されているダイハツ車ではもちろんのこと、現行軽自動車の商標の中で最も古い歴史を持つ。初代モデルはボンネットタイプのライトバンとトラ

ックであつたが、2代目モデルから、キャブオーバータイプのバンとトラックに変更される（ただし初代のボンネットタイプも併売）。この経緯は他社の軽貨物車にも通ずる。更に9代目モデルのバン改めカーゴからセミキャブタイプに変更され、現在に至る。

車名のスペルが「H I E J E T」であることから、誤つて、あるいは何らかのネタやダジャレとして「ハイジエット」と読まれることがある。綴りがJ E Tなのに読みが「ゼット」である理由は不明。

ちなみにハイゼットトラックは2010年度（2010年1月 - 12月）の日本国内で販売されているトラック（軽・小型・普通）の車名別年間販売台数第1位を初めて獲得した。

バリエーション ハイゼットは早くから電気自動車をラインナップしていることでも知られ、その歴史は1968年（昭和43年）に始まる（9代目モデルまで設定）。現モデルでは、電気自動車に代わり、2010年（平成22年）6月までトヨタ自動車のハイブリッドシステムを一部使用した、ハイゼットカーゴ・ハイブリッドが販売されていた。

ボディーバリエーションも多く、6代目のトラックに設定された、キャビン後方を延長し、スペースを広く取ったハイゼットジャンボや、7代目以降のバンをベースに、リヤの荷室部分をオープンデッキ化したハイゼット・デッキバンなどは、オリジナリティーあふれるモデルとして人気が高い。

デッキバンは、実際にバンのホワイトボディーを切断し、手作りで生産されており、届出上は改造車、いわゆる「マル改」となる。この生産方式はのちにリーザスパイダーにも活かされた。

介護用のスローパーとリアシートリフト、省エネ仕様の電気自動車、ハイブリッド、C N G仕様、パネルバン、ダンプ、冷凍車、消防車、霊柩車などバリエーションはなんと80種類以上になる。

OEM供給　2010年（平成22年）9月28日、親会社であるトヨタ自動車が2011年秋ごろに軽自動車事業に参入することを発表し、同時にダイハツからハイゼットトラックおよび同カーゴをOEM供給することを発表した。

海外生産　急激に円高傾向が強まった1985年頃から、輸出を減らし、現地生産する方針を採った。

イタリア：イタリアでは、ピアジオと組み、1992年11月から2002年2月まで、6代目にあたる、S80系のトラックとバン・ワゴンを生産していた。ダイハツ版は「ハイゼット」、ピアジオ版は「ポーター」の名称であり、1.3Lのガソリンエンジンと、ピアジオ製の1.4Lディーゼルエンジンが選べた。当時、ディーゼルエンジンの設定は、この欧州向けモデルのみであった。生産終了に伴い、ダイハツ・ヨーロッパ有限会社（DAIHATSU EUROPE S.R.L）は、2003年10月に解散した。

韓国：韓国では、亜細亜自動車（現：起亜自動車）により「タウナー」という名称で生産されていた。韓国らしくLPGエンジンがメインで、日本では石油関連の業界団体の猛反発により普及しなかった、LPIも選べる。ガソリンエンジンは、南米向けに、輸出もされていた。中国：中華人民共和国では、異なった2系列のハイゼットが生産されている。

天津汽車：6代目のS65系が「華利」として生産されているが、車名で呼ばれることはほとんど無く、通常は、「TJ」の方が通りが良い。

トラックは「TJ1010」系で、ロングホイールベース版には本格的なダブルキャブ（TJ1010 SL1）が存在する。ワゴンは「TJ6300」系で、標準尺には標準ルーフとハイルーフが、ロングホイールベースにはミッドルーフとハイルーフが設定され、

高級グレードの「G」には、非常に派手なメツキのグリルが備わる。搭載されるエンジンは、同社がシャレードも生産していた関係から、シャレード用のCB型をベースとした、850ccのTN370Q型と、1000ccのTN376Q型となっている。

「TJ6300」系は、他のアジア諸国同様、タクシーとしても使われている。

柳州五菱汽車：こちらは、ゼブラのノックダウン生産で、部品類のほとんどを、インドネシアのアストラ・ダイハツ（ADM）から輸入し、天津汽車のシャレード用CB型、1300ccの476Q型エンジンを縦置きに組み合わせている。

これらの海外生産車には、古くから1000cc版が存在し、さらに、上級車種として「ハイゼット ゼブラ」や、ハイゼット1300が派生した。この末裔にあたるグランマックスは、2008年より日本へ輸入が開始され、同年2月からトヨタ・タウンエース、トヨタ・ライトエースとして販売されている（ダイハツブランドでの販売は無い）。

アクティ（ホンダ）

1963年に誕生した国産量産車初のDOHCエンジンを搭載したT360、後継のTN360の後を継ぐ形で1977年に登場し今に続いているホンダの軽トラック。アクティ登場の際には、ライトバンもラインナップに新たに登場した。

ボディー形状からキャブオーバーもしくはセミキャブオーバーと間違つて分類されるが、構造的にはアンダーフロア式リアミッドシップ（MR）である。この形式から農道のNSXや農道のフェラーリと言われる事もある。

空車時のトラクション確保および走行能力を得るため他社のキャブ

オーバーに対しアンダーフロア式リアミッドシップ（MR）のエンジン搭載やド・デイオンアクスル式リアサスペンションの採用、荷台までフレーム一体式のモノコック構造、高回転特性のエンジン、各メーカーの軽トラック搭載自然吸気エンジンの中でもっともハイギアードな変速比設定など、ホンダならではの独自設計を施している。

ミニキャブ（三菱）

トラックとバンがあり、550cc時代から登場したバンの豪華版はミニキャブブラボーの名がついていた。現在はブラボーは消滅している。

また、軽自動車の商標の中では5番目に古い6代・43年（2009年現在）の歴史がある。

乗用1BOXモデルはブラボー（ミニキャブ4代目・5代目に相当）、タウンボックス（6代目に相当）の名で販売されている。

また、現行型はクリッパーとして日産自動車へOEM供給されている。タウンボックスは2007年6月14日より「クリッパーリオ」の名称でOEM供給。

2011年に、本車をベースにした商用電気自動車「ミニキャブMiEV」の発売が予定されている。

キャリイ（スズキ）

この車は、1971年～2009年までの39年連続で、日本国内で販売されているトラック（軽・小型・普通）の車名別年間販売台

数第1位である。

さらに、2010年1月で累計販売台数400万台を達成した。

シャーシ構造が全く異なる（トラックがFR、1BOXがMRと駆動方式から違う）51系（10代目キャリイ/3代目エブリー）を除いて、バンタイプのスズキ・エブリーと2002年までは共通の構造を多く有していた。スズキからマツダにOEM供給を行っているマツダ・スクラムのトラックタイプは、この車両を元に一部外装パーツの変更を行ったものである。またエブリーも1981年まではキャリイを名乗り、1991年～1993年の間は上級車種以外の車種についてはキャリイバンの車名で販売されていた。

軽自動車の新規格に適合させるため1999年以降のキャリイはロングホイールベース、セミキャブタイプの仕様だったが、2005年11月におよそ7年ぶりにショートホイールベース、フルキャブタイプの仕様（キャリイFCシリーズ、ボディサイズはもちろん新規格で農耕用に特化した）が復活、追加された。ただし、OEM版のマツダ・スクラムトラックにはこの仕様は設定されていない。

なお、欧米や東南アジア、インド、オーストラリア等では排気量を拡大したモデルが生産、販売され、また大宇国民車（現：韓国GM）からは9代目（エブリーにおける2代目）が「ラボ（LABO）」（エブリーは「ダマス（DAMAS）」）と言う名称で登場。いずれも現在も生産されているが、ダマスはフェイスリフトを受けている。

ちなみに・・・2010度のトラック（軽・小型・普通）の車名別年間販売台数一位は・・・ダイハツのハイゼットであり、40年連続はならなかった。

「それは、言わなくても分かるんじゃないかしら？」

「あはは……………」

ああ、今回もどうやら俺の逃げ場はないみたいだな…………

逃げ場がないと言っか、逃げ道がないと言っか……………ほぼ完全に追
い込まれちゃったよ…………

こんな時はどうすれ「おーい！！ 速達で酒を何件か届けて欲しい
んだー！！」

でかした、流石酒屋のおじさんだ！！

「はい、ちなみに何処まで？」

「ああ、神社に慧音さんの所。そして、いつもの居酒屋に頼む。」

「優先順番は？」

「神社を先に頼む。」

あの銭（ry

が遅れると煩いんだ…………」

いや、アンタがわざわざ愚痴って遅らせているようなものだ。

てか、逃げる逃げ道が出来た…………

ホントに助かる。

「じゃあ、咲夜さん。今日は急用が出来たので行くのは無理です。」

「午後からはだ」「阿求があれで……………」しょうがないわね……………」

何故か知らないが…………

阿求の名前を出したら、すぐに下がってくれたぞ…………

「私は帰るわ。」

そう言い残して咲夜さんはその場から消えた…………

「おお、良いお嬢ちゃんが居たのにな……………」

おじさん、アンタのおかげでホントに助かったぜ……………

「おじさん、荷物はこれだけだよな？」

「そうだ。」

「じゃあ、行つて来るから。」

「帰ってきたら言つてくれ。」

いつもいつも世話になつてて悪いから酒をやる。」

「おお、楽しみに帰ってきます。」

やっぱり、現代都市とは違つて人が暖かいな……

いや、物をくれるからつて言うことじゃないよ。

ホントだよ!!

~~~~~

で、人里の外に出ようとした俺だつ たんだけど……

「行かせないですよ!!」

何故か阿求に道のど真ん中に立たれて……通れずにいる。

おい、人の財布から札を複数枚も取つておいて今度は一体何なんだ

よ!?

「あ、阿求…… 一体、どうした?」

「最近、メイドとイチャイチャしてるって言うじゃないですか!」

誰だ、変な噂を広げた奴は……

阿求に変な風に伝わったら酷い事をやるのは分らないのか!?

「いや、俺にそんな趣味はないぞ!」

「まだ、わかってないんですか……」

「だから、何でそんなデマをお前は信じ! そんなことじゃないです……」  
「へ?」

いや、何そのドス黒いオーラ……は。

「だ・か・ら!!」

光には私ひとりで十分なんです!」

何だよ、それならそんなオーラをお前は周りに広げるな……

「いや、それはお前が言うことじゃないだろ!」

てか、俺はお前「じゃあ、これを見ても……」

は？

阿求が体の後ろに隠していた手を出す……………

「そ、それは……………」

「ふ、ふふふ……………」

これなら流石の光も欲しいでしょ

う？」

あ、ああ……………

確かに、確かに……………

欲しい……………

「て、てか…な、なんでお前がパイソンを持ってるんだよ？」

そう、阿求が手に持ってるのは……………

あの有名なコルト社の『コルト・パイソン』である。

まさか、まさかのまさか！？

「阿求！！」

お前はそれを買ったために俺の財布から札を取って

いったな!!」

「え？ あ、えっと……………」

よし、図星にドンピシャ!!

これなら押し切れる。

「じゃあ、それは元から俺の物だろ？」

「…チツ……………」

今、阿求の奴……………普通に舌打ちをしたよな……………

最近、舌打ちって流行ってるのか？

「しょうがないですね……………」

これは、没収です!!」

はあ!？

「ちょ、待てお前!!」

「ダメです!! 光は私の気分を害しました!!  
これはぼつ「お前ら……………」慧音!？」

だから、

こんな時に参上したのは……………

「阿求…… お前は一体何をやっているんだ？」

「そ、それはですね…… こ、光……それならこれは光の物  
だろ？」 うっ……」

よし、良いところに援護が……

「ところで慧音。 あとからお前の所に酒屋の親父から宅配  
物があるから。」

「今じゃダメなのか？」

「例の奴が速達になってるんだよ……」

「ああ、そうか…… それなのに阿求に行く手を阻まれてい  
たと……」

「まあ……な。」

「阿求、ちょっと……こっちへ来い……」

「ひええ……」

まあ、自業自得だろ……

「じゃあ、俺は行ってくる。」

「ああ、気をつけてな。」

とりあえず……俺は、ようやく人里から出発することが出来た。

まあ、ただそれだけ……

うん、それだけ……

うん、俺…… ホントにツイてないね……

ホントに……

「そーなのかー」

「そうだ、ホントにツイてないんだ……」

人里の中だけでもこんなに足止めを喰らうなんて……

「って、お前誰だよ!？」

「忘れたのか？」

「ああ、ルーミアか…… って、お前まさか窓から入って来たのか？」

まあ、どうでもいいけどね。

俺が人里から出発して約数分……  
今は時速80キロと言いつつも俺ならありえないスピードで道を駆け抜けている。

うん、まあ……誰もいないしね。

事故らないから大丈夫でしょ。

てか、ルーミアは窓から入って来たとかは別に関係ないし……

喰われる？

いや、知り合いだから喰われねえよ。

「じゃあ行くね」

「って、速いなお前……」

「バイバイ」

ルーミアは一体、なんで命懸けでここに来たんだ？

まあ、ここ『幻想郷』じゃあそんなこと小さいことはどうでもいい  
んだろうな……

人間から考えたら小さいことじゃないけどな！！

~~~~~

さて、そんなことを言っているうちにまたまたやって来ましたよ『
博麗神社』に……

ここには人里いや、幻想郷に名高い滞納者な巫女が居ます。

知ってますよね？

知ってますよね皆さん？

そう、あの「アンタ」…… 覚悟は出来てるでしょうね？」

え？

「えっと、宅配便です。」

「そんなのわかってるわよ………」

…… えっと、こんな時、俺はどうすれば……

「とりあえず、速達ですんでここにサインを。」

「はあ……… それも分かってるわ。」

だから、アンタはそこに突っ伏してなさい！！」

霊夢はお祓いに使うような棒を振り上げる……… いや、危ないな

……

うん、この巫女………

(^| ^;)

ダメだね……

「だから、何故そうなる。」

「うるさいわ!!」

そして、棒がものすごい勢いで空気を斬りながら振り下ろされるが……

ガン!!

俺は上着のポケットに入れておいた予備弾倉を素早く取出し、それでそれを受け止めた。

うん、でも衝撃がヤバイ……

正直……力がおかしい、力の強さが……

「チッ……」

舌打ち……か。

何か最近多いな……

「とりゃあ!!」

え、次は蹴りですか!?

バキ!!

やべ、もろに喰らった……

「それでも喰らってなさい!!」

って、あれは弾幕に使うお札!!

マズイぞ、あれを喰らうとのたうちまわることになる……

たまに刺さるし……

俺はホルスターからハイパワーを抜くと、一発撃ってやった。

バン!!

すると……

ボン!!

賽銭箱に穴が……やべ……

「…………お受け取り、ありがとうございましたああああ!!」

「逃がすか!! 器物損壊でぶっ飛ばしてやるわ!!」

ああ、どうしてこうなった…………

うん、今日の俺……………はホントにツイてないね……………

ホントに……………

「うおあああああー!!」

「私のあの寶錢箱を返せえええええ!!」

いや、穴が空いただけ!!

穴が空いただけだよ!!

ブウウン!!

軽トラはかなりのスピードを出しているはずなのだが……………

「待てやコラアアア!!」

鬼畜なことに……………

鬼畜な「待てやコラアアア!!」

……………いや、もうアンタ誰だよ……………

「お前は……何をやっているんだ？」

「何って……それは悪を成敗してやってるのよ。」

急展開……

作者、急展開過ぎる……

これじゃあ読者がついていけない……

「じゃあ、光は一体何をやったんだ？」

「俺はコイツの死にそうな八つ当たりから逃げるために撃つたら賽銭箱に穴が空いた……」

「ふむ……」

よし、このままな「お前も悪いな!!」

うっそ……

ガン!!

俺が急展開過ぎてついていけなくなって最後に見たのは茶色い砂……
……だった。

~~~~~

「う……………いたたた……………」

俺は自分の家の布団の中で目を覚ました……………

どうやら夜遅くらしく……………辺りには静けさが漂う。

カチ

俺はライターでランプに灯を燈すとゆっくりと立ち上がった。

そして、夕食を作り台所へ向かう。

台所に着くと……………俺は食糧庫を開けた。

が……………

「あ……………食料品をちょうど切らしてたんだった……………」

……………うん、ついていけない。

ホントに今日はツイてない……………

そんな風に自分に嫌気がさした梅雨の某日だった……

ツイてない運び屋……

4（後書き）

地震の為に難航中……

ある朝…… 始（前書き）

明日の投稿はできないかもしれません……

ある朝…… 始

突然だが、今はちょうど夏に入り始めてエアコンが活躍し始めた頃であり、

人里の中のかき氷屋が儲かり始めたとか、冷し中華がかなりの売上を上げているとかの人里の経済的な物はともかく……

今日も俺はかなり目覚めが悪かった。

いや、俺の気分は最悪さ！！

えっ？そんなのいつものことだろ？だって……

そう、いつものことだよ！！

それがどうした！？

……ふう、落ち着いた。

とりあえず、現状を説明する。

今は起きたばかりで、起きた時に俺の機嫌を損ねる、  
いや、俺の寿命を減らすような光景が外に広がっていたんだ……

「赤い霧？      が出てる………」

そう、いつもならありえないような赤い霧らしきものが出ていた…

……

赤い霧だぞ!!

毒ガスですか？

いや、死んでないから違うと思うけど、あれは絶対身体に良くない  
つて!!

俺は赤い気体なんか見たことないしな。

まあ、とりあえず落ち着こう……………

「ふう……………」

そして、俺の『やるべき事』をもう一度再確認する事が必要だ。

俺は、とりあえず一旦深呼吸をして落ち着き、今やるべきことを考  
えることにした。

うん、そうした……

~~~~~

ガラガラ……………

やることを自分で見出した俺は、店の倉庫に入ったが……

「あちゃー 流石にこんな時は荷物がないか……………」

いつもなら宅配用の荷物がおいであるのだが（立ち入れるのは契約者のみ）……………

流石に赤い霧みたいな身体に悪そうな気体が発生している時には荷物が無く、久しぶりに空であった。

「こりゃあ、おそらく霊夢の出番だな。」

アイツはそのためにあそこであんな生活してるんだからな……………
本人には今のことを絶対に言っなよ？

あとは……………俺が知ってる中じゃ実力的に魔理沙ぐらいか？

慧音は人里を守んなきゃならないからな……………と、考えを深めながら俺は倉庫から回れ右をする。

「さて、今日は俺も久しぶりに家で静かにしてますか？」

と、独り言を決めて家でごろごろするつもりだった。

なんで過去系なのかって？

そんなの……………

うん、そんなのな……………

ガタン！！

あの人荷物を速達で置いて行ったからさ！！

「…………マジですか？」

返事など返って来る訳無い…………が、

オイ、

これは、何かの嫌がらせですか？

「ホントに、散々だ……………」

俺は突然のあつてはいけない溜め息と愚痴を漏らしながらも…………

「まあ、用が出来たからね……………」

しょうがねえ、引き受けてやる!!」

俺はすぐさまに覚悟を決めて、腹をくくった……………

ある朝………始 2 (前書き)

いろいろと多忙さが増し………

作業できる時間がとれなくなって来ました………

ある朝………始 2

あらずじ〜

えっと、朝起きたらな………

身体に絶対良くなさそうな赤い霧？ 赤い気体が外に広がっていて
さ………

俺はこんな事に何も関係がないので家の中に下がろうとしていたん
だよ………

能力があってもどこまで使えるか知らないし、スペルカードは持つ
てないし………

いや、持ちたくないけどさ………

『こんなの霊夢と魔理沙が何とかするさ』で、終わらせようとした
んだよ………

だけど………

………

あの人が速達で荷物を置いて行っちゃったんだよ………

そう、あの人がね………

あらずじ 了？

~~~~~

あは、あははは……  
そりゃあ、ないよ……

と、俺は言いたくなる……が！！

放棄するのは商業の要である『運送業』をやる人間としてのプライドに反する！！（そんな訳はない）

……… ああ、ここは人としてのプライドなんか気にしてられる世界じゃあないんだけど……

でも、届けなきゃあ届けなかったで……終わってからが酷いことになりそうだ……

宅配先と差出人が問題なんだよ……

てか……何か良い方法、いや、何か良い物はないのか？

確か、そういえば……

あの拾い物があつたな……

俺は、とある人物に約半年前、軽トラを二台貰った。

そのうちの一台は今、主力とする物。

そして、もう一台は……

「人里を守るのにしか使えない……」

そう、人里を守る為にあらゆる改造を施した物だ。

いや、嘘だ。そんな物じゃない……

もうひとつの軽トラと言うのは、実を言うと改装中で使えないのだ

……

まあ、そんな所で……変な期待をさせてすみませんね……

~~~~~

で、拾い物と言うのは……

俺は、倉庫の端に被せているブルーシートを取る……

「拾い物と言うのは……ここに有一帯の武器なんだけどさ……」

正直、あり過ぎて同じのしか使いたくなくなるんだよね……」

まあ、それだけ整備が面倒臭いとかの理由があつたりする……

「とりあえず、軽トラには機関銃をそのまんまで……手持ちがハイパワーで良くない？」

のまんま……

いや、今回は何か変えるか？

うーんと……そうしたらモーゼル大型拳銃にするか？

いや、それならワルサーP38でも……

『……………面倒臭え……………』

結局、選ぶのが面倒臭くなった俺は……

「追加に……何も持ってかなくていいや……」

結局……武器を追加して持つて行かないことにした。

うん、これ以上出発時間が遅れると……ちょっとマズそうだから……

俺は、昨日、今日の昼用を買っておいたパンを鞆に入れ、お茶の入った瓶を持つと……

「それじゃあ、行きますか……」

軽トラに乗り込んだ。

出発……………（前書き）

えっと、最近は短い続きですが……

うん、次々話くらいに少し長くなる予定なので勘弁を……………

P・S

すこし足しました。

出発……

七月、それは一般的見解だと季節の『夏』が始まる月。（個人差はあるが）

現代は主に都市部で暑さが厳しくなって、アイスクリーム類や冷たい麺類の売上高が急上昇してきたこの頃。

そんな現代が暑さに見舞われている中……
ここ幻想郷でも夏がやって来ていた。

そして、やはり幻想郷でもかき氷や冷し中華などを筆頭とする冷たい食べ物の売上高が急上昇し、運び屋のカークーラーもかなりのフル活動をしていたらしい……
まあ、そんなことはどうでもいいとして……

これは、そんな七月の某日に起きた…不自然に暑くない異変と、その場所にへと速達で向かった運び屋の話。

~~~~~

俺は、軽トラに乗り込み倉庫の外に出ると…軽トラから降りて倉庫の鍵を閉める。

そして、また軽トラに乗り込むと、俺はアクセルを踏んで軽トラを

急発進させた……

俺が軽トラを急発進させた理由はたったひとつ……

単に時間がないからな訳ではない。

そう、そんな自分が悪い訳じゃないのだ。

「お前はこんな時に何処へ行こうとしているんだ!!」

と、例の人が追いかけて……

うん、追いかけているからなのだ……

まあ、速度の違いを考えれば振り切れるんだけどさ……

しかし、後からつるさがられそうだから少し話をしてから消えるか

……

俺は、軽トラの速達を落とした。

「ちょっと、紅魔館に速達の荷物を」

「紅魔館？」

「吸血鬼が住む屋敷なんで、ちゃんとしないとマズインですよ……

……」

「んな！？ お前！！ まさか！？」

「じゃあ、そうゆうことで」

まあ、慧音は気がついてるんだろうからあの反応なんだろう。

「ちょ、待て！！ 光！！ 光！！」

残念、俺は止まりませんよ慧音さん。さんさん

俺は、慧音に手を振ってから前に視線を移し、軽トラのアクセルを踏んでスピードを上げながらギアを上げていく…………

40 50 60 70 80！！ こんぐらい  
だな。

ちなみに今は人里の中……………しかし道には誰も居ないからスピードには気にするな！！

俺は人里の中央通りを軽トラで爆走して行く…………

気味が悪いほどに人は居ないが、その分スピードが上げられるから気にしない気にしない。

てか、俺の倉庫からだ和红魔館は人里に出るまでがかかるんだよな  
……ちょうど逆側になるし・・・

まあ、そんな事を思っているうちに出口が見えてきた……

見事に人は誰も居なく……気味が悪い。

てか、それしか書くことがないよ……気味が悪い。

ホントに……気味が悪い。

うん、ホントに……気味が悪い。

森林、道中……

嘆き（前書き）

少しでも字数が復活。

次の話は今までの中で一番長い話になりそう？

森林、道中……

嘆き

七月、それは一般的見解だと季節の『夏』が始まる月。（その人により、誤差はあるかもしれないが……）

現代では暑さが厳しくなり、アイスクリーム類や冷たい麺類の売上高がアレになり、熱中症の流行りもきていたりする。

そんな現代が暑さに見舞われている中……  
ここ（幻想郷）でも夏がやって来ていた。

やはり幻想郷でもかき氷や冷し中華などを筆頭とする冷たい食べ物の売上高が急上昇し、人々は暑さに苦しむんだりと……  
あと、運び屋のカークーラーもかなりのフル活動をしていた……

まあ、それを『夏本番』と言えばその一言で済むんだけど……  
も、

まあ、冷たいことは言わないで聞いてくれ……

で、これはそんなあつつい七月の某日に起きた出来事である。  
不自然に暑くない異変と、その場所にへと速達で向かった運び屋の話。

まあ、俺の話（体験談）だ。

~~~~~

俺が誰も外に居ない奇妙な人里からかなりのスピードを出し、飛び出てから約数分。

そのままの森林に入った俺は案の定若干スピードを落として森林の中を進んでいた。

しかし、森林と言えども、何故か先程から森林のあちらこちらに何かが爆発したように吹き飛んでいたりと、へし折れていたりと、ようするに、めちゃくちゃだ……

まあ、これは誰かが『弾幕ごっこ』と言う名の殺し合いをしてる印………だよな？

普通ならば『非殺傷』なのが弾幕ごっこ。

しかし、とある時に………スペルカードは凶器となり、猛威を振るう……

それがもし、今に当てはまるのなら……俺の命はいつもと違ってかなりの確立で失われることになるだろう。

俺は緩やかなカーブを曲がりながら他に何か変な物はないか、危険なことは無いかと辺りを見渡す。

「あゝあ………こりゃめちゃくちゃだな………」

しかし、やはり辺りには弾幕ごっこ後の妙な静けさが残り………めちゃくちゃの一言である。

先ほどに俺はアレだけ覚悟を示していたが、しかし、進んだ道には行く手を阻むような奴らもいなければ……小動物が居そうな気配もない。

ようするに静けさが漂っていて…奇妙と言える。

てか、あの弾幕ごっこ（殺傷）って考えてみれば自然破壊だよな？

だってさ、外れた弾幕って何処に行く？

外れたら回りにあたり散らされるだろ？

結果、木はへし折られ、小動物は死ぬし、さらに下手すりゃ山火事だ……

うん、やっぱり幻想郷だけで現代でなくて良かった……

うん、これがもし現代だったら戦争も糞もねえよな、ホントに……

まあ、そんなことをしているうちにさ……

ズゴーン！！

ドカーン！！

ピチューン!!

ほら、あっちで終わったみたいだよ、殺人ゲー……いや弾幕ごっこ……

「……………はあ」

俺は、溜め息をつくと回りを見渡してスピードを落とす……………何故かって？

そんなのさ……

そんなのさ……………

弾幕ごっこをやった奴らが道をめちゃくちゃにするわ、木々をぶっ飛ばして行くわで……………道が危ないからに決まってるだろ!!

わからないか？

あんな現代じゃ殺戮にしかないような数の弾幕を出してやり合ったら……………めちゃくちゃだよ!!

あ……………俺は、何回同じようなことを言った？

悪い悪い……………

まあ、ホントに……………今回の異変が終わったら大規模植林と大規模

な整備をするように呼び掛けないと。

もちろん、主にアイツらを働かせてやるけどな!!

「はあ、ホントに勘弁してくれよ……」

俺は、単なる一般的な一般人なんだぞ……」

そんなことを考えながらも俺は溜め息をつきながら軽トラを進める。

そして、その後の約数分後……

「!？」

キキイイイ!!

突然、タイヤの滑る音が周囲に響いた……

森林、道中……

苦笑

『ああ、七月だ。』

『夏の始まり……』

七月、

それは一般的見解だと季節の『夏』が始まる月。（個人的な誤差はありますが……）

現代は主に都市部でヒートアイランド現象の影響で暑さが厳しくなり、アイスクリーム類や冷たい麺類の売上高がアレになってきていたりする。

いや、あと流行りの熱中症にはご注意を……

まあ、そんな現代が暑さに見舞われている中……

ここ（幻想郷）でも当然のように夏はやって来ていた。

そして、やはり幻想郷でも……かき氷や冷し中華などを筆頭とする冷たい食べ物の売上高が急上昇し……（ry

まあ、直接の関係はないが、運び屋のカークーラーもかなりのフル活動をしていた……

まあ、夏本番と言えばその一言ですむんだけど……

まあ、聞いてくれ。

これは、そんな七月の某日に起きた…不自然に暑くない異変と、その場所にへと速達で向かった運び屋の話。

まあ、自分（俺）のことだから楽に聞いてくれ。

~~~~~

俺は突然、ブレーキを踏んだ。

タイヤが勢い良く滑る……

が、何とか上手く止まってくれた……

ふう……助かった……

……で、何故俺が急ブレーキを踏んだか。

それは、このすぐ……いや、真ん前にいる奴のせい……だ。

「う……お腹すいた……」

まあ、俺の知り合いと言った所……

まあ、大丈夫だろうが。

え？

違う？

あ……

いや、違う……こりゃマズいな……

俺は、急いで軽トラから降りる。

「う………」

「おい！！      ルーミア！！      大丈夫か！？」

そう、道を塞ぐように倒れていたのは……「宵闇の妖怪」という  
二つの名をもつルーミア。

俺の推測だと……

おそらく、先程まで殺人ゲーム（弾幕ごっこ）をやっていたが霊夢  
が魔理沙にやられて、この道のと真ん中に墜落した。  
そう、

どうだ？      完璧だろ？

………自分で言う話じゃない？

そんなのさ、自分の勝手だろ？

一応、人には人「あゝあ………      また負けちゃった………  
人間を食べ損ねたな」

………うん、ルーミアはいつもこうなんだ。  
いつもの通りだから気にするな。

俺も会う度に食べて良いか？みたいに聞かれてるよ……

俺は、かなりそばに居る俺の存在に気がついていないルーミアを突然、前触れもなく持ち上げる……

「はあ！？誰、誰！？」

「ルーミア……食べ損ねたのは分かったから俺を無視しないでくれないか？

何だか悲しくなるんだ……」

「あ、なんだ光か。                    まったくビックリさせて……」

「ああ、そうさ俺だ。                    悪かったな。」

「いや、違うよ違うよ……だから勘違いしないでよう」

……まあ、良いか。

「で、ルーミアは誰に勝負を挑んだんだ？」

「うゝん……と。」

確か腋が出た派手な巫女服を着てたようなあゝ……」

腋が出てる＋巫女服＝霊夢

まあ、今現在はこの計算が成り立つな……

だってさ、他に腋が出ている巫女服を着ている巫女なんていないし。  
もし居てもここには来ないだろ。

「はあ……………でもお腹がすいたな……………光を食べていいのか？」

いや、笑って言うてるから冗談だとは思っけどさ……………怖いからやめてくれ……………

「なんだ、それならこれから行くところにタンマリ食料があるぞ。」

「本当……！」

ブンブン……！

腕を振り回して喜ぶルーミアを見ると、微笑ましくなるが……………

これだと紅魔館の食料がかなり食われそうだ……………もしかして、かなりマズイのか？

「……………ふう、とりあえず……………行くぞ。」

俺は、軽トラの方に行くようルーミアに促す。

そして、ルーミアはドアの前に立った……………って……？

「おい、ルーミア…………… お前は席に座らないのか？」

「だって…………… 何か前に見た時にこの機関銃って言う武器を使わせてくれるって言うから……………」

現状

ルーミア

涙目

泣かせたらたちが悪くなるな……………

てか、あの約束を覚えているとは……………

「分かった。別に良いよ。」

「わーい!!」

『ルーミアは、ホントに子供っぽいな。』

そう思った俺は、微笑ましくなるような光景を……………  
いや、違うか……………

だってさ…………… 考えてみれば……………

機関銃をぶっ放せることを喜んでるんだよな……………

うん、ダメだ……

歩兵にとって遠距離から撃ち込めてバタバタと倒せるような死神な重機関銃を嬉しげにぶっ放す所を想像すると……

ダメだ、青ざめする……

「ルーミア……」

「なに？」

「あまり残虐さを出すような使い方をするのはやめろよ……」

「わかった。程々にだったらいいだね？」

「……ああ」

ダメだ……妖怪には敵わない……

「それじゃあ、行くぞー！」

俺は、そうルーミアに呼び掛けると軽トラのエンジンをかけて、ゆっくりと発進した。

~~~~~

俺が、ルーミアを軽トラに乗せて走り始めて約数分。

今現在、俺は……………

「うわ、うわ、うわー!!」

無限大のように沸いて来て、そして弾幕を大量に放ってくる妖精を見て絶叫していた……………

だってさ……………スピードを緩めたら蜂の巣にされそうな破壊力と数
だぜ……………

俺だって叫びたくなドドドドド!!

「わーい、楽しいな〜」

いや、前言撤回……………後ろに殺人鬼が居た……………

いや、妖怪だから違うか……………

俺が窓から後ろを見ると……………あの機関銃を妖精に向けて撃ち込み
……………

弾が妖精の四肢の何処かを四散?させ、それを見た、上機嫌なルー
ミアが居た……………

うわ、殺人鬼じゃなくて……………ありゃあ死神だ……………

てか、弾は切れたんじゃないのか？

そう、この軽トラには最大で1000発くらいしか積めない。
あれをフルで撃ち込み続ければ約二分と少しくらいしか持たないの
だ……

『おかしい』と、思った俺はトラックの荷台を凝視する。
トラックの荷台には空になった弾の殻が普通に落ちている。

そして、ベルトは機関銃からとれており……弾は切れた状態だ。

しかし、今現在も機関銃は元気に轟音を起てて弾を妖精に向かって
撃ち込んでいる。

……え？ 轟音？

機関銃からはあんなに物凄くデカイ音はしない……

何故？

俺は一端、前を向いてアクセルを踏む力を強めて軽トラを加速させ
ると……

頭を左右に振って、とりあえず…考えるのをやめた。

何故か？

そんなのさ……カーブで曲がり損ねたりして事故ると困るからだよ。

本当のことを言えば……

もう、アイツ、ルーミアに何を言っても機関銃掃射することを止めない現実から逃げたかっただけなんだけどな……

うん、ダメだ……

やはりいくら人じゃなくても……四肢のどこかがとんでいく瞬間はいつ見ても馴れそうな気がしない……

うん、これは前世からでも心が痛む……

俺はこうして、ルーミアを半ば諦めると……

どうしようもない今の現状を見て笑った。

それはもちろん、勿論……『苦笑』だけどな……！

よし、現状をまとめよう！！

一台の軽トラは周囲に轟音を響かせながら薄暗い道を進んで行く。

それを操るのは一人の少年。

そして、妖怪の少女。

この先に何が待ち構えているかは知りもしないが……軽トラは止ま
ることを知らないように進んで行く。

運び屋は軽トラを走らせるが、今回の宅配便は速達。

目指すのは紅い館。

そして、受取人は……吸血鬼。

これが、何の意味を表すのか？

そんなのは、もちろん誰も知らない。

よし、これでルーミアの件は忘れることにし」「きゃはははー!..!」

.....うん、前言撤回.....

やっぱし無理だ.....

最初に言っとく.....

銃は虐殺する為にあるんじゃない.....

じゃあ、何の為にあるか？

そんなのさ、俺はしらねえよ。

じゃあ、アンタは砂がなんであるかなんてわかるか？

そう、物が存在する理由なんか………

そんなの分らないんだよ。

森林、道中…………… 苦笑（後書き）

実は60000PVを突破。

本当にありがとうございます！！

森林、道中……

そして湖……

「暑いな………」

七月、それは一般的見解だと季節の『夏』が始まる月。

現代は暑さが厳しくなり、アイスクリーム類や冷たい麺類の売上高がアレになってきていたり……

そんな現代が暑さに見舞われている中………
ここ（幻想郷）でも変わりなく夏がやって来ていた。

そして、やはり幻想郷の人里でもかき氷やざる蕎麦、ざるうどん、
そうめんなどを筆頭とする冷たい食べ物の売上高が急上昇し、値下
げとか値上げとか何だか。
で、運び屋のカークーラーもかなりのフル活動をしていたらしいよ
………

まあ、それを「夏本番」と言えばその一言ですむんだろっけど………
…？

まあ、悪いが聞いてくれ。

これは、そんな七月の某日に起きた…不自然に暑くない異変と、そ
の場所にへと速達で向かった運び屋の話。

俺の話だよ、俺の話………

~~~~~

ブウウウウンー！

軽トラは森林の中を前に突き進む……

辺りには妖精が居たはずだったのだが……

「アイツ……機関銃で全部吹っ飛ばしやがった……」

そう、まさかのルーミアが機関銃で妖精を……いや、思い出したくない……

「ふう、楽しかったけどお腹がすいたな」

いや、アンタのせいで……  
もうめちゃくちやのめちゃくちやですよ、ルーミアさん。

まあ、こんなくだらな会話はいくらにして……現状を話そう。

今、俺が乗っている軽トラは森林を突き進み、湖が先に少し見えるくらいまでになった。

そして、また湖の方では……………

バツシャアアアアアッ！！

ビシャアアッ！！

ドカーン！！

殺人ゲームが……………

いや、弾幕ごつこと言う……………名前だけは良い遊び……………だな。

が開戦し……………あそこら辺は湖だから自然は破壊しないとも言えども……………水中の生物はさぞかし迷惑だろうなあ……………

で、話は変わるが……………俺が何故スペルカードを持てるのに持たないか。

それは、

妖怪や妖精はいくら身体が吹き飛ばされようと……………一度は回復する。多分、多分だけ……………

弾幕ごつこは誤差はかなりあるが、設定は非殺傷が普通だ。

……………でも、妖怪や妖精なら吹っ飛ばし戦闘不能にすれば良い……………  
と言う、人間には鬼畜な……………いや、最悪な認識……………

いや、人間でも一部はやってるけど……………

とにかくヤバいんだよ……

一度スペルカードを持ってないのにけしかけられた時は……死ぬかと……

まあ、勝ったから生きてるけどな!!

どうやって勝ったのか？

そりゃあ秘密さ……

うん、秘密……

……だから、俺はスペルカードを持たないし作る気もさらさらない。

てか、20前の男が弾幕ごっこって……名前にむさくさくてさ、何かあれだろ？

「そーなのか」

「ああ、だから俺はスペルカードを持たないんだ。」

「へーそーなのか」

うん、食べていい？って言わないから一応、理解してるみたいだな  
……

どんな基準なのかって？

そりゃあ、親しんで行く間についた勘だよ、勘。

あと、心の中を読まれたのは気にしない、気にしない……

「で、ルーミア……」

「何？ 光？」

「お前はいつの間に助手席に座ったんだ……？」

「そんなのは別にどうでもいいでしょ？」

「あ、ああ……」

おいおい……随分無理矢理だな……

てか、ホントに妖怪には勝てないし、分からん……

~~~~~

んで、また話は飛ぶが……先に進んだ俺は……

「だから、勘弁してくれよおおおー！」

絶叫しながら……
湖の横道を通って……いや、爆走していた……

何故か？

そんなのドカーン……！！

「……………」

いや、またまた流れ弾かよ……

「むつきいい！！　なんでアタイの攻撃があたらないのよ……！
こうなったら……雪符「ダイヤモンドブリザード」」

や、ヤバイ……

「はあ、こんなのぬるま湯よりも緩いぜ……………」

おい、魔理沙……………お前の仕業か……！

てか、言葉遣いが間違ってるぞ……！！

ぬるま湯よりも緩いって……………緩いじゃ違う……

てか、もう普通の水じゃねえかよ……………

で…あの雪符「ダイヤモンドブリザード」は流れ弾も凄いだぞ!!

だから避けきる所か凍り付けに……

カチン!!

……嫌だ、もう嫌だ……

「あ、あそこのあの軽トラは光じゃん……
光!! お前は何をこんな所でやってるんだ!!」

つて魔理沙……アイツはホントにいたい何者だよ……

余裕こきやがって……

「光? あ、あ!!」

ほら、魔理沙のせいでチルノも気がついた……

ほら、こっちを見て手を振ってる……お前こそ集中しなくて良いのか?

「ありや? 隙がありすぎなんだぜ!!」

ボーン！！

……

「なあ、ルーミア……」

「何？」

「何だか俺さ…… 何だか無性に悲しくなってきたんだけど……」

「…… 何だかわかる気もする……」

だつてさ……

魔理沙が挑発

←

弾幕ごっこ

←

雪符「ダイヤモンドブリザード」

←

魔理沙が俺を発見。

←

チルノが俺の方を向いて手を振る。

←

隙をついて魔理沙が勝利……

いや、それなら魔理沙…… お前、早く終わらせれば良いじゃねえ

かよ……

お前だったらさ…チルノくらいならすぐに片付くだろ。

何もさ……そんなに人のザッパーン!!

………うん、この話はやめよう。

何だか無性に悲しくなる………

「あゝあ………　チルノちゃんもやられたかゝ
つまらないなゝ」

おい、ルーミア………少しは友人を同情してやれ………

「はあ………」

「じゃあ、私も面白そうだからやって来るよ。」

おい、何故そうなる………

「　ああ、アイツだから手加減はいらないぞ………」

「バイバイ」

………ふう、ホントにここ（幻想郷）は無茶苦茶で理不尽さ満載だな………

まあ、それがこの幻想郷と言う世界の売りなんだろうけどな……
自由、うん……… 自由奔放な世界だ。

現代の都市部とは違って人里は活気にあふれてるし、人里の外では妖怪や妖精等の現代じゃあ忘れられたような存在がいっぱい居る。

うん、この世界はやっぱり素晴らしいんだろうな………

「貴女は食べていい人間？」

「ありゃ、何だお前は？」

……… 素晴らしいかもしれないけど………

危ないから巻き込まれる前にここから離れよう……… か。

俺は一度は下げた軽トラのスピードを、アクセルを強く踏み締めて
加速させた………

ガコン！！

勿論、クラッチを踏んでギアも調整してるがな………

~~~~~

ドカーン!!

ありゃあ………

この先でこの間抜いた門番が霊夢と弾幕ってるよ………

「しょうがない、突っ走るぞ!!」

俺は本日、三回目の修羅場へと突入……

そして、目的地の紅魔館への距離も………  
あと少しとなった。

鍵を握る紅い館……

威勢

俺は、スペルカードを持たない。

いや、作らない……

理由はいろいろとあるが、とにかく…戦いは避ける。

それが、俺の生き抜く為に最低限心掛けられる方法だから……

~~~~~

「うおおおおー!!」

珍しく、弾幕を見て叫ぶのではなく、威勢をあげる俺。

うん、珍しいね。

ドカーン!!

でもさ……止まって死ぬよりはマシだね……？

で、あの門番の出す弾幕は何か綺麗だけど……実は格闘家みたいらしいし。

……いや、今はこんなまとまりのないことを考えている場合じゃ

ない！！

キキイ！！

門の前に着いた今からが勝負なんだ！！

くくくくく

門の前に着いた……今からが本当の勝負だ……

何故、勝負なのか？

じゃあ、問題……

1

流れ弾に被弾しないようにする為。

2

あの暗殺者の機嫌をとらなきゃいけない為。

3

単に、自分がこの危険な場所から離れたいから。

さて、どれでしょうか？

……………正解は、言わなくても分かるよな？

……………てか、そんな事を考えてる場合じゃねえ！！

「やべえ！！」

俺は、紅魔館の開いている門をくぐる。

そして……………

「宅配便ですー！！」

速達を受けましたので届けに来ました！

！」

庭を駆け抜けながら叫んだ……………

まあ、案の定……………

ドンー！！

ここで働いてる妖精メイドから……………掃射を受けている……………

正直、咲夜さんが来ないと……………このままじゃ普通に死ぬ。

だってさ……………ほぼ四方から掃射されているんだぜ……………

当然、掠ったりしてる……

ただ、まともには喰らってない……こいつら、とんでもないくらいに実戦馴れをしてないな……

それが、わざわざ外しているのか……

……まあ、俺は死なないならどちらでも良いんだ。

でも、ホントに全力で重い荷物を持って駆け抜けるのは……

疲れる……

能力を使え？

いや、それはしない……

なんかさ……能力を使つてるとしみじみに思うんだ……

もし、この能力を使う事に依存してしまったらどうなる？

そしたら、人間じゃないだろ……

ってね……………

正直、俺は『暗示をする程度の能力』
と、言ってるが……………

実は能力は使わなくてもなる人は自然に強化する。

ホントは最初なんか……………

自分の擦り傷や軽い怪我を治せる程度だったんだそ……………

それが、今では……………

ものは作れないけど直せたり、人に変身することが出来たり……………

もう、考えてみるとさ……………『暗示』の次元を遥かに超えちゃって
るんだよな……………

で、この能力を乱用することになれば……………

……………

いや、何でもない……

しかし………

本音を言う……

「俺は、この能力で自分自身が人間じゃないような気がしてならない………」

ただの人間には、一般人な俺には強力過ぎるってな。

鍵を握る紅い館……

威勢（後書き）

70000又は80000PVの記念に番外編をやりたいと思って
ます……………

が、番外編のネタが浮かばなく、書けない状態です……

何かこの作品で見たいリクエストがあればここか自分にメッセージ
をください。

とりあえず、よろしくお願いします……………

鍵を握る紅い館……

運命

実は俺……

もうひとつ別に能力を持っているんだ。

でも、それはただの一般人には強力過ぎる………

そう感じる今………

~~~~~

「はあはあ………」

あれから何分走った？

それは、分からないが………

「？」

とりあえず、今分かることは……突然、気がついたら攻撃が止んでいたこと……

それと「満月……か。」「この屋敷のテラスにたどり着いていたこと……」

そして……

「ようこそ、紅魔館へ」

当主が俺の前に居て、俺のことを出迎えたことだ……

~~~~~

当たらなかった攻撃。

無我夢中でたどり着いたのはテラス……

そして、当主に迎えられる……

これは、運命か？ それとも偶然か？

俺は、一度視線をレミリアの方から満月の方へずらす……

「ふふふ…… また、会えたわね……
私はいつでも大歓迎よ。」

「そりゃあ、どうも……」

大歓迎……………か。

そりゃあ、嬉しいけど……………今回はかなり手荒だったな。

俺は、そんなことを考えながらも満月から視線をまた、レミリアへ戻す。

「ちょうど暇だったから教えてあげるわ。」

「何を？」

「今回の異変のことよ。」

今回の異変……………か。

はつきり言って…完全に俺とは無縁な話だな……………

「いや、別に言わなくて良いさ……………」
後に俺以外の奴ら

が来てしまったら言わなきゃならないし……………

俺は、別に知りたいとは思わない。」

俺は、はつきり言って……………今回の異変とは無縁だ。

ただ単に……………ここには速達が入ったから荷物を届けに来ただけ。

「あら、そう……………じゃあ、今日は何の用で来たの？」

……………はあ？

「速達があつたんだよ……俺は、単にそれを届けに来ただけだ……」

俺は、知っていたもんだと思っていたから正直……呆れた。
てか、咲夜さんの人使いの荒さに泣ける…

「へえ……咲夜も分かってるじゃない。」

「ああ、レミリアがそうゆう風に言う理由は良く分かるよ。」
分かる、その意味はよく、よく分かる。

「それじゃあ、久しぶりに喋りましょうか。」

「ああ、そうだな……別に急ぐ用もある訳じゃない。」

~~~~~

「はあ……ホントに面倒臭いわね……」

「お嬢様の所へは行かせないわ。」

館の別の場所ではまた弾幕ごっこが始まっていた最中、館のテラスではお喋りと言う名の暇潰しが行われていた。

「いいえ、これは偶然なんかじゃないわ……ちゃんとした運

命よ。」

「ああ、偶然もすべて運命上では決まっている。って言うことか？」

「そうね、すべては運命に縛られている……」

無情で悲しいかもしれないけど貴方が言う通り、そういことよ。」

へえ、何だか参考になるな。

でも、無情で悲しい………か。

「じゃあ、肝心な事を聞く。

………良いか？」

「何？　言ってみなさい。」

「じゃあ………そうさしてもらおうか。　　今回の異変は、

ガッシャアアアン！！

………！？」

今、物凄く………

いや、物凄い音がしたよな………

とか、窓が………

いや、あれは窓ガラスが割れた音じゃねえ！！

まあ、俺がおかしくなつてなかったらの話だが……

「居た!!」

全く、アンタは私に手間をどんだけかけたと思ってるのよ!!」

うわ、ホントに来やがった……よあいつ。

てか、魔理沙は何処に行った？

「どうやら……」

もう、潮時みたいね……」

おい、めちゃくちゃ自分が負けるって言つのが分かってるじゃねえかよ……

ホントに、何だか虚しくて悲しくなるからそんな変なことを言わないでくれ。

「光、さつさと片付けるから…… 貴方に咲夜は頼んだわ。」

え？

今、レミリアはなんて……って、まさか!？

さっきのあの音は……

「す……すみませんお嬢様……」

わ…たしがふがない……………ここに……………」

俺の予想が的中し、咲夜さんはテラスに横たわっていた。

しかし、見た所、目立った出血はなく、血は出てないから？幸いガラスは刺さってないみたいけどさ……………何か、また語順がおかしいか？

「で、なんでアンタはここに居るのよ。」

おい、俺が情報を処理して思案中に入ったタイミングで割り込むな

……………

「はあ、まったく呆れる。俺は咲夜さんからの速達をそのお嬢様に届けてたんだよ……………」

「はあ？ アンタ、何を言ってるの？」

いや、はあ？ って何だ……………」

てか、こいつは酷いな……………俺だって好きで来た訳ではない。

そうだ、きっとそうだった。

いや、うん、そうだろう。

「アンタがそんなことをしてたわ」でもな、霊夢……………」

「何、何か文句でもある？  
私はまだアンタに話していたのよ。」

ああ、それはない訳がない…  
絶対にない訳が無い！！

「ああ、あるさ… それは、そのお前の態度だ！！」

ああ、文句ならめちやくちやある……  
貯まりに溜まってるさ！！

「あ………何、私に刃向かう気？」

「それは、どうなんだろうな」

ああ、何だよ面倒臭さ……

「……………」

しかし、いきなり場の空気がいきなり凍る……

いや、ピリピリして来ていると言った方が良いな。

「そこをどきなさい…………… そうしないと」「そうしないとどう  
するんだ？」「……………」

ああ、この答えは分かってる……………

分かってるさ…………

しかし、な。

「強行手段を取らせて貰うわ!!」

シュー!!

ほら、やっぱり来たよ。  
それじゃあ…………

バン!!

俺は、ホルスターからハイパワーを抜いて、瞬時にお札を撃ち落とす。

「!？」

ホントにやる気?  
あんた……………」

「ああ、いつもやられっぱなしじゃ嫌だからな。」

俺はそう言い、顔に笑みを浮かべながら、霊夢にハイパワーの銃口を向ける。

俺が今使っているハイパワーは、ハイパワーでもこれはD A。

つまり、ダブルアクション。安全装置さえ解除してあればシングルアクションと違い、連続的にも撃てる。（弾数は13発）

そして、

9mmパラベダムが拳銃弾の代名詞になる理由を作った、この拳銃がそのスタイルが俺は好きだ。

「アンタ……やっぱり生意気ね。」

「いや、流石に同年代に生意気とか言われたかねえよ。」

さらに、お前は対して日々に対して俺より努力してねえだろ。こっちはいつも頑張ってたんだよ。

商業の中に流通業が抜けたらその後やその前の何も、何にも成り立たないんだからな！！

「へえ、随分と強気ね。スペルカードも持たないくせに。」

「いや、銃とスキルがあれば十分さ。

最悪、軽トラの車載機関銃があるしさ。」

「スキルって……アンタ戦闘は全くダメじゃない。」

「いや、ルーミアと殴り合って普通に勝てるけど。」

「アイツは何か何処か抜けてるじゃない。」

「いや、この間熊みたいな妖獣に囲まれたけどぶつつぶしたぜ。」

「それは、ただアンタが『馬鹿』な奴なだけよ。」

……何か、傷つくな。

「ほら、そんな余裕をこいてる隙なんてあるのか？」

バン！！

バン！！

俺は、霊夢に向けて銃弾を発射する。

空気を切り裂く勢いで9mmパラベダム弾は霊夢に向かって飛んで行くが、「アンタの銃は一応、飾りものじゃなかったのね。」

普通に避けられる。

まあ、飛んでる時点で照準が合う訳無いのだが……狙撃銃や機関銃じゃないしな。

「……でも、アンタに構ってる時間何かないのよ。私も早く神社に帰りたいし。」

「それじゃあ、これで終わら「レミリア、あとは任せた!!」」

「!？」

「ええ、なかなか良い演技だったわよ。」

「まあ、そりゃあどうも。」

「演技!？」

俺は、最後に何故か霊夢が飛ばして来たお札を銃弾で撃ち落とし…  
…そのまま咲夜さんの所へ駆け抜けた。

今のは、霊夢をこちらに近づけて咲夜の安全を確保する為の演技。  
ストレス発散も兼ねてはいるが。

しかし、俺がいくら何をやろうとして頑張ろうとしても……さ。  
すべてはもう決まってるようなものなんだけどな………

それが今回に定められた『運命』なのだから……

## 終幕 後日談 1（前書き）

中途半端ですが、後数話でこの章は終わります。

理由は、後に話の中で使うからです。

どうか突っ込まないでください……………  
お願いします……………

## 終幕 後日談 1

ブウウウウンー！

「はあ…………… なんて俺が全部……………」

「つべこべ言わない……………」

「はいはい……………」

俺は今…………… 昨日の異変時に壊れた紅魔館の修理を手伝ったために材料等をすべて乗せて、  
昨日のおかげで木がなくなった道を軽トラで走っている……………

「で、咲夜さん…………… ホントに大丈夫なんですか？」

「大丈夫よ…………… そんなやわな奴じゃないわ。」

はあ、そうですか……………  
でもさ…………… あのガラスの割れ方は凄かったな……………

ガッシャアアン！！…って何…………… 恐ろし過ぎる……………  
てか、それで無事なこのメイドは何なんだ？…ってなる…………… よ。

「でも、昨日は散々だったな」

「それは私の台詞よ……………」

……………え？

そつえば昨日の肝心な部分が抜けてる？

そりゃあ、多分これから出て来るさ……………

なんたつてこれは俺視点の話なんだからな。

「あ、そつえば……………」

「突然、何？」

「荷物の中味つて何だったんだ？」

俺は、昨日の速達の中味が異常に気になっていた。

ちなみに荷物の大きさは1・5リットル×6が入ったくらい  
の大きさの箱だった。

けつしてダンボールではない。↑これ、大事だよ。

そして、そんなには重くなく、逆に軽いと言えるくらい。

……………だからこそ、俺は中に何が入っていたのかが気になる。

「……………はあ。 分かったわ……………着いたら見せてあげるわよ。」

「分かった。」

とりあえず、紅魔館まではあと約十分くらいかな……………

「で、光……………」

「なんだ、咲夜さん？」

「……………昨日、なんであの巫女と敵対するような事をしたのよ？」

……………ああ、そんなこともしたな

あれはあれで……………俺はあの後、終わってから霊夢とマジで勝負になって……………フルボッコにされました……………

博麗の巫女にただの一般人何かが勝てるわきゃねえよ……………

「昨日のアレを見てたのか？」

「ええ」

「気絶したんじゃないかったのか？」

「失礼ね！！ ちゃんと見てたわ！！」

何か恥ずかしいなあ…………

「ああ、あれはあのままだとレミリアと霊夢の弾幕ごっこに咲夜さんが巻き添えをくらいそうだったんだ。開始そうそうにな。」

「そう……………ね。確かに考えてみればそうなるわね……………」

「何だ？ 今日妙に素直だな？」

「っ！！ 私だってそんな日は……………  
いつも私は普通に素直じゃない！！！」

「わはははWW」

「わ、笑うな〜！！！」

意外に、咲夜さん……………アンタおもしれえぞ……………

「悪い悪い……………ふう。」

軽トラの中で談笑しながら道を進む。

うん、昨日とは違って平和だなあ……………

やっぱり、平和が一番だ。

~~~~~

ガタン！！

「で、咲夜さん。この荷物は何処に置けば良いんだ？」

「あ、えつと……ちょっと待ってて。」

意外だな……

うん、こんなこともあるのか。

数分後………

「お待たせしました。」

「！？」

「お嬢様がお呼びになさっているので案内致します。」

でた、仕事モード………

「仕事モード………ですか………」

「まあ、切替が面倒臭いので。」

やっぱり、意外に大雑把だな………アンタは………

「お嬢様、客人を連れて来ました。」

「入りなさい。」

……だから、咲夜さん……

その能力は心臓に悪いって……

「失礼します。」

俺は、ここへ最初に来た時と同じように咲夜さんについて行く。
そして、少し進んだ先には……

「咲夜、もう良いわよ。」

この屋敷のわがまま当主が居た……

~~~~~

「一日ぶりだな、レミリア。」

「そうね………で、今回の請求額はどれくらいなの？」

「ああ、そうゆうことが……

それなんだけどさ………今回は無しで。」

「へ？」

「だから、タダだって言うことだ。」

「ああ……………そう……………」

ははははWW

あの目が点になる瞬間を見たか？

おもしれえ……………

まあ、ふざけるのはこれくらいにして……………

「で、聞いた話だと…今日は神社に居たそうじゃないか。一体どうしたんだ？」

「ええ、さっきまではね……………」

何かなんだか…表情が突然暗くなったな……………

「で、終わったから聞きたいことがあったんだけどさ……………」

「何かしら？」

「なんでレミリアは異変を起こしたんだ？」

昨日は聞かなかった……………けど、本当は知りたかったんだよ…！

「……………ふ、ふふふ…プツ…！」

「って、笑いすぎだ…！」

なんでそこまで笑われる必要があるんだ……

レミリア……

「昨日のこと……思い出して……プ、ププッ!」

……

「ああ、昨日は俺でも格好つけすぎたとは思っけどさ……  
笑いすぎだ!」

「あ、あははは!」

「って、なんで逆に悪化するんだよ!」

その後、レミリアは咲夜さんが戻って来るまで笑い続けて……

いや、何でもない……

~~~~~

「じゃあ、また荷物を預かった時に来るよ。」

「ええ、分かったわ。」

俺はそう言っただけで軽トラに乗り込み、エンジンをかけて……発進させる準備を完了させる。

「じゃあ、またな!!」

俺がそう言ってここから出発しようとした時……

「待って!!」

「なんだ？ 何かあったか？」

俺は咲夜さんに呼び止められた。

「ありがとう……」

「はあ!？」

「だから…… お嬢様のわがままに付き合ってくれて……ありがとう……」

確かに……わがままかもしれないけどさ……

「いや、俺はやるべきことをやったただ…… 依頼があれば物は運ばなきゃならないし、それがなきゃあ……俺は生活していけないからな……」

俺は咲夜さんの方へ視線を向ける……

すると、あれだけ……

いや、何でもない……

でも、彼女が下手に回って申し訳なさそうにしているのは本当話で

……… なんだか変な感じがする。

「ああ、そう思っならこれからもうちを使ってくれ。」

俺はそう笑って返した。

終幕

後日談

2 (前書き)

終幕 後日談 2

俺は、紅魔館を出て今は人里への帰路についている……

辺りは暗くなつてきており、いくら軽トラであっても夜になる前までに帰らなければ自分の身に危険が出て来る。

さらに、夜の場合は機関銃の照準が暗くてつきにくいために反撃する手段もなくなつて……

まとめると。

ホントに夜の人里の外は、人間にとって危険なのだ……

まあ、ルーミアとかチルノとかを連れていればほとんど周りにはよつて来ないし……寄つて来てもバラバラにされるか、凍り付けにされるだけなんだけど……

物騒な話？

ここでは常識なんか通用しないよ……

え？

何故、そんなに俺は人外の知り合いが多いのか？

それはな……俺がここへ幻想入りした時に出会ったのがかなり親切な奴だつたんだ……

まあ、アイツには感謝してるよ…ホントに……

森の中に投げ出された状態だったら、多分間違えなく喰われて死んでたよ……

ルーミアとか以外にも居るしさ……

最初から軽トラもあつた訳じゃないからな……

で、俺だってルーミアに喰われかけたことがあるんだ……

あの時はガチでやり合ったなあ……

スペルカードが発動した時はホントに死ぬかと思ったしな……

……あつと、そんなことを言っていたら人里の中にもう着いてるじゃないか……

…俺は、自分の家の倉庫へと軽トラを進め、軽トラを倉庫の中に止めると……

「ただいま」

誰もいない倉庫でただいまと言った……………

~~~~~

今回の異変は俺にとって初めての経験で……………  
こんな形で関わるとは自分の心の片隅にも思っていなかった。

それに…巻き込まれ方も災難っちゃあ災難で……………必ず弾幕ごっこ  
が始まって死にかけたり…

咲夜さんがああゆう時に限って出てこなく……………妖精メイドに掃射  
されたりとか……………

統計的に今回はかなり不運だったような気がする……………  
いや、そうだろう。

しかし、それによって自分に……………

いや、逆に何が残った？

はははは……

正直、何を学んだか良く分からん……

分からないから分からない……うん、そうだ。

今回はいろいろと衝撃的過ぎて分からなかった……で、良いよな？

ダメ？

じゃあ、ひとつ……

この世界は『素晴らしい』が『理不尽』だ……

）  
第二章  
完  
）

終幕 後日談 2 (後書き)

いずれ書かないといけない話。

光の幻想入りした時の話（永夜の時ぐらい？）

ルーミアに食われそうになった時の話。（リクが自分が書きたくな  
った時）

軽トラ秘話ww（未定、ただいま考え中）

阿求の寝込みを襲おう大作戦ww（メッセのリクにあつたww）

運び屋は思ったらしい？

(リクエスト募集の項目はこちら)

(前書き)

第三章……………製作開始。

リクエも募集中。

運び屋は思ったらしい？（リクエスト募集の項目はこちら）

あの異変から数日が経ち、人里ではもう何も無かったような雰囲気になってる。

確かに、そんなには引きずりたくもないのは分かるが………流されてすぐに風化してしまうのも死にかけた自分が何だかバカらしくな  
って来るようで…

嫌だ………

と、俺は思っ………

だいたい、人里に被害はなかったものの帰ってきてからが慧音のア  
レや阿求の……いや、やっぱり何でもない………  
話さないのが俺の為だ………

てか、ぶっちゃけるとさ。

今回の異変は人里からは俺しか行ってないから、俺しか詳しい内容  
は知らないんだよな………

その分…死にかけたけどな！！

第三章？ はじまり！！

~~~~~

いづれ書かないといけない話。(リクも受付中) (本編または番外)

光の幻想入りした時の話(永夜の時ぐらい?)

ルミアに食われそうになった時の話。(リクが自分が書きたくな
った時)

軽トラ秘話(未定、ただいま考え中)

阿求の寝込みを襲おう大作戦ww(メッセのリクにあったww)

酒屋の親父の愚痴話(これもリクww なぜ希望があつたww)

滞納者には鉄槌を……(リクエスト 4/21追加)

運び屋は滞納者の為に……(リクエスト 4/21追加)

リクエストがあれば合間を縫って書いていきますので、感想欄かメ
ッセにください。

当然、リクエを出した人の名前は非公開ですよ。

運び屋は思っただらしい？ (リクエスト募集の項目はこちら) (後書き)

一応、リクエを待つてまゝす。

運び屋の休息时间…… 1（前書き）

ちよつと、急展開で内容が酷い……

と、言う意見があつたので話の内容を修正して出し直しました。

すみません……

運び屋の休息时间…… 1

季節は夏。

夏と言えばあなたは何を想像するのか？

……例をあげよう。

例えば……道路。

「真夏の太陽の光で熱気が漂うほどに熱くなったアスファルト」

と、自分ならそうなる。

例えば……

えっと……

まあ、

あなたもそうやってイメージを広げてみてはどうだろうか？

~~~~~

ああ……アチい……

今日もここ、幻想郷では相変わらず真夏日が続き……

運送業という力仕事をする俺にとってはかなりの疲労感とダルさを体に生んでいた。

で、そんな暑さとは反比例するように俺の仕事は増え、俺を苦しめ  
……  
って、愚痴を言ってる場合じゃない……

今日分の配達は終わったものの……今は12時。  
一番暑くなるのは今からだ……

今日はすんなりと配達業務が終わったのにな……

「ったく……やる気が削がれるよ……」

これに関しては、皆さんに同意してほしいところ……  
夏場なら皆さんもわかるだろ？

「はあ……」

俺は、ため息をつく……

「で……何やってんすか？」

俺はねっころがっている長椅子から上半身を起こして、声の聞こえた方を見た。

「ああ、見ての通りに長椅子にねっころがってだれてる。」

「ああ、そうすか……」

で、今俺に話しかけたのは……かき氷屋兼食事処を経営する……

俺と同じ境遇の少年。

名前？

ああ、アイツは中神洋っていうんだ。

歳は18で料理を専門に高校でやってたらしいぞ。

学科、又はコースの名前？

それはあいつに聞いてくれ・・・

俺は洋じゃない・・・

あ、そういえば・・・

何でも、親が料亭をやってるらしいよ……………

これはすごいことだよな？

「ああ、だりい……………」

で、俺は店のなかにある長椅子のひとつをねっころがってそれを占領してる訳だ。

迷惑？

大丈夫だ、ここのかき氷はだいたい歩きながら食う人が多いんだ。

だから店の中は満杯にならないし、変な目で見られる心配もない。

さらにここは……………

と、言うよりも・・・ひとつだけ、聞いてくれ。

最近、家や倉庫、そして事務所にいると・・・

誘拐されたりさらわれたり・・・何か、すごいことになるんだ。

以前に……家で昼寝をしてたら何故か紅魔館で起きたりとか……………

だから、今度は倉庫の外にある簡易的な事務所で昼寝をしてたら……

……

阿求が。。。で俺に乗っかって来たり（ひらがな三文字、漢字なら一文字……）とか……………

あとは……押し入れの中で寝てたら……………

阿求がまた。。。でいて・・・

それでもって……

まあ、

まとめてみると分かるように、俺の家又は事務所に安全でゆっくりと過ごせるような場所なんか無いんだ……………

無いんだ……………

ここも……いつバレるかはわからないし……………

不安だな……………ってか、俺は（ry

うん、でも洋がいて一人ではないから……家にいて何も抵抗できずに誘拐されたりとかするよりはずっとマシだ……………

ホントに……………

「で、先輩は何か食べてかないんですか？」

「じゃあ……………」

てか、オススメはなんだ？」

「えっと…………鰻が最近オススメなんすけど…………今日は在庫が無くて

……………」

あー！！

それなら、今日は何故か鮪が一匹朝起きたらあつたんですよー！！」

「え？」

「いや、良い感じになってたんで……………」

あっち（現代）で忘れられた養殖鮪じゃないですか？」

「ああ……………で、何鮪なんだ？」

「そりゃあ、もちろん……………」

「もちろん？」

「クロマグロー！！」

何やってんだ……………俺らは……………」

「じゃあ、さっそく造って来ますよー！！」

「待てー！！」

「何ですか？」

「洋！！ 阿求又は咲夜さんが来ても…絶対あっちがわの席に案内しろよ！！」

「へいへい…… 分かりましたよ、先輩。」

俺はそう言っ てまた長椅子で横になると……

いや、今度はちゃんと椅子に座った……

流石に鮪は食い逃したくないからな……

運び屋の休息时间…… 1（後書き）

これでストーリーの変更は何度目になるんだろう？

（^ー^:）

ちょっと、これから気をつけて行きます……

運び屋の休憩時間…… 2（前書き）

時間が最近とれないので、  
仕上がりはかなり荒い………

だから、また大規模修正を入れる可能性が………

運び屋の休息时间…… 2

季節は夏。

夏と言えばあなたは何を想像する？

よし………例をあげよう。

例えば……道路。

「真夏の太陽の光で熱気が漂うほどに熱くなったアスファルト」

と、自分ならそうなる。

例えば………

えっと………

その………

じゃあ、食べ物……

「炭火で焼けてタレの良い香りがする鰻!」

………まあ、

あなたもそうやってイメージを広げてみてはどうだろうか？

~~~~~

とある館にて……………

「咲夜」

「はい、何でもしようかお嬢様。」

「今日は……………連れて来なさい。」

「え……………それは……………」

「そうよ……………絶対に連れて来なさい。」

「しかし、最近は仕事が終わってからの……………彼の居場所が良く分からないでいます……………」

「ああ、なんであんな約束事をしたのかしら私は!!」

「いや、それは……………」

「いいわ。わかったわ……………」

「何が……………ですか?」

「彼の居場所よ……………」

「それは、何処で?」

「人里の……」

「人里の？」

「あつちよ。」

「へ？」

「ふふふふ……行つてきなさい、咲夜。」

「い、いやお嬢様………流石にそ「行きなさい。」わかりました。失礼いたします……」

~~~~~

場は戻って、人里の食事処……

「先輩、とりあえず赤身と中トロの部分を生身にして持ってきました。」

「おお、悪いな。」

てか、いくら恩があると言ってもさ……

クロマグロを無料と言つのはやり過ぎじゃねえか？

「さあ、どうぞ」

……何か、怪しくない？

「じゃあ、いただくよ。」

俺は、赤身の方を最初に食べることにした。

んで、だから食べようと箸を伸ばすのだが……

ニコニコ

何か中神が超笑顔なんだよ……

まるで、咲夜さんの仕事モードのようだ……

てか、だいたいそうゆう時ってだいたいさ……

何かあるよな？

考えてみる……洋はあのときになんて言った？

……まあ、悪くても…死なないだろうから食つか。

パク……

……

いや、普通にこの鮪は旨いぞ……

毒も入ってなさそうだし……

でも……な。

「中神？」

「なんすか？ 先輩。」

「お前、まさか俺を毒味に使ったのか！？」

すると……

「チッ……」

舌打ちか……

作者、お前……これで何人目だ？

『三人目』

ああ、そうか……

「中神？」

「なんすか？」

よし、そうゆう後輩には……

「お前には…再教育が必要なようだなあああ!!」

俺は、机を

ガン!!

と音を出すくらいの強さで叩くと…

中神につか「ごっ、ごっす……………ごっすん!!」  
ごめんなさあああい!!」

「……………」

逃げられた…………

てか、あいつ…………

ごっすん!! って言っただよな…………  
何が言いたかったんだ?

~~~~~

「あの…我が儘幼女があああ!!」

「あ、ああ…… 入荷は約一週間だから光に頼んでおくからな……」

いつもは光に愚痴る筈の酒屋のオヤジが……

「…… ああ、ごめんなさい……」

「まあ、その様子じゃあ…… また何かあったみたいだな……」

「そうなのよ……」

「で、何があったんだ？」

すると、例の従者は溜め息をついてこう言った。

「光が人里の何処かに居るから絶対に連れて来いって言われたわ……」

「ははは…… 無理矢理だな…… てか、それは理不尽な難題だな……」

「で、何か知らないかしら？」

「実はさ…… あいつに後輩が居るんだよ。それで、その後輩が少し前から店を出してて…… 確かそこに良くよってるって言ってたんだ。」

ガタン！！

「そ、それは本当！？」

「あ、ああ……………」

……………さて、これからどうなるか？

運び屋の休息时间…… 2（後書き）

そこで、

最近では珍しく次回がもう出来てるのでご安心を……

運び屋の休息时间…… 3

季節は夏。

夏と言えばあなたは何を想像するだろうか？

まあ………例をあげてみる。

例えば……。

例えば………

………あなたも、そうやってイメージを広げて
みてはどうだろうか？

~~~~~

『いらっしやいませ！-！』

『ありがとうございます！-！』

これは、僕が店をやっても欠かさずに言う。

まあ………言わない店なんてないよね？

だから、今日も客にはいい店だなと思ってくれるように挨拶を続ける。

挨拶は、多分魔法の言葉なんだろうね。

ガラガラ……

おっと……

僕は、客が扉を開けた音がしたので…表に出ていく。

「いらっしゃ……って…ひー!」

すると……

「正直に答えなさい……… 光が来てるでしょう?」

何故か突然……首にナイフを突き付けられた………

先輩が来てる?

いや、居るけどさ……… 鮪を食い終わってから長椅子をひとつ占領して寝てるよ。

てか、ある意味営業妨害だよな。 うん……

「まず、お名前を教えもらって良いですか？」

「十六夜咲夜よ。」

「で、十六夜さん……何故自分の店に先輩が来てるの？」

グッー！

え？

何かナイフを握る力が強くなったよ！？

「い、いや……来てな「何か言った？」……………」

じ、尋問？

い、いや……誘導尋問か？

「もう一度言うわ……………光がここに来たでしょう？」

くそ……………なんだー！

こ、このメイド……………突然来て…狂ってやがるー！

てか、俺が発言する前に封じたら本末転倒だろ！？

「速く答えなさいー！」

ガンー！！

僕は、外に投げ出されて地面にぶつかった……………

ザワザワ…………

突然の出来事に周りがざわつき始める…………

「っ……………」

いっ…たいな…………

でも、ここでホントの事を言っ…て先輩を引き渡したら、光先輩が…  
…………

僕は、内面で恐怖心に怯えながらも……………動揺を見せないようにして、  
言葉を絞り出す。

「先輩……………に一体何をするつもりですか？」

自分は、先輩から貴女を『自分の所に来させるな。』と言われた。」

しかし……………自分がそう言っ…と、目の前に居るヤバそうなメイドの表情  
が変わった……………

「別にそんな事を貴方が知っ…ても何も変わらないわ……………」

ああ……………なら、それならこっ…ちにも考えがある……………

先輩は渡さない……………

渡してしまえば……………なんかまずそうだから……………

「なら、自分はここを通す訳にはいきませんね……」

「!？」

「知ってますか？」

一応、ここは僕が経営する店なんですよ……… 店を壊されたり、  
営業妨害をされたらたまったもんじゃない!!」

怖い、恐い……

けど……自分は先輩とは違ってスペルカードをもっているから時た  
ま戦闘もするし、自分で言うのもなんだけど……結構出来る。

だから、こんな時に逃げてる場合じゃないんだ!!

「ふ、ふふふふ………」

「な、何がおかしい!!」

「貴方、そんな事を誰に向かって言ってるのかしら!!」

やっぱし……怖い………な。

威圧感とかいろいろな物が全く自分に比にならないくらい強い………

……でも、その方が殺りがいがある…

「ふふふふははは!!」

……じゃあ、殺りますか？」

ふふふふふ……

久しぶりに、場所を考えずに全力で行かせてもらいますよ!!

「ええ……そうね!!」

ガキン!!

「あら？一発で終わると思ったのに。」

「自分が、人里に居るただの料理人だからって……油断すると酷い目に合いますよ!!」

僕の命の恩人である先輩には、絶対に触らせやしない!!

殺傷攻撃ありの真剣勝負開始!!

~~~~~

寺子屋

今日の授業が終わり、私は教室の中でようやく一息をついていた……

がしかし、今日はいつもと違って……宿題を忘れる子供もいなければ、珍しく授業中の問題の出来も良かった。

「ああ、こんな風にいつもなってくれれば……」

と、思わず独り言が飛び出すくらいに良かった「慧音さん!!」

……いや、やっぱり何かが起こる前触れだっ「大変なんだ!!」

「で、そんなに焦って一体どうしたんだ!？」

私の台詞を最後まで言わせてくれ……

「あ、あっちの方でけ、喧嘩が起きてる……」

「け、喧嘩か？」

私は、何故そこまで焦っているのが良く理解出来ない……

喧嘩なら、普通周りの人々が止めに入るために自然消化するはずだ。

……なら、何故焦っているんだ？

「け、喧嘩と言つてもただの喧嘩じゃない……………」
だ、弾幕だ!!
弾幕ごっこだ!!」

「そ、それは本当か!？」

それなら……………かなりマズイ!!

「ちょ、慧音さん!! 慧音さん!!」

私は、どのような人物がやっているのかを聞く前に自然に走り出していた…………

それは、

人里の守護をしている自分が、人里の人々を守らなくてはならないから!!

「道を空けてくれ!!」

私は、人里の人々を守るために弾幕ごっこが起きた場所へと必死に駆けて行った…………

くくくく

「ぐううう……………」

しかし、運び屋は知らない…………

今回の事件が起こったこと……

そして、今回の事件の発端が自分のせいであることを………

運び屋の休憩時間…… 4（前書き）

何か体調が優れないんですね……

何か、明日の更新に影響が出て来そうなの……来なそうなの……

(光の夢の中……)

「光、光…… 起きろよ……」

「あ？」

「あ？ じゃねえよ…… まだ、卒業式の途中だぞ……」

え？

俺は卒業式の途中に寝てしまつて幻想入りしたはず……

俺は、そしてあつちで運送業をやっていたよな……

「どうした？ 光？」

「あ、ああ…… 大丈夫だ……」

…… もしかして、夢？

あれは夢だったのか？

もし夢だったなら……随分と長くて楽しい夢だったな……

いや、もしかこれが夢？

……いや、違うか。

「……うん………？」

あ、あれが夢だったみたいだ………
どっち………なんだよ………

まあ、そんな感じ。

~~~~~

「へえ………結構やるじゃない。」

「そりゃあどうも。」

私は、今誰かは分からないが………光が変な風に言い付けくれたせいで、目の前の男と戦っている。

いつもなら別に連れていかなくても別に良い………

しかし………今日の私は、お嬢様の命令を受けている。だから、何かなんでも負ける訳にはいかない。

「悪いけど……貴方に使う時間はないわ……」

「へ、へえ……じゃあ、どうやって終わらせるつもりなんだ？」

「こづ、するのよ……」

「！？」

私は、そう言っただけでナイフを男に投げる。

そして、男が避けた瞬間を見計らって能力で時間を止め、男のそばに行く……

もらった……

別に、今回は殺す気なんてサラサラない。  
ただ、目の前の人物は邪魔なだけ。

「な！？」

「それじゃあね……」

ゴス……

私は、パンチを男の腹に「クリティカルヒット……」……

「咲夜……　今回は随分と暴れてるなあ？」

「あら？　これは貴方のせいよ。」

俺は、今咲夜の前に立っているが……

俺が起きたのは咲夜のナイフのせいだ……

だつてさ……

あのナイフで窓硝子を破壊したら、音が凄いだろ？

「で、咲夜……　何故今回はこんな事になったんだ？」

「急に態度が変わったわね……」

「そりゃあ、試してみたかっただけだよ。」

正直、調子に乗りすぎた感が否めない……

「んで、今日はそんなに焦ってどうした？」

しかし……俺は次の瞬間……

「こつゆう事だわ。」

何故か俺はレミリアの前に居た……

「……………」

……………え？」

いや、一瞬で移動をするならば瞬間移動……………

しかし、今は瞬間移動してが…咲夜さんは見当たらない。

テレポート？

いや、それならば何か予兆はあるし……………今までの咲夜さんを振り返っても違うような気がする。

「ちょ、ちよつと？」

「いや、まず一番最初から振り返ってみると……………」ry」

「……………」

俺は、考える……

考えて答えが出るかはわから「う、うう……………」

は!?

「いや、レミリア…」

今度は俺に何の用だ？」

やばい、完全に集中して聞こえてなかったよ……………  
マズイかもしれない……………  
これは、

「えっと……………」

何か、レミリアは俯いたままだし……………

「はあ…………… まったく。  
貴方は本当に変わってるわね……………」

「ああ、そりゃあ否定出来ないな。」

そりゃあ、こんなある意味危険な仕事を普通にやってるんだから。  
誰も人里の外なんか荷物を運ぼうなんて思わないぞ。

「ふふ… だから私は貴方に興味があるのよ。」

「そりゃ、嬉しいかぎりだな。」

まあ、何かまた話がしたかっただけみたいだし……

てか、それなら咲夜さんが直接普通に言えば済むことだろ……

何もさ……

「あら、どうしたのかしら？」

「いや、なんでもないさ。　　うん、大丈夫だ。」

「なら、良いけど……」

てか、もし言ったら……あの咲夜さんに影で殺されかねないからな……

あの人は暗殺とか手慣れてそうな感じだし。

「ふふ……　　さて今日は帰さないわよ。」

「あいあい……

分かりましたよ。今日は特別ですよ。」

阿求は最近編集作業が忙しいのが見かけないし来ないし。

うん、

だから……まあ、良いか。



番外 『夢』（前書き）

リア友からのリクエスト。

まとまらなくてこんな感じで良かったらしい。

で、今現在他の話はちゃんと作っているので今回は手抜きになります。

突っ込まないで…

## 番外 『夢』

『夏祭り』

それは夏の風物詩であり、夏を楽しむ定番のイベントでもある。

しかし、表明から見て見ればただの楽しみなどでしかないが……

裏はそうでは行かない。

店を出すのなら場所を決め、そのための準備をかなり踏まなければならず……

花火を打ち上げるのなら職人との交渉、場所、そしてタイミングを取るのが最低でも必要だ……

まあ、こんなことを言っただけを言いたいのかと言つと……

「光!! 何グズグズしてるんですか!!」

「あいあい……」

まあ、今は言うときじゃないから後に言わせてもらつて……

~~~~~

ワイワイ
ガヤガヤ

皆さん、こんばんは（ハ・ハ・ハ） / 光です。

「光……………」

「な、なんだ阿求？」

「今、私の何かをパクリましたね？」

「え？ いきなりどうしたんだ？」

うわあ……………

最初からはめを外してみたんだけど…ナニコレ……………

「とぼけるんですか！？」

「だ、だから何をだよ！？」

「嘘だ！！」

「何だ、どうしたんだ阿求！？」

「皆さんこんばんは（ハ・ハ・ハ） / 光ですって読者にやったでしょ
！！」

「……………」

「ほら、図星じゃないですか!」

てか、勝手に人の心を読むなよ……

「いや、光は私のものなんですから。」

「そうかそうか……って、え!」

「違うんですか?」

「いや、俺は誰にも買われてないし…人には人権があるだろ?」

「いや、光は私のものなんですから!!」
いやああ……

…うあああああゝ!!」

人権侵害だ……って・

いや、何やってんだよ!!

「おい!!」 阿求……… 周りに迷惑だから止めろ……」

「いや、です。 私は光が素直になるまでやめませんよ!!」

……………素直って……………さ。

「阿求。言葉を間違えてないか？
お前が、お前の方が曲がってないで、素直になれよ……」

しかし、その瞬間に俺は……

ぷちっ

と言う変な効果音が耳に入り……

ドゴガンッ！！

俺の隣にあった筈のドラム缶が跡形もなく吹き飛んだ……

いや、おい……何が起きた？

Why？

「あ、あ…阿求？」

「ふふ、ふふふ…… ふふふふふふ……」

阿求は歪んだ笑み？を浮かべ、こちらに一步一步……ずつ歩み寄
つて来る…

ヤバイ、ヤバイ……

何かヤバイ…………

えっと……これは死亡フラグ？

「阿求？」

「ふふふふふ……………」

光？」

いや、明らかにそれはアンタ、阿求のキャラじゃあないだろ！

さらに、何か口調も違うしさ……………」

「さあ、素直になって私を受け入れて……………」

いや、だからキャラが……………」

「いや、阿求……お前はそんなキャラだったっけ？」

さらにその身体には似合わないぞ……………」

「ん……………」

「？」

「んな訳ないじゃないですかああああ！！！」

バッチイイイン！！

「あいだああい!!」

~~~~~

ガバッ!!

「……………はあはあ、なんだ…夢か。」

ああ……………とんつでもなくろくでもない夢を見たな…

「それで、今日は何の用なんだ？」

「そういえば、そうだったわね……」

おいおい……レミリアは対談したいが為にあんな無理はしないのはこ  
つちもわかつるんだからしっかりとしてくれよ……

でも、人里であんな騒ぎを起こすくらいだから今回はかなり重要な  
んだろうよ。

「そうね……今日は良い物が手に入ったから貴方をよんだのよ。」

良い物………ね。

なんだろうか？

まあ、レミリアが考えていることなど、俺には想像も出来ないがな

……

「そりゃあ、楽しみだな。」

「ふふ、まあ見てなさい。

咲夜。」

「なんでしょうか、お嬢様。」

出た、出たよ……

「例の物を持って来てくれないかしら？」

「承知いたしました。」

……………ふう。

「今、咲夜に例の物を取りに行かせたから少しだけ待っていて。」

「わかったよ。」

例の物……………ね。

『例の』とつくとかかなり気になるよな？

俺は、基本的にそうなるぞ。

……………

「それでさ……………ひとつだけ聞きたいことがあるんだけど。」

俺には、気になることがひとつだけあるんだ……………

「何かしら？」

「……………この間、俺が倒れた次の日に咲夜さんが問題発言をしただろ。」

「…確か、そうだったわね。」

そう、これ……

「あの後、レミリアは咲夜さんに何かやったのか？」

うん、やっぱりきにくかった……  
もう言っちゃったけど。

「……………はあ。」

期待した私が馬鹿だったわ…」

はあ！？

何故、俺はレミリアに呆れられなければいけない……………

聞きたいことは個人個人で違くなるだろ、普通。  
十人十色って言うし。

「いや、なんでそんなに呆れてる？」

「はあ……………なんでもないわ……」

「お嬢様、例の物をお持ちしました。」

「ご苦労様。下がって良いわよ。」

……やっぱり、分かってもなれないうちは心臓にわりい……てか、慣れたら何かマズイ気もするけどさ……

で、質問ははぐらかされた気がするけど、例の物が出て来たから……別に良いか。

「で、その例の物って言うのは……その箱の中に入っているのか？」

レミリアの前に置かれているのは……

「それってさ……まさかこの間の異変時に俺が命懸けで運んだ箱？」

「ええ、そうよ……」

でも、中身は完成しているから重量は前よりもあるわ。」

中身は完成している？

一体、レミリアは俺に何を渡す気なんだ？

「そんなに警戒しないで良いわよ。

これは、この間のお礼に渡すような物だもの。」

はははは……じゃあ、気にしないでおいた方がいいな……何か気に障ったら後が後で大変だからな……

「じゃあ、開けて中身を見ても良いか？」

「ええ」

レミリアは、何故だか機嫌が良さそうであり……  
綺麗な笑みを浮かべていた……………

まあ、機嫌が良いなら良いでそれ以上にやりやすいことはないんだ  
けどな。  
おっと、これは本音だ。

「じゃあ、お言葉に甘えて。」

俺は、そう言つと……………  
目の前の箱に手をかけた。

## 110000PV突破記念

はい、こんばんは（＾－＾＊） / 作者のSeven daysに  
と陸攻です。

まあ、今回は今週の水曜日に110000を突破したので記念に、  
とさせてもらいました。

で、何故100000記念がないのか……と言いますと……

実は、完成してないんです。

現在、番外の話4〜6つを同時に制作しており……さらに本編も  
制作しております。

つまり…時間がないのにやらなきゃならない作業が多すぎてパンク  
しちゃってます。

どうしよう？

……まあ、そんなことは置いておいて…

今回も質問が来たので丁寧にお返ししましょうー！

（質問はメッセか感想にどうぞ。感想に書き込んでくださった場合は自分が責任を持ってその質問に使った感想を削除しておきますのでご安心を。  
もちろん、質問した人は隠します。  
しかし、あまりにひどいものや、載せられなさそうなものは載せません。）

Q      あつきゅんは何故出てこないんだああ！！

A      …………… まあ、ネタがそうゆう感じになってしまった訳なんです、もう少し待ってください。

Q      何故、話によってこんな出来が左右するの？

A      ごめんなさい…………… それは、作者の体調と気分。そして脳内の状況によって起きています。修正は少しずつやっているので…………… すみません……………

Q      何故、ハイパワーのダブルアクションにこだわる？

A      いや、大した理由はないんですけど…………… ハイパワー自体が13もの弾数をもつアレですからね……………  
いろいろと魅力があふれているからなあ。  
まあ、この話は今度で。

~~~~~

で、この話もう終わりにしますが…

この作品が100000を突破した時は正直、驚きました……

だって、この作品は他の作品から比べたら乱雑でめちゃくちゃな感じなんですから……

……しかし、今回、この作品から可能性が多々見えだして来ていることは間違いありません。

自分は、その可能性にかけてこれからもやっていきますので……

皆さんを少しでも楽しんでもらえるような作品になれば…
と、自分は思っています。

~~~~~

これからも頑張って更新スピードを維持するので、よろしく願います!!

頑張りますよぉ！！

運び屋の休憩時間…… 6（前書き）

修正したので再投稿。

箱に手をかけた俺は、その箱の蓋を取る……  
すると。

「いや……マジ？」

「ふふふふ、ふふ。  
私に感謝しなさいよ。」

俺が、以前から欲しがっていたとある銃がそこにあった。

「てか、良くこんな物を見つけたな……」

「もちろん、結構探すのには時間がかかって、ホントに骨が折れた  
わ……」

「そりゃあな……これはそうゆうもんだから欲しかったんだ。」

「感謝しなさいよ。」

「もちろん。」

俺は手に持っていた銃を再び箱の中に入れると……

「なあ、レミリア。」

「何かしら？」

「用件が終わったなら帰っていいか？」

「帰りたいので帰る交渉にはいつ「ダメ、今日は泊まっていきなさい。」

「デスヨネ……………」

ほら、やっぱり面倒臭いことになった……………」

帰りたいけど、今日は咲夜さんにさらわれて来たから軽トラもないし、今帰ったら下手すりゃ妖怪に喰われそうだ。

ルーミアが居ればまた違うんだけど……………」

まあ、しょうがない…今日は諦めて泊まって行くか。

明日の配達は速達がなければ多分、間に合うし。

阿求は…多分来ないしな。

……………」

で、今さっきレミリアから銃をもらった俺だが、護身用に持ち歩くやつは、基本的に俺はFNブローニングハイパワーなんだ……………」

DAじゃないのか？

ああ、あの異変の時にDAが壊れたんだよ……………」

もともとハイパワーはシングルアクションの自動拳銃なんだぞ。

……まあ、いつもはハイパワーを携帯してるんだ。

あれは弾数が13発で多いからな。

シングルでも使い慣れれば別になんてこともないしな……

DA、何処かにないかな？

…戯言は言ってる暇はないので理由を説明するぜ。

壊れた理由はあの例の奴………弾幕ごっこが終わってから八つ当たりのように俺に弾幕ごっこを無条件でやらせやがった…

スペルカードを持たない奴をやらせるのはただのイジメ………いや、  
なんだろう？

虐殺？

いや、死んでないから違うな………

で、その結果は………もちろん負け。

スペルカードは避けきれない訳じゃないけど…飛べないから呆気ない  
ように限界が来る………

銃弾を撃ち込んだら殺傷攻撃になるからアイツに向かって撃てない  
しさ………

めちゃくちゃで無茶苦茶…

さらに、理不尽が追加………

ああ、やっぱり喧嘩を売るような事をやるんじゃないかな……

何？

拳銃弾くらいくらっても死なないだろ？

……………そこは盲点だったな…

次からはハイパワー以外も持ち歩いてやってみるか

「光」

「なんだレミリア？」

「食事中にこの前のことを考えないでちょうだい……………」

「ああ、悪いな。」

ああ、何故分かった？

「顔に出てるのよ。」

それは、普通分らないよ。

てか、ちゃんとした理由になってねえ…

「だから、私はわかるのよ。」

「あいあい……………」

「…はあ、絶対分かってないわね……貴方。」

そりゃあ、俺は俺でそんな感じ？だからな。

そんなことを信じたくなかったらそれで良いし……いや、それじゃ現実逃避……

いや、幻想逃避？

………わからな……

この場合は現実逃避と現実逃避とどっちになる？

「幻想逃避って何よ？」

………はあ、俺の方が溜め息つきたくなるな……

「てか、レミリアは耳はかなり良いのか？」

「人間とは、比べにならないわ。」

「じゃあ………さっきの俺の小言を盗み聞きしたな……！」

「ちょっ、ぎゃ、逆ギレ!？」

わはは、この乱れた瞬間が面白いWWW

ブルブル……

「あ……」

何か、やばー！

怒ったか？

いや、怒らせたか？

「咲夜……」

何そこで笑いながら覗いてるのかしらあ？」

話をそらして……そんな訳はな「いや、そんな覗き見とはごめっそうもない。」……

いや、咲夜さん……

今あんたさ……普通に物陰から出てきたよね……

「じゃあ、何かしら？」

「盗撮です。」

「ならいい……って、えっ！？」

……え？

咲夜さん……アンタは一体何をしてるんだよ……

「お嬢様のカリスマがあふれた感じがとても良いんですよ」

いやいや、咲夜さん……

貴女、鼻血、鼻血が出てる……だから全く説得力がないよ……  
ないんですよ……

てか、気がついて少し自重しろ……

「さ、咲夜……何か、別の事を考えてないかしら？」

どうやらレミリアは何かに行き渡ったみたいだ……

ちなみに、俺は知らんぞ！

「じゃあ、お嬢様……では、その覚悟はよろしいですか？」

「や、やあ……やだああー!!」

結局、レミリアは食事中に泣き叫びながら……飛び出して行った  
とき。

めでたしめでたし……いや、そんな訳はない。

「咲夜さん……」

「なにかしら？」

「冗談はほどほどに……よろしく。」

「チツ!!」

わかったわよ。」

いや、絶対にアンタは分かってないな………

てか、舌打ちすんな………

「咲夜さん………」

「なに？」

「今回は、鼻血を自重すれば…… 咲夜さんの野望は成功したぞ………」

「何考えてんのよ………変態。」

いや、そりゃないでしょう………

「いや、そんな変なことは考えてないんだけどな………  
咲夜さんが変態なんじゃ？」

「人間は、誰でもこうゆうものよ。」

ダメだ………この人にはやっぱり常識は通用しない………

「でも、あのカリスマが無くなったあの瞬間のアレには同意する。」

「同士がいたわ!!」

……………その頃のカリスマは

「さ、さ…咲夜が怖いよお……………」

と、某図書館で友人に泣きついていたとさ……………

上松光の過去（150000PV記念）その一『少しばかり慣れてきたこの頃』

PV記念の過去編はそれはそれで話が構成されています。

つまり、本編でも過去は出しますが……過去編は高一からの始まり、いろいろな出来事が書かれて行きます。

修正を少しかけてみました。（9 / 19

上松光の過去（150000PV記念）その一『少しばかり慣れてきたこの頃』

卒業式が終わって春休みが始まり……………

制服の採寸や教科書、用具を揃え

そして、高校の予備登校があって入学式が来る。

おおまかに言えばこんな感じに日々が進んで新しい生活が始りを告  
だろつ。

これとは違うパターンがいっぱいあると思うが、これが自分と思う  
通常のパターンだ。

あくまで、これが自分の中のステレオタイプである。  
（ステレオタイプ（考え方や表現が型にはまっていて新鮮味がない  
こと。紋切り型。）

ステレオタイプと言う言葉を今使ったが、意味だけでは良く意味が  
分からないだろつ……………な。

例を挙げると、

野球は男のスポーツだ。

や、

家事は女の仕事。

などが挙げられる。

~~~~~

入学式が終え、

高校が始まって一週間が経った。

で、全体的にクラスや学校にもようやく少し慣れてきたこの頃。

俺もクラスの中で静かにやっていたんだ「よお、光。 今日もお前はつまんなそうだな。」

「ああ、そうかもな……………」

……………チツ

これじゃあ、今までの俺のこうど……

いや、何でもない。

「そんなに彼女が気になるのか？」

「……………彼女じゃない。 幼なじみで俺の恩人なだけだ。

てか、気になるほどの理由が今はないし、天然キャラ？ だけど死ぬような真似はしないだろ。」

「はいはい、そうですね。

しかし、やっぱしお前は素直じゃなあ。」

「うつせ、中嶋こそ、かなり気になってる奴がいるくせに。」

「うつ……………」

「ほら、凶星だ。」

で、彼は中嶋宥。

宥と書いてゆうと読む。

この漢字を使った名前の奴は
なかなか、居ないだろ？

がらっ

「お、ありや……………光の待ち人が来たぞWW」

チッ……………」

宥め、普通に何気なく話を反らしやがった……………
後で問い詰めて自白させてやる。

すたすた…

「あれ、光は何処？」

「あそこで中嶋と普通に喋ってるわよ……………
早苗、アンタ……………もうちょっと周りを見たら？」

「うつ……………」

「だいたいこの間だって……………」

「あっ……………」

「しょ、しょうがないでしょ!…」

「……………」

「ほら、早苗………… 大声出し過ぎ出し過ぎWW」

「那波ちゃんがからかうからでしょ!…」

「はい、そうやって人のせいにしなあい。」

「はあ……………」

…………… うん、訳が分からないだろうから説明しよう。

今、大声で叫んでクラスの雰囲気の大破させた彼女は東風谷早苗。
俺の幼なじみであり、俺を救ってくれた恩人でもある。

まあ、何から救ってくれたのはいづれ説明するとして……

で、その問題の早苗を叫ばせたのが那波奈美。

二人とも、かなりの『ナイスバディ』である。

だって、む「はい、カット!」

バシー！

「痛ー！！」

「光、お前ははめを外し過ぎだ。」

くっそ、まさかバレてたとは……………思わなかった。

「いや、俺もその考えは分かる。

でも、今は我慢だ！！

こっちを見るー！！」

「……………」

何か、宥に負けてる俺が居る？

てか、どこの松〇さんですか？

「光、今日も弁当を作ってきたよぉ」

「何？ それは俺がいただいておくぞー！！」

「自由にな（＾Ｏ＾）」

「光、アンタ……………謀ったわねえ！！
ゆるさな……………」

「……………」

「くそ！！　嵌められた！！
やるじゃない、やってくれるじゃない！！」

結局、その後俺達は談笑をし、朝の時間を終えた。

クラスには迷惑をだいぶ掛けただろうが…

~~~~~

「今日はこれで終わり。皆、気をつけて帰れよ。」

ガタガタ……

「起立、礼」

突然かなり時間は飛んでしまったが、今は学校の授業が終わり、放課後が来た所。

だがしかし、肝心の今日は部活も無ければ、特に済ませなければならぬ用事も無い……  
つまり、暇なわけだ。

別に、特に買いたいもの、も欲しい物も無いしな……

「ふあゝあ……」

まあ、あまりにも暇な俺は、皆が帰り始めて、静かになってきた教室で普通に寝る体制をとる……

んが……

バシー！

「光、寝るな！！」

「うるせえ……で、何のようだ？」

宥に妨害を食らった。

くそ、俺の睡眠時間が……

「今日、まあ、これから時間はあるか？」

「いや、別に用事はないけど。」

「そうか、そしたらさ……最近できたばかりのハンバーガーショップに行かない？」

ふうん…宥がか……何か珍しいな。

「お前が新しい店に行くなんて珍しいな。」

「sou思うだろ……一昨日に那波の奴に連れて行かれたんだ。」

ほう、那波の奴がか……。で、そうをsouと言うのはやめ  
る…聞き取り難い……

んで、何故俺が宥が新しい店に行くのを珍しがっているのかとい  
と……

実は、宥はかなり頑固で……。気に入っている所へは普通に行く。  
そして、基本的に新しい場所へは踏み入れようとしないのだ。

だから、宥が行く店は癖がある店もあるが、基本的にはうまい店が  
多い。

隠れた店も知っていたりするので、頑固な割には情報が意外に広か  
ったりもする。

「で、意外にその店が癖のある感じで気に入ったと。」

「その通り！！ 俺のお気に入りで他人にもお勧めを押してやる  
！！」

いや、ちょっとこれはテンションが異常に高いと思うが……  
異常に気に入ってるなこりゃ。

……んで、また補助の説明。  
いや、蛇足……

この間、俺と早苗が幼馴染だったことは書いたが、実は那波と宥も  
幼馴染である。

奴ら（那波、宥）は二人でいろいろな場所へと行くが、別に付き合  
っているわけではない。

そうらしい……

・・・しかし、何故か那波は付き合う気などさらさら無いようなことを言いながら・・・も

新しく行きたい場所を見つけると、そのたびに宿を連れて行く。

那波はかなりの友達がいるのだが・・・その女友達を連れて行かずに宿を連れて行く。

普通なら、嫌とっていつか断るのが一般的な考え方……いや、最終的な成り果てだが、あいつは那波に文句の一言も言わずに必ず後を着いて行く。

そのせいで俺たちのことをよく知らない周りの奴らからは・・・『あいつら付き合ってるんだよね？』

と、なるわけだ。

つてか、俺も思っただけださ……あいつらはホントは照れてるだけで付き合ってるんじゃないのか？  
なあ、そうなんじゃあないのか？

なあ、皆さんはどう思う？

「んで、その店の場所は？」

「いつも行く駅前にあるよ。」

いや、じゃあさ、駅の何口の近くにあるんだ？

「……………他の奴らはいろのか？」

でも、面倒くせえから突っ込まない……突っ込まない。

これが普通さ。

「清水と井出が行くって言ってたぜ。」

清水と井出か……。まあ、いつもの通りだな。

「で、俺はどうすりゃ良い？」

「じゃ、今俺が井出と清水を呼んでくるから待ってる。」

「OK・それなら、できるだけ早くしてくれよ・今現在、俺はかなり眠いんだ……。いや、ふて腐れるほどに暇で退屈だったんだ。」

「……………わかった、じゃあ行つて来るよ。」

「いててら」そういうと、宥は教室から駆けていった。

~~~~~

「んで、ここが今日来ようと思ったハンバーガーショップか？」

「まあ、そつだな。」

あの後、宥は井出と清水を探しに行ったのだが、携帯にメールが入っていた事実によると、どうやら先に向かってしまったらしく……

俺と宥で目的のハンバーガーショップ前へと来ていた。

それで、先程ようやくハンバーガーショップのそばに着き、俺は外のメニューで何を食べるかを考えていたのだが……

ピリリリリイ

突然、誰かから電話が来た……

「……………悪いけど、ちょっと待っててくれ。」

「あいよ、電話か？」

「ああ、その通りだ……………」

全く……………

なんでメニューを見て、今から店に入るぞっていうタイミングで電話が来るかな。

俺はそんな風にかつたるい気持ちを持ちながら、ズボンの左ポケットに入っている携帯を取り出し、そのまま素早く開く。

……………すると、

『早苗か……………一体、何の用だ？』

携帯のディスプレイには、東風谷早苗と表示され、着信音が確かに

鳴り響いている。

しかし、ホントなら自分はこのタイミングだと電話を取らずに後からかけ直す。

いや、でも、出るのが面倒臭い……………な。

がしかし、それを早苗にしてしまうと……………

「なんで、無視するんですか！！」
（ry」

とか、

「私がどれだけ心配したか……………分かってそれをや（ry」
という風に曲がって行き、正直面倒くさい状態に……………

てか、早苗。

お前は俺の保護者か？

何故、そんなに過保護になる？

……………まあ、この話は長くなりそうだから保留として、後からの事を考えて、しょうがないから電話に出るか。

「もしもし」

「夕食は作っておくので食べに来てくださいね」

………はあ？

「はあ？」

「速○魔○発動！！」

いきなり過ぎて、俺の思考能力がついて行かないんだけど………

てか、某人気カードゲームをやりながら電話スナ。

「で、今日はどうした？」

うん、もう一度聞き直してみよう。

もしかしたら

俺の聞き間違えかもしれないしさ。

「だから、いつもいつもバランスの悪い食事しかしてないから……
ちゃんとした夕食を食べさせてあげるよって言うてるんです！
ふふふつ、罨○ード発動！！ ○なる○リ○・ミラ○（ry」

………バランスが悪くて悪かったな。

こんな奴にで悪かったな！！

てか、会話中は自重しろ！！

「バランスが悪くて悪かったな!!」

早苗、俺は自覚していたけどさ、やっぱりその言い方はかなり何気に傷つくぞ……………

てか、前にやめると言っていただろうが。

「それじゃ、待ってますからね。」

「……………おい、ちょっと待て人のはな
プツ……………
はあ……………」

早苗、お前の気持ちは分かる。

がな、ちよつとは人の話を聞こうぜ……………

まあ、『今日は大事な用事があるから……………悪いけどいけない。』

ゴメンm(——)m『』

で、用は足せるから良いが。

……………

よし、送信完了。

あとはかかってきた電話に出なければ事故ることはない。

俺は少しばかりの安心感を得て、携帯をズボンの左ポケットに入
ると、ハンバーガーショップ前へと歩いて戻り出した。

~~~~~

ハンバーガーショップ前へと戻った俺は……

「んで、結局誰からの電話だったんだ？」

「早苗だよ……」

「やつぱしな……  
で、肝心の内容は？」

「なんで、宥にそんな事まで教えなきゃいけない？」

「別に良いだろ。」

「……… もしや、そんなに言えないことなのか？」

「いや、そんな変な事じゃあないけどさ……」

別に変な事じゃあないけどさ……  
結構恥ずかしいんだよ……

「なら、良いじゃん。」

「……… はあ」

「あいあい、そんなに知りたいなら教えてやるよ。」

「で、内容は？」

しょうがない……………か。

ただ、普通に笑われそうだけどな！

「……………早苗がさ……………」

「早苗が？」

「夕食を作るから帰って来いだとさ！

もちろん、今日はハンバーガーが食いたいから断りのメールを入れたけど。」

はあ……………

「……………マジ？」

「うん、マジ。」

何か、突然宥が静かになったな。  
どうだった？

「……………光。」

「何？」

「行つて来い。」

「はあ？」

何故、突然行けと……………？

「いや、だから今日はハンバーガーショップに来たから行かないつて。」

「行つて来い……………よ。」

……………何故に途切れ途切れ？

「何故、お前はそんなに行つてほしい？」

よく、意味が分からないんだけど。

「まったく、お前は……………お前つて言うやつは……………」

おい！！

何故、俺が呆れられなきゃならない！？

これは早苗の為でもあるんだぞ？

「はあ……………」

とりあえず、ハンバーガーショップの中に行こつぜ。」

「どうなつてもしらねえぞ……………俺は。」

「ああ、分かつてる分かつてる。」

とりあえず、そう言って宥を納得？させると、俺たちは友人を待たせているハンバーガーショップへと入って行った。

ハンバーガーショップに入った俺たち二人は、先に入って待っている筈の友人二名を探していた。

「あ、いたいた……」

「ったく……… なんであいつらは端に座るんだか……」

「井出がアレだからだろ。」

「まあ、そりゃあそうかもしれないけどさ……」

先に入って待っていた二人を発見した俺たち二人は、友人が居るテーブル席へと向かう。

すると、そのうちの一人。井出が俺達に気がついた。

「おい、こっちだよー!!」

………てか、叫ぶな。

「おい、井出……………ここは店何だからさ……………  
叫んだらマズイぜ。」

んで、今井出の事を注意したのが清水。

「遅れて悪かったな。」

「ああ、今日は井出が意外に静かだったから耐えられたさ。」

「なんで！　僕はそんなに五月蠅くないよ！！」

いや、喋る数じゃなくてさ、声量、声量の問題なんだよ……………

「で、今日……………」

いや、やっぱり俺は帰るわ……………」

「なぜに？」

「いや、何か嫌な予感がするんだ……………」

~~~~~

今は、夜……………」

夕食の時間は遥かに過ぎ……………今俺は風呂で身体を洗っている……………」

「早苗が来なくてよかった」

しかし!!

常識が通じないとは本当に恐ろしいことで……

ガラガラ……

「へ？」

突然、俺の前に……

はだ……

いや、なんでも……って!!
言えねえ!!

「ふふ、ふふふ……ふふふふふふ……」

俺は、その、突然の訪問に呆気をとられて身体が動かない……

「さ、さ……早苗？」

しかし、早苗は俺のあの部分を見ながら奇妙な笑みを浮かべ……

一歩一歩歩み寄って来る……

俺、詰まれたよ…完全に……

「さあ、今まで光のおかげで溜まって抑え切れない分……」

ヤバイ、マジでヤバイ………

事後とかになってしまったら責任をとらなきゃならなくなってしま
う………

「ふふ、ふふふふふ……」

どうしようか？

………てか、どうしてこうなった？

一時しのぎのキャラ設定（前書き）

キャラ設定を改正してくれという声が多かったので一時しのぎに改造番を……………

ちよつとした改造番を……………

新たなキャラ設定は新キャラがもう少しで登場するのでお待ちください。

一時しのぎのキャラ設定

一時しのぎに改造。

名前

上松 光

ウエマツ コウ

年齢

十九歳

身長

174 cm

体重

65〜70くらい。

体型

痩せ型

……

高校生活最後の卒業式で寝てたら幻想入りしてしまった人。

普通自動車免許は取得済みだが、中一から無免許運転をしていた黒

歴史（犯罪）があるのでドライバー歴は約七年だったりもする。

性格的には全般的に優しいが………親しい人とは扱いが全く違うらしい。

まあ、いわゆる営業モードであろう。

たまに体調が悪いと………愚痴や陰口が止まらなくなるので、その点は要注意。

くくく

こちらに来てから運送業を始めたのだが、自分の自衛をするために銃等の武器を勉強し始めたら………マニア並になってしまったとか、体重が減って痩せ型になったとか………自分に能力があったとか。

まあ、いろいろな事があつたらしい。

しかし、彼の過去には絶対に触れてはいけない。

触れてしまったならば………そのまま引き下がることをオススメする。

「能力」

暗示をする程度の能力

それを用いて、様々な事が出来る。

いや、しているが、

能力を余り使わないために上限や制限を理解していない。

まさに宝の持ち腐れ状態……………

しかし、主に人里の中で活動をしているので、命懸けな面は少なく……………能力の把握が出来ていなくても別に不便なことはいらない。

実は、能力がもうひとつあるとかないとか……………

いや、本人が言うことと能力の作用があまりにも違うために……………違うのではないか？

という噂話が最近、発生中。

……………

ちなみに軽トラはキャリイだよ！！

ハイゼットとかアクティとかサンバーじゃないよ。

まあ、登場するかもしれませんが……

いや、もう一台は必ず出ます。

~~~~~

遠隔操作式の旋回機関銃

いつかの朝に起きてみたら…… 軽トラの荷台に付いていたありがたい？ 武器。

弾口径は 6・5 mm で旧日本軍の物に近いが……

給弾方式がベルト給弾なので全く違うものらしい。

ちなみに軽トラの荷台についている為に……  
人を乗せての遠隔射撃以外も可能。

弾薬は何故か真下の弾薬箱に収納されていて最大 200 発の搭載が可能らしい。

あとは、荷台全体だけを使えば約 1000 発くらい搭載可能。

ちなみに一分間に最大420発が発射出来る。

数で攻めると言うよりは狙いを定めて制圧するタイプみたいな感じ。

取り外すと重いよ……………

銃は基本的にFN社のFNブローニングハイパワー。

DAは荒ぶった巫女により破壊されました……………

他のバリエーションは阿求が買ってきたコルト・パイソンや何故かとある所からもらったコルトM1908ベストポケットやら……………

あれ、意外に種類が集まってるみたいだな？

## 15000PV記念に番外を始めてみる

いろいろとあつて紅魔館で一泊した次の日……

朝食をレミリアと談笑しながら取り、咲夜さんに護衛されながら昼前ぐらいに人里へ戻ってきた俺は、走り抜けるように倉庫の中に入り、すぐさまに今日配達しなければいけない荷物を軽トラの荷台に積み始めた…

実は最近、段々とこの作業も手際良く出来るようになってきたりするの嬉しいことだったり。

まあ、そんな事を言ってる間に作業を集中してやらなきゃマズイよな……

少年、作業中……

「ふう………」

あのあと、約10分くらいの時間をかけて荷物の振り分けと積む作業、そして配達順を確定させた俺は…

ようやく、出発できる状態になった。

そして、軽トラに乗りこ……

「うん？」

良く見れば軽トラのフロントガラスに手紙が置いてあるじゃないか  
……

『一体、誰がこんな事を？』

ふと疑問が沸き上がった俺だが、急用だったりや、重要な手紙だったら困る……

俺は、軽トラのドアを閉めてフロントガラスとワイパーの間に挟まれている手紙を取った。

『……………へえ、珍しいな…』

その内容は結構珍しいものだった……

~~~~~

何とか、夕暮れ時までに配達を終わらせた俺は、今日見た手紙の内容の通りに待ち合わせ場所に移動していた。

手紙の内容？

それはな……

『こんにちは、阿求です。最近編集作業で忙しく…顔を見せていませんでしたが、体調を崩した訳ではないので心配はしないでください。』

ところで、今日の朝に倉庫へ行ったのですが……不在だったので手紙を置いておきます。

この手紙を見たら私の屋敷の隣にある不思議な建物の2階に来て下さい。』

まあ、内容はだいたいこんな感じ………所々要約したり削ったりしたが……

だいたい……『あまりの忙しさに、筆を三本も折ってしまいました。』とか、『光に会えない日が続くことを思う度に涙が滲んで来るようでした……』

阿求………お前は何やってんだよ。
結局、噂ではちゃんと作業はやってるらしいから別に口出しはしないけどさ………

筆をストレス発散の道具に使うな……職人が泣くぞ……

てか、俺が死んだとかお前が死ぬ訳じゃないんだから……我慢しろ……

だいたい……悪いが俺は、まだ阿求を彼女（愛人）として付き合っていると認めた訳じゃない。

俺より良い奴はもつというだろ……

………つと、着いたな。

ガラガラ……

確か、阿求が待ち合わせ場所にしたのはここで良かったような気が……

俺は阿求が屋敷の隣に何故がある、二階建ての鉄筋コンクリート作りの建物に入る。

てか……なんで、コンクリ作りの建物がある？

そんなことを思いながらも中に入ると……一枚の貼紙がいきなり待ち構えていた…

「何々……『ここ、軽トラじおは、ラジオ番組を配信する場所です。ゲスト出演する方は手前のインターホンを押してください。なお、用事がある方も同様の手順でよろしくお願いします。b
y九代目阿礼乙女』

……これはどうゆう意味？

………はあ、何故、どうしてこうゆう成り行きになった？
てか、ラジオをやっても聞く奴いるのか？

「ふふふ……来ましたね。」

………おやおや、今回の首謀者が来たからにはちゃああんと説明をしてもらわないとなあ…

「私の古き友人にちよつと境界を弄ってもらつて完成しました。」

「このセットは？」

「友人が拝借してきました。．．．．．どうだ！！
驚いたか！！！！！」

．．．．．拝借つて．．．
てか、驚くかもしれないけどさ．．．その台詞は何か良く最後に
やられる最終兵器を自慢するボスが言うような言葉．．．だよな？

「驚いたか！！！！！」

「しつこえよ！！！」

．．．．．というかさ．．．機器の使い方はわかるのか？
わからなかったら本末転倒だよな？

「ふふふふふ．．．．．私は一度見たものは忘れません。なので、
私に任せなさい！！！」

「それなら本末転倒じゃないからべつにいいけどさ．．．
何か今日の阿求は口調がおかしいか？」

「そーゆー気分なんです。」

「そーですか．．．．．」

どうやら、今日は何を言つても無駄なだけのようだ．．．．．

だから、久しぶりだし、断ったら可哀想なことになるし……
付き合ってやるか!!

「よし、しょうがないから付き合つか。」

「ホントは意外にノリノリなんじゃないですかあ?」

「まあ、そんな感じとは違うけど……今日はそんな気分なんだ。」

「そうなんですか?」

「ああ、そんな感じだ。」

とりあえず……面白そうだからやってみる価値はあるな。

そんなこんな言いながら……

結局、意外に乗り気な俺だった……

上松光の過去（50000PV記念）その一『少しばかり慣れてきたこの頃』

何か、久しく気合いが入った？

気がする話。

2桁目はまだ作成中です（8/10）。

上松光の過去（50000PV記念）その一『少しばかり慣れてきたこの頃』

何だか現在、女性の恐ろしさを垣間見ている俺。

やっぱし、人間は本能に任せて行動をしてはいけない。

これだけは最近わかったことだ……そして、今俺は戦っている。

一体、何と戦っているのか？

……………それはな、自らの理性と本能。

あと、性欲だ……

……

今現在…俺の状況は、悪化の一途を辿っている……………

風呂に一カ所しかない出口は早苗に立ち塞がれ、俺は風呂の浴槽前のシャワーの前に居るためにシャワーのお湯に当たり続けている。

んで、やはり早苗は裸。

風呂だから当たり前っていうのは当たり前なんだけどさ……………

この年になって付き合ってもなく、幼なじみとして風呂に一緒に入るってどうよ？

てか、状況をよく見て振り返ってみれば……………俺は迫られてたんだな……………

このまま行けば、話の支配権？は早苗の手の内にあるので……………このまま行ってしまうえば早苗の思惑どおりにある意味で喰われ……………既成事実が作られてしまう。

別に、早苗の事は嫌いな訳じゃない。

良い体をして……………

いや、違う違う……………

流石に俺も簡単には屈したくないし……………何か年齢的にも速い気がしてならない。

てか、求めるなら俺が結婚出来る年齢になってからにしろよ。

それじゃなきゃ常識的に俺はどんなにアレでも断るぞ。

……………まあ、稀にこの状態を羨ましく思っただけの人が居るが……………そんな人には少し考えて欲しいものだ。

『幼なじみに突然喰われてその後の人生まで拘束される』っていう

ことを理解したらさ……… 本当にそれが良いと思う人は何処にいる？
望む人が何処に居るんだ？

……… いや、別にそうなれば面白いと思うのとき、本質的にそれが良いと思うのは違うからな。
そこは勘違いをするなよ。

まあ、既成事実が出来てしまつたら、逃げることも出来ないし、その後の人生は彼女に縛られて生きると言うのを理解しておいてほしい。まあ、そんなことはないと思うが……

……… んで、話を戻す。

最近、早苗は病み成分が混ざつてきており、取り扱いには十分の注意が必要だ。

病み、俗に言うヤンデレ……… と言うやつだろうか？

つまり、『あいつ、病んでるよ………』な状態である。たまにだが………

うん、考えてみれば……… 実は、ホント先に待っているのは死しかないのかもしれない………

いや、そりゃあ選択肢を間違えれば死ねる自信はあるさ。
……… てか、結局……… そんだけ最近は酷いんだけどね………

いや、その前に言っておきたい事がもう一つあった…
いや、過去形じゃなくて…現在進行形であるんだ。

『早苗にあんな事を教えた奴。 又は、あんな風に変えた奴……ホ
ントに…やめてくれないか。 いい迷惑だ………』

あえて…表に出るとは言わない。
いや、それを言ったら何か負けな気がする…

「で、早苗。 なら、お前は何故俺に求める？」

とりあえず、説明と持論を語っているだけでは皆さんも飽きるだろ
うので……

俺は、とりあえず少しずつ最悪な現状を打破するために動き始めよ
うか。

戦う相手は早苗に理性…本能に何故か湧いてくる性欲。
変態？

人間誰でも本能には勝てねえよ……

まあ、すべて影響をなくすることが出来ないだけで、今回は最悪な結
果になるうとも絶対に屈して喰われる気はない。

てか、それは俺が嫌だ……

まあ、

俺はシャワーの蛇口を閉めてお湯を止め…早苗の方を向く。

しかし、俺が見たのは早苗が何故か俯いて立っている姿に……

「そんなの………そんなの………そんなの………」と、同じ
均一の間隔で口から吐き出される言葉。

「？」

俺は、この行動の深意を読むことが出来ず……流石に首を傾げる……
……謎？

いや、何故こうなってるんだ？

俺はNGワードは言っていないし、そんな行動もしていない。
つまり……

『まあ………最悪な状況になることは回避出来たのかもしれないな
……』

と、思った俺はそのまま奥手へ引き下がらずに若干の攻めへ転じる。
だが、ホントに大胆な物ではないが………

「そんなのが何だっ言うんだ？」

「………わかりました。」

しかし、早苗は俺の質問に答えるどころか意味の解らない答えを返

し……
顔を上げる。

「……………はあ。」

だが、俺は早苗の顔の表情を見た瞬間にとある事を悟る……………

どうやら、俺はただ早苗に『嵌められた』だけだと……………

「どうでしたか？ 今日の私は。」

いや、どうだときかれてもな……………

「いや……どうだときかれてもな……………
ひとつだけ言えるのは……………」

それは精神的に疲れるから次はやめてくれ……………」

「じゃあ、肉体的にも良い感じに疲れさせてあげますよ。」

「いや、早苗……………お前は少し自重しろ。」

「善処しますね。」

いや、善処するとかしないとか……………そんな問題じゃねえだろ……………
少し自重して自分を省みる事をお前はしないのか？

きつと、今までの自分に後悔するぞ……………うん、そうだ。

きつと……

「……いや、早苗にはこの前のような元気な感じが一番似合うんだ。」

「……本当に、ですか？／＼／」

「ああ、そうだ。」

「……／＼／／」

ふう、とりあえず……こんな感じで一件落着か？

毎回疲れるな……中学……いや、初めは……何でもない。

「じゃあ、早苗……俺はもうのぼせそうだから風呂から先に上がるぞ。」

とりあえず、俺はやつというんな意味での危機を回避出来て、全身が無防備な風呂からあが「ダメですよ」

……ああ

「デスヨネ……」

「さあ、これでもうわかりましたよね？」

もう、ダメだと思った皆さん？
諦めたらそこで終わりですよ。

ちなみに、俺まだ…一度も大胆な攻撃を仕掛けていない。
つまり、今引いたらヤラれる……

「さあ、まず最初はある、はあ、残念だ………
……… 本当に残念だ………」

しめた、早苗が黙ってこっちを向いたぞ………

俺は、心の中でニンマリと笑みを浮かべながら………こう言った。

「早苗が、こんなにエロチックになってしまったなんてね………」
「……………」

俺が、早苗の方を向くと………早苗は固まっております………

俺の勝ちだ!!

言い過ぎ?
そんなの知らねえよ………

たまには言わなきゃ本人自体も気がつかないんだからさ。

「うん、本当にどうして早苗はこんな風になってしまったんだか……」

「……………」

固まり続ける早苗。

「……………はあ」

そして、俺は固まっている早苗の横を通り、左手をドアの取っ手にかける。

そして、引こうとしたしゅ「ダメ!!」

ガシ!!

いや、ドアを開けようとした瞬間……早苗に左腕を捕まれた……

「!?!」

そして、早苗は俺の左腕をそのまま強く斜め下へと引っ張り……突然引っ張られた俺はバランスを崩す……

そして……

ボタン!!

「いたた……」

俺は、風呂の床にたたきつけられる勢いで倒された……

キャラ設定（過去編）（前書き）

ちょっとしたスランプではなく、忙しいんです……

しかし、活動報告では励ましをありがとうございました！！

これで自分は迷いなく、暫く頑張れそうな気がします。

キャラ設定（過去編）

新しく過去編に出てきた人。（オリキャラのみ）
今回は解説のみのVerで。

中嶋 宥

ナカシマユウ

光のよき理解者。

一応、小学生からの付き合いであり親友。

那波 奈美

ナナミナミ

宥の幼なじみであり、早苗の親友である。

かなりいろいろな場所へ行くが、他の友人は連れていかずに宥だけを何故か連れていく。

ホントは付き合ってるんじゃないか？

井出 正一

イデセイイチ

身長149センチ。

低身長で顔はかなり中性的。

たまに着せ替え人形として弄ばれることがあるらしい。

しかし、その本性は予想も出来ないほど……
まあ、言いたくもなくなってしまうほどである。

清水 秀

シミズシュウ

身長は185センチとかなり高く、バスケットボールに所属する期待の新人でもある。

正一とは中学の時にとあるきっかけで出会い、それで仲間になる。

キャラ設定 (過去編) (後書き)

次話は半分くらい仕上がってるので、明後日までには出せる?と思います。

夏の風物詩（前書き）

さて、仕切り直しです。

……久しぶりに書いたので短めですけどお許しを……

夏の風物詩

さて、皆さんもこれまで生きてきた中で『夏祭り』と言つものに一度は行ったことがあるだろうとは思つが……

ひとつ問わせてもらつ、いったい夏祭りであなたがたは何を連想するのだろうか？

難しく考えるのではなく、簡単で大丈夫なのが……

まあ、例えとして例をひとつ上げよう。

祭の最後を締めくくる『花火』。

まあ、今の自分ではこれが一番一般的だと思っている。

が、それが第一に思い浮かぶ人もいれば、なかなか当たらない100円・200円くじを思い出した人もいるかもしれない。

所詮人は十人十色。

いろんな人が居てこの世界が成り立っている。だから人と違つてもそれを否定しようとは思っていないのだが……

まあ、これ以上書いて長々しい話になれば、そうなるほど意味が良く分からなくなるのがオチ……なので簡単にまとめてみる。

つまり、良く考えてみると……………
それだけ『夏祭り』が日本人に馴染み深いものなのだろうと思えば
納得は出来るに違いない。

~~~~~

夏、それは……………

「暑い……………」

暑くて冷たい食べ物欲しくなり、だらけたくなる季節……………

バシッ！！

「痛ッ！！」

「お前は何故そのような戯言を言ってるんだ？」

いや、戯言じゃあない……………本音だ。

「いや、本音ですけど何か？」

「……………はあ」

「一応、仕事だけはちゃんとやっていますよ。」

「それなら良いんだが……」

阿求がな……」

阿求………がどうしたんだ？

「阿求がどうした？」

「……阿求がな、祭のことばかりを言って最近何もしない……らしいんだ……」

「………はあ!？」

確か夏祭りはあと何日………って二週間後じゃねえか!？

「………最近、俺の所にも来てないから編纂作業をしてたと思ってたんだがなあ………」

まったくの期待ハズレに俺は大きい溜め息をつく……

そして、慧音の方を向くが……

慧音も同じく溜め息をついてる訳であり、雰囲気何かしら重い……

しかし、何故阿求は夏祭りをそんなに待ち望み……編纂作業をしないという暴挙を貫いているのだろうか？

俺は溜め息ばかりをつくのやめて、暴挙を行う根本的な原因を考え

る……

が、「はあ……」

最近阿求に会っていない俺が分かる筈がなかった……

夏の風物詩

2

く俺を襲った災難……く（前書き）

誤字＋読みやすくなりました。

さて……………

「阿求く 来たぞく」

阿求の屋敷の前まで来たんだが……………

阿求は本当に屋敷に居るのか？  
もしホントに編纂をサボって作業をしてないのならば何処かをほつき歩いてるん……

ミーン、ミーン、ミーン……

いや、こんなに暑い日真夏日では流石に出歩いていないか……………な？

と、そんな風に俺は思うと溜め息を一回ほどつき、何故阿求が今回のような暴挙に出たのかという理由を考えながら、阿求が出てくるのを待つ……………

ミーン、ミーンミーンミーンミーン……………

さて、今日はやはり暑さが満天で、暑くて極まらないな……………

ありゃ、これじゃあ文の構成がおかしいか……………？

くくくく

しかし、あれから数分が経つが…待っても阿求は表に出て来ない……

やはり、屋敷にはいないのであろうか？

いや……しかし、人里を回ってきたが阿求が何処かに居るという話は流れてきてないし………

何故だ？

俺はまたまた疑問を抱き、頭を抱えなくなる………が

「よし、もう屋敷の中に入るか。」

こうなればこうでしょうがない……  
勝手に入ってしまうことにした。

「光なら顔パスだから大丈夫ですよ」

なんて阿求自身が言ってたから別に構わないらしいのだが、いつもは俺から行けば行っただ阿求が勘違いをおこして俺の操。を成り行きの的に奪おうとしてくるので………

自分からは中々行かない。

てか、周りからは「しっかりしていて流石」みたいなことしか聞こ

えて来ないんだけど……

そんなに阿求は……

ガシッ……

「さて、会いに来てくれるのを待ってて正解でした。」

……なん、だと!?

嘘だ……

全ては阿求の予想予測通りで俺たちは手の内で躍らされてたと言うの……

いや、流石にこれは言い過ぎか。

「お、おお、阿求。」

「もしかして驚かせちゃいましたか？」

そりゃあ敷地内に数歩入って周囲を確認しようとする前に掴まれたら誰だって、何か……うゝん…

まあ、驚くだろ。

でも、余談だが一番心臓に悪いのは人里で咲夜さんが突然現れる時である。

人と話してて横から声をかけられるのではなく、何となく歩いてい  
る時に前を塞ぐように現れるように出没するので……

『驚いた』や『たまげた』とかそんなちゃっちいモノじゃない。  
最初の頃なんて叫んでしまうのが当たり前……だった。

そして、その俺の反応を見て咲夜さんはクスツと笑う……

と言う確信犯であるのが彼女であり、俺はその被害者であ「光!!」

「う？　　ああ、悪い悪い……………」

「何をやってたんですか？」

「いや、ちよつと考えご「嘘だつ!!」いや、ホントだつ「また、  
読者に対して説明してたでしょ!!」いや、そうだけどさ、何が悪い!!？」

……阿求、メタな発言はなるべく控えてくれ。  
あまり、やり過ぎるとさ……  
アレなんだよね……

「さて、光はやはりあの銀髪貧乳とイチャってるんですね……」

「えっ？」

いや、別にイチャつてると言う程ではないんだが……

……でも、待て阿求……それをもし本人が聞いていたらどうなるのか分かってるのか？

銀髪はまだ良いとしてさ………貧「あら、随分と偉そうに………」

……もう、嫌だ………

『阿求が銀髪貧乳と言った通りに咲夜さんがログインしました。』

「偉そうにつて……貴女は仕えてる身分でしょう？」

「私より背が低くて何が言えるのかしら？」

さて、火花が散るような口喧嘩が突然勃発し幕をあけた………

うん？

逃げ出したくないのか？

いや、その………さつさと逃げ出したくても、さ

実の事を言つと……俺は二人の間に挟まれていて………右手を阿求に、左手を咲夜さんに掴まれてる………

つまり、逃げたくても逃げ出せないし………もし耳を塞ぎたくても手が塞がれているから耳を塞げないのだ。

ホントに、

災難…このうえ極まりない。

てか、俺の腕を何故掴む？

「。。。はステータスなのよ!!」

「貴女、いつも。。。を着けてるじゃないですか!!　　今もそう  
ですし。」

「……くっ…　　でも、貴女は小さい上に胸もアレでただの。。。じ  
ゃない!!」

「……………の何が悪いんですか!!  
光がもし。。。だったらどうするんですか!!」

「……………」

。でわざと伏せた字はあなた方の知識をもとに埋めて読んでみよう。

さて、そろそろ口を出した方が良いか？

それとも口は出さない方が身のためか？

「この。。。長!!」

「この。。。で。。。女!!」

でも、口を挟むタイミングが良く分からない……………な。  
これは…

「幻想郷縁起に。。。長って書いてやる!!」

「じゃあ、光を紅魔館に拉致して監禁してやる!!」

何か、言いたい放題になってるし……………つか拉致するの止めて!  
!

以前にやられた時は普通に泣きなくなっただよ……………だってさ、腕  
を縛られた状態で咲夜さんが俺が能力で紐を切るまでずっとニコニコ  
して見てたんだぜ!?

あれは怖い、恐い……………こわすぎる……………

いや、それよりも監禁という言葉に突っ込むべきだった…

「くっ……………」

「くっ……………」

どうやら暑くてうっとうしい程の気温と直射日光なのに、口喧嘩す

る環境は女性には関係ないらしいな。

ああ、ホントに災難極まりない……………

夏の風物詩

3

く運び屋、助けを求めるく（前書き）

短いですが…

前回のあらすじく？

俺は阿求が編纂作業をサボるという暴挙に出た理由を確かめるべく、屋敷に向かい……足を踏み入れた。

しかし、そこには何故か、何なのか……阿求が潜んで居たのだ!!  
良く分からないが阿求に捕まり、ピンチに陥った俺……

しかし、そこにまさかの……噂をすれば、銀髪貧乳さんがログインしてきて……

俺は四面楚歌な状態を楽しむことになってしまったWW

く( ^ - ^ ) /

……まあ、『冗談半分な説明はここまでにして……

「光は私の物なんです!!」

「うるさいわね!!」

さっさと諦めたらどうなの!!

。。。は。。。でも探してなさい!!」

「アンタたちそこで騒いでないでさっさと寶錢をよこしなさいよ!!」

「靈夢……ひとりだけかなり浮いてるからやめたらどうなんだぜ?」

新たな奴らも加わってかなりカオスな状態になっていた……

いや、寶錢を回収しようとする靈夢がそばに居るならばこいつを利用してやれば何とかなるかもしれん。

うん、きつとそうだ。

「靈夢、かなりの額を寶錢にやるからこの状況から助けてくれよ。」

早速交渉開始。

「どのくらいくれるの？」

「一万え」そんな事をするくらいなら私にプレゼントを買ったらどうなんですか！？」「そうよ、たまには何か買いなさいよー！」「お前ら……」

交渉を無理矢理無効かされた俺。

当たり前だが、どうやら彼女たちに巫女の賽銭もどうもこうもないらしい……ようだ。

「まあ、諦めてその両手に花な状態を楽しみなさい。」

Why?

さらにこれの何処を楽しめと？

「いや、これの何処を楽しめと？」

俺は首を振って阿求と咲夜さんの様子を見る……

しかし、相変わらず二人とも睨み合った状態が続いており……正直嫌になる。

てか、胃が痛い……



夏の暑さと矛盾…（前書き）

とりあえず、八月に突入する前に出せました……

これからよろしく願います。

## 夏の暑さと矛盾…

### 『夏休み』

それは学生としては嬉しいことであり、また厳しい現状と現実を突き付けられるイベントである？

そして、この夏休みと言うイベントの一番特徴と言える物は、あの『課題』の多さ。

学校ごとに量や内容は違うが、やはり面倒臭さは極まりない。

特に、部活をやり続ける高校生にとっては完全に天敵である……

~~~~~

ここ幻想郷に夏が訪れたのは確か数週間前ぐらいのことだったかな？

しかし、俺が思ったのは、あっち（外）とさして暑さは変わらないことだ。

まあ、一応日本の一部だったことを考えれば普通にその事には納得できることなのだが………

「やっぱり、今日も暑いですね」

「……………」

さっきから阿求が矛盾を起こしているのだ……………」

「だったら俺から離れれば少しは良くなるんじゃないか？」

「いや、嫌です!!」

まあ、これで分かっただろうが……………今現在俺は阿求に抱き着かれている。

暑いから出来れば離れて欲しいのだが……………な。

「なら、光……………飲み物を飲ませて？」

何か、何故か口調が突然変わって上目遣いになった。

普通ならばここで負ける奴が大半なんだろうが、俺はこんな所では負けない。

いや、負けてたまるか!!

「自分で飲めるだろ？」

「ほら、今は手が塞がっているじゃないですか。」

それは阿求が勝手に抱き着いて、手を塞いでるだけなんだけどな……………てか、俺が阿求に飲み物を飲ませると？

いや、今はそんなことを考えるべきじゃあない。

今は阿求がどうやってたら離れてくれるのかを考えなくては…………

「ほら、ほら早くしてください!」

急かされようがなんだろうが俺はやる気など無いので、関係などはない。

「てか、この状況で飲み物をどうやって飲ませると?」

俺も左手に団扇、右手は阿求を押さえており……………こちらも手は塞がっている。

「まず、団扇を置けば良いじゃないですか。」

まあ、そうなるだろうけどさ…………

「それで、光は口に飲み物を含(r y)」

よし、とりあえず以下…略……………にさせてもらおうか。

ホントだと阿求は真面目でしっかりとしているのだろうが、俺の目の前ではそんな事は欠片も無く……………いや、稀にあるかもしれないが。

まあ、つまり俺の前だと阿求は暴走するわ本能は剥き出しだわ…………

…いろいろと酷いのではなく、凄いのである。

「はあ……………」

「光！！　早く、飲み物を口移し！」

……………これ、はこのような時はどうすれば良いんだ？

夏の暑さと矛盾… 2 (前書き)

とりあえず軌道に乗りはじめたような………

『夏休み』

それは学生としては嬉しいことであり、また厳しい現状と現実を突き付けられるイベントである？

そして、この夏休みと言うイベントの一番特徴と言える物は、あの『課題』の多さ。

学校ごとに量や内容は違うが、やはり面倒臭さは極まりない。

特に、部活をやり続ける高校生にとっては完全に天敵どころかそれは地獄であろう……

~~~~~

「だから、離れなければ飲み物は飲めないぞ？」

「……………」

あれから数分が経過したのだが、阿求は全く離れようとしないう。飲み物が飲みたいと言いつつ割には意地を張って離れないという……行動の矛盾が起きているのだが、この場合はどのようなすれば良いのだろうか？

「おい、おいおい……」

「……………」

「阿求？ どうした？」

「……………」

無視か……？

阿求は俺の問い掛けを無視しているのか、それとも腕の力が抜けているので、ふて腐れて寝てしまったのか……いや、後者はかなりの確率で外れてると思うが。

俺はとりあえず阿求の頭を撫でると、ゆっくりゆっくりと阿求を寝かせる。

すると、まさかのまさかであるが……阿求がすやすやと寝息をたてて寝ていた。

………恐るべし、阿求。

「アンタらは人の家でイチャイチャするのやめなさいよ。」

ふと、後ろから声がかかる。

俺が後ろ向くと、そこにはあの腋を出したた「アンタ、次私のアレ  
考えたらトラックごと吹っ飛ばすわよ。」

まあ、気を取り直して……………霊夢が居た訳だ。

言い忘れていたが、ここは博麗神社だから霊夢が居るのは当然である。

「で、霊夢……………お前がお茶を自分で持って来るなんて珍しい気がするんだけど、お前はと思う？」

「はあ……………」

今日はたまたまそんな気分だったのよ。」

気分……………ね。

一番使い勝手が良くて理不尽な言葉な気もするのがその言葉であると俺は思う。

だって、例を霊夢で例えれば……………

「霊夢、なんでそんなにキレてるんだ!？」

「今日はそんな気分なのよ!！」

だったとか……………

「  
」

「  
……………」

「別に気にしなくて大丈夫よ。  
代金はそこに置いてあるから。」

「霊夢、今日はどうした？」

「今日は、そんな気分なのよ。」

……………まあ、こんな感じだ。

例を挙げたらキリがないような気もするが、それは気にしないで  
おこつ。

「さて、ちょうどタイミング的には有り難かったよ。」

「なら、私に感謝しなさい。そして、おさい銭を沢山入れるのよ。」

前言撤回。

やっぱりがめついのはいつもと何も変わらなかった……………



見えないのなら感じる。

分からないならその頭で考える。

それでもダメ

240000PV達成!!

ありがとうございます!!!!

見えないのなら感じる。

分からないならその頭で考える。

それでもダメ

うん？

俺は深夜に目を覚ましたらしく、周りは真っ暗で何も見えない。  
何か変な感じで突っ掛かる……

さて、感じる……目の前には何が居る？

何がある？

しばらく瞑想をするように周りを感じ取るつとする俺。

だが、

………わからない、ここは真っ暗で真っ暗闇だ。  
それだけしかわからない……

「気がついたかしら？」

「？」

突然、目の前に気配を感じたと思えば、何もすることなくそのまま  
声を掛けてきた。

「アンタが俺をここに連れてきたのか？」

「ええ、そうよ……………それが何かしたの？」

……………それが何かしたのかってさ……………

まあ、いつものように気にはしないでおいたほうが絶対に良いだろうから気にはしない。

それが一番良い。  
きっとそうだ…

「で、アンタは誰なんだ？」

「さあ？」

「……………」

何だコイツ？

「でも、昔に何度かは会ったことがあったわね。」

昔に何度かは会った？

……重要なキーワードが入り、頭をフルに回転させようとする俺。

しかし、昔に会ったことがあったというだけでは……該当する項目があり過ぎて検討も何も着かない。

まるで、「無理難題かしら？」……………

「分かってるなら言わないでくれ……………」

こっちは一応考えてたんだからさ……………

俺はとりあえず溜め息を一度ほどつくと、気を取り直して考え始める。

「で、俺が何歳くらいに会ったんだ？」

「えっと……………確か中学生の頃くらいじゃなかったかしら？」

中学生くらい……………ね。

「というか……………さ、アンタの目的は何なんだ？」

「いや、あなたに対してただ単に興味があっただけよ。」

……………何だコイツ？

「まあ、今日はこのくらいで勘弁してあげるわ。」

「はあ？」

突然、そのように言われると……………

「！？」

俺は暗闇の中で意識が途切れた……………

『夏休み』

それは学生としては嬉しいことであり、また厳しい現状と現実を突き付けられるイベントである。

そして、これまたこの夏休みと言うイベントの一番特徴と言える物………は、あの『課題』と言う悪魔。  
学校ごとに量や内容は違うが、やはり面倒臭さは極まりない。

特に、部活をやり続ける高校生にとっては完全に天敵どころかそれは地獄であろう……

さて、自分もそう言える立場じゃあないんだけど……

~~~~~

………光！」

「………ん、ああ？」

「何寝ぼけてるのよ……」

「揺すつても何をしてもし起きなかったから心配したんですよ……!」

「ああ、悪いな……」

どうやら、俺は寝ていたらしい……

あれは夢だったのか？

それとも……

バチン!!

「ぶはっ!？」

「いつまでそんな顔をしてるのよ!」

俺は突然、何故か横から攻撃を喰らった。

どうやら霊夢は俺の考えていた顔に対してムカついたらしい……く、はつきり言えば理不尽な事だろう。

横から突然叩かれるなんてさ。

「というより……今日って何をしにここへ来たんだっけ？」

「アンタは馬鹿なの？
それとも阿呆なの？」

「……いや、それは流石に自分から言っのはなんだけどさ、言い過ぎだよ。」

流石に傷がつくよ、俺の心が（ry

「……………」

「どうにかしなさいよ……」

「私任せですか!？」

「元々アンタがふて寝したのが悪いのよ!」

「いや、光を傷つけたのは貴女でしょう!？」

「ああ、うるせえ!!」

周りでもめられていても五月蠅いだけだ。

ならば黙ってもらっただけだし……

「お前らしい加減にしろよおお!!」

キレるだけだ。

25000PV記念 『コラボ企画始動』 (前書き)

最近、多忙さが増しているので……本編は少しお待ちください。

250000PV記念 『コラボ企画始動』

自分が今、熱中する物に出会った頃。

それはいつぐらいのことだっただろうか？

確か、確か確か……

……まあ、思い出せないので話を変えさせて貰う。

皆さんもいろんな事を始める時、やめる時、続ける時等に『きつかけ』というものがあるだろう。

そして、そのきつかけが成功へ導いたもののなか、失礼だが失敗を呼んだ失態であったのかは皆さん個人個人で違うので別とする。

しかし、簡単に考えて纏めようとすれば……

そのきつかけがあったからこそ今の自分がある。

あの時にそのような経験をしたからこそ分かることがある。

そして、今までにきつかけと決断を重ねてきたからこそ……今の自分で居られる。

少々分かりにくい説明になってしまっただろうが、自分は本当にそう思うのだ。

もし、数々の出会いがきっかけを作り道を開くなら………

俺にもそのような出会いは絶対にあるはずだ。

~~~~~

本日はこの『幻想の運び屋』に足を運びくださいまして誠にありがとうございます。

それで、今回は250000PVに到達した今作品の記念として……  
…コラボを始めようと思います！

（コラボは達成記念話とするため、力を入れさせてもらいますよ！）  
なので、もし参加をしようと思ったユーザーさんが居るのならば、  
作品名とキャラ。

そして、希望があるのならばどのようなルートで話が進んでいくのかを書いて感想又はメッセージにお送りください。

参加希望者をお待ちしております!!

P・S

参加申し込みの終了は人数ではなく、こちらの判断で行わせてもらいます。

ちなみに現在のコラボ受付をしてくれたユーザーさんは一名となっております。

25000PV記念 『コラボ企画始動』 (後書き)

希望者募集中!!

夢…懐かしさと予想外と想定外（前書き）

次話を書きやすくするために内容を改定してみました。

夢……懐かしさと予想外と想定外

……………これは、夢か？

俺は気がつくとい前昔に見たような外の世界にいた。

そして、目の前には……………

「お前はさ……………そんな所で諦める奴だったか？」

「しょうがないじゃないですか！！これ意外に「何故、そう言える？」……………」

「まあ、お前がそういうのならば……………やはり結局人間という生き物はそんなもののさ。  
勿論、俺も変わらないだろうよ……………」

「！？？」

「何だ、突然どうした？」

ブーン！！

思い切り右手を振り上げる少女と、それを何故無抵抗に見守る少年が居た。

バキィ！！

無論、何も抵抗などしていない少年は少女に思い切り殴られて後ろへと跳ぶ……

「痛ってえなあ！ 早苗、お前はだからそんなにも中途半端なんだ！！」

「撤回してください……………」

「はあ？」

「光がさっき言った事をです……………」

少女が下を俯いて表情を隠しながら少年に対して静かに言い寄ると、少年は少し痛みに顔を歪めながらも考える様子を見せる。

もちろん、俺は何故少女が撤回しろと言った理由が分かるが。

「いや、早苗……中途半端なのは「そっちじゃねえ！！」って、ちよ、おまWW」

バキィ！！

ドガ！

ザバァン！！

少年は殴られ蹴られの……………最後は川に投げられた。

…よし、ホントの事を言おう……………あれは俺と早苗の話で歳は確か13。

このとき中学一年生の時の喧嘩話である。

やはり、これは懐かしいワンシーンだなあ……………

あの後救急車で運ばれた時はどうなるかと思ったけど……………

……………？

突然だが、何かの視線を感じたので前言撤回。

これは（夢は）やはり人為的な仕業らしいな。

「誰だ？」

俺は視線を感じる背後を振り向かず後ろに居る筈のナニカに問う。

後ろを振り向いてみないのは……………何故か後ろは振り向いてはいけな

い気がするから。

暫く間が空き… 俺の頬には冷や汗が滴れてくる。

『焦らすな、早く出て来いよ!!』

俺は心の中でこう叫んだ…

「私よ。」

「え?」

突然、今日の夢の中で聞いたような声が聞こえたかと思うと、たちまち俺の周りの景色が変わり……… ちよつと説明をしたくないくらいまでに気味が悪くなった。

まあ、はっきり言って拒絶できれば拒絶したい。

このようなモノに耐性がなかったら下手すりゃあ普通に発狂しかねねえ……… からな。

んで、これは当たり前のことだが…  
流石に今回ばかりは動揺を隠しきれないらしく、頬に冷や汗が流れているのが分かる。

『……いや、落ち着こうとは思っな。  
ドツボに嵌まるだけだ……… 今のままで良い。 ……とにかく現状の状態を最悪でも維持を!』

心の中では自分を励ます俺だが、正直今回はかりはどうしようもない。

今回はあまりにも予想外と想定外のオンパレード過ぎる……

「あら？　そんなに焦っちゃって……可愛いわね。　食べちゃおうかしら」

「！？」

食べる……だと！？

「あらあら……　ホントに可愛いわね。

普通食べるのは可哀相だから違う意味で食べちゃおうかしら？」

「はあ？

だから一体、何なんだお前は？」

話を聞いていれば性的に食われそうな感じになっていたりとか……  
…全く意味が分からなくて把握することも難しいんだけども。

「酷いわ……」

「いや、アンタが変な事を言うのが悪いんだろ！？」

どうやら相手はショックを受けたらしく、良くわからない状態になっている。……らしい。

コツ、コツ、コツ、コツ、コツコツコツ……

相手が歩く時に靴の音が出るが、それ以外に全く音はない。

……………ここは何処なんだ？

ドサ！

「うおー！！？」

「うふふ……」

俺は突然抱き寄せられたかと思えば……

「！！？」

そのままこの世界の地に倒された。

そして、俺の上に登ってきたのは……

「ホントに久しぶりね……こ・う・く・ん♪」

「ひ、久しぶりだなあ………」

見覚えがないと言えば絶対に嘘になり、自分を騙そうにも嘘がつけなさそうなあの人……

いや、中学の時に何度かいろいろ関わった『妖怪』がそこには居た。

「名指しで紹介しなさいよ。」

だから、地の文を読まないでくれ……

三度目の鰻との格闘      (作者が) (前書き)

今回こそ、今回こそ……鰻のこの話を終わらせます。

しかし、文章は以前公開したものとそんなに変わってません(パート3までは)

三度目の鰻との格闘 (作者が)

暑くなる八月。

夏が終わる八月。

そして、暑さはまだ…納まらない八月。

~~~~~

人里某所の料理屋・・・PM0:09

「はあ？ 鰻が入荷しない!？」

「ああ、ここ最近一週間は発注を出しても鰻は来ないし、さらに音沙汰も無い。 ホントに困ったよ・・・」

俺は今、昼食に鰻を食おうと洋の店ではなく、別のつながりで友人になった知り合いの店へ鰻目当てで来ていた。 ぶっちゃけ言ってしまえば、洋の店だと鰻は天然を使うために品薄な状態が続いており、さらに値段もかなり張る。

しかし、何故かは知らないが・・・
いや、どうやっているのかは知らないが、この知り合いの店はいつも低価格で同じ量を提供している。

しかし、人気店でもあるので売り切れるのはいつも時間の問題なのだな。

まあ、でも値段は張らなくてうまいし、食いのがす事もほぼ無いために鰻のときはここに来るのだ。

「……………だが、そんな俺の魂胆に罰が当たったのか、何なのかは俺は知りたくもないが、今日は鰻が…………いや、最近は鰻がまったく入ってこなかった。

いや、俺よりもあいつのほうが困るよな？

「んで、結局鰻は何処から仕入れていたんだっけ？」

「うーんと…………確か、あの人は妖怪の山に店と養殖場を構えていたんだけど…………」

……………？

「ちよつ、今お前…………なんて言った？」

「だからさ…………何故か知らないけどあの人は妖怪の山に店を構えているんだって。」

…………Oh…………マジですか？

「マジで!?!」

「ああ、ホントだ…………ホント。」

「てか、なんで妖怪の山でやっていけるんだよ!?!」

「そんなことは俺に聞かれてもわからねえよ！！　でも、やってるからには何か条件を飲んでやってるんだろうな。」

まあ、今のは俺が悪いだろうけど……

本人に聞かなきゃならないけど、条件を呑んでやってるのは確かそうだな。

確か、あの妖怪の山は排他的だし……人間が普通にやっていけるわけは無いんだけど。

まあ、常識破りな奴がいなけりゃの話だろうが……

……いや、でも環境を追求したのならわからなくもない？が、このパターンを見ているとその経営者がただ変わり者（変人）なだけなのかもしれないな。

まあ、今出したのはあくまで俺の予想であり、ただの思い込みだ。俺はその本人にさらさら会ったことはないし、見たことも無い。

さらに、うわさにも聞いたことが無かったという……完全に今回が初耳である。

「んで、今日はどうするんだ？」

「何を？」

「何をつてさ……………」

一応、今日はここに来た事だしさ……………」

「あ、ああ…………わりい。」

そつだ、鰻がないのを聞いてからまったく食べる物の話題を言つてなかつたな…

ここは一応…………

いや、普通に料理屋であり。

味もかなり良い。

ぶつちやけ味は洋が勝るんだけど値段はこっちが勝る。

だから、洋の所に行く時は「で、ご注文は？」

……………うん、ここは素直で速めに注文をした方が良さそつだな。

何故か若干怒ってるし…………さ。

「じゃあ、いつもの笹蕎麦に薬味の葱二倍で。」

「……………つたく、お前はいつも変わった頼み方をするなWW」

「薬味何だからいくらでも使っても人の自由なんじゃないか？」

「いや、この間の四倍はヤバいと思うけど……………」

「まあ、あの時はさすがに俺も追加料金を払ったからな。」

「はあ……………」

「ちょっと待ってろ。」

「了解。　じゃあ、板蕎麦よろしく。」

「……………だから、笹蕎麦と言え。　注文が増えたらこっちは量的に赤字だ……………」

「わりいわりい……………　そう言えば裏メニューなんだっけ？」

「そつだよ……………頼むぜ、まったく。」

そう言い残すと、奴は厨房へ小走りに戻って行った。

……さて、蕎麦が楽しみになってきたな。

鰻といえはアレなのさ（前書き）

サブタイトルは気分によってこれですが、気にしないでいただきましたい。

それに、この話が短いという事実も前とは変わらないという。

鰻といえばアレなのさ

暑くなる八月。

夏が終わる八月。

そして、暑さはまだ…納まらない八月。

鰻が食いたくても……

鰻が無かったら食いたくても食べねえよ…

「それで、お前は本当に行くのか？」

ズルズル

蕎麦を食いながら話をする俺。

「ああ、まあな。」

むしゃむしゃ

薬味の葱をめんつゆにつけて食う俺。

「でも、正直言ってあそこに行くのは厳しいぞ……………」

むしゃむしゃ

まあ、そりゃあ分かりきったことだろ……だつてさ、排他的だし。

「まあ、それは阿求に何かあてがないか聞いてみるからご心配なく。」

ズルズル

蕎麦を食いながらも話をする俺は、話を途切れ途切れに続ける。

「まあ、それが一番妥当な考えだろ。で、真太。」

あつ……葱が切れた。

「何だ？」

「薬味追加で蕎麦お代わり。」

「ああ、つて……お前、お前……今日は店の薬味を食い尽くすなよ！」

「大丈夫だつて。」

「……………はあ、わかった……ちょっと待つてろ。」

そう、真太は俺に言うと、厨房へと戻って行った。

~~~~~

「ふう、今日も結構食ったな……………」

「……………」

「真太…………どうした？」

「お前、お前って奴はホントに……………」

「？」

Why?

「薬味の葱を食い荒らしやがって……………」

「いや、薬味だよ。葱は。食い荒らしてなんかないよ。」

「そんだけ食つといて薬味と言えるか?!」

「いや、確かに薬味の量は多いけどさ……………」

「いや、客が薬味の葱を食って何がわる「自重しろ!!」……………」

くそ、まさか真太に言い負けるとは……………」

「次は、葱を食い荒らすなよ……………」

「一応、善処する。」

「……………はあ、また来いよ。」

まあ、とりあえずまた次も薬味を食い荒らしに来てやろう。

そう思うと、俺は「代金はここに置いとくからなあ!!」と叫んで、店を後にした。

さて、次は鰻の原因を探るためにその…協力者？

を、探さなければ……

## 鰻への活路（前書き）

少し、今回のサブタイトルはまともだとも思いますよお。

テスト前で頭が何かおかしくなってますよお

## 鰻への活路

八月、それは暑くなる八月。  
夏が終わる八月。

そして、暑さはまだ…納まらない八月。

んで……鰻が食いたくても……な  
鰻が無かったら食いたくても食べねえんだよ……！！

全く、タイミングがなんて悪いんだろうか？

~~~~~

……んで、俺は相変わらずに蕎麦を食い終えて阿求が住む屋敷へと向かっていた。

てか、もつ中に居るが……
飛ばし過ぎ？

いや、何ひとつ変わったことはなかったぞ！

「で、頼み事とは何ですか？」

おっと、一番大切なことを飛ばしてたな……まだ阿求に何が何でもうして欲しいのかいつてなかったし。

「今日、阿求に妖怪の山に安全的に行く方法がないか？を聞きに来たんだよ。」

「妖怪の山にですか？」

「ああ、そうなんだ。」

まあ、驚かれようとも怪しげに見られようともしょうがない話な気もするが……

「何故？　ですか？」

「ああ、今日真太の店へ鰻を食いに行っただけだよ。鰻がなかったんだよ。」

俺は、説明を続ける。

しかし……その俺の説明の中、阿求は何か考え込んでいるような……まあ、難しい顔をしている。

やっぱし無理なのか？

排他的な面が壁になっているのは間違いないんだろうけど。

「んで、だからそんな感じなんだ。」

「……へえ、妖怪の山で鰻の養殖業を営んでいる人が居るんですか。珍しい人も居るんですね。」

いや、珍しいと言うよりはさ……俺は

「いや、俺は珍しいと言うよりはさ……かなりの変わり者が変人なんだと俺は思う。」

「しかし、今日は随分とズバズバと斬るように毒を吐き出しますね……」

……いや、今日の俺はそんな風じゃないと自分で思うけどな。てか、それよりも……さ。

「いや、いつもは阿求が阿求が毎回のようにはっちゃけてるから……それで今日は俺が目立つだけじゃないのか？」

この今の俺がした発言は間違っていないだろ？
例えば阿求は……

俺にお小遣を要求した時……
俺はいろいろと大変な目にあつた。

例えば、俺が初めて紅魔館へ行った日。

帰れば……帰ってみれば、何故か阿求に往復ビンタの無限コンボを喰らった……

例えば……とまだまだ続けて行きたい俺だがこのまま続けて行くと、当然日が暮れてしまいそうなので……この気持ちは心の角へとしま

っておくことにする。
長々しさがハンパないしな。

「私のはっちゃけてる？ 笑わせないでください。」

……は？

「いや、はっちゃけて壊れて……稀に理性まで何処かに吹っ飛んでるから。」

俺は、そう言いながら溜め息をつく。
すると、阿求は……

「私はそんな人じゃない筈！！」

……と、言ってジタバタしながら叫んでるし……

「ああああ！！なんで、何故！！」

だから、それをやめろと言っているんだ……

周りには評判は良いのにさ。何故俺と居る時だけはこんなにも壊れる？

「はいはい…… んで、何か良い宛てはないのか聞きに来たんだけど。」

「……はあ、わかりましたよ。
しょうがないですね。」

「ああ、悪いな。」

なんか、何故か意外に素直だな……意外に。

「じゃあ、ちよつとだけ準備があるので待っていてください。」

うん？

用意……準備が、必要なのか？

「あ、ああ。」

「帰っちゃダメですよ。」

何か、嫌な予感が……

阿求はそう俺に言い残して屋敷の奥へと歩いて行った。
何だか上機嫌でアレだったけど……

大丈夫だよな？

否、鰻はまだ続く……

よく、スターがパパラッチに追い掛けられたり、誤情報をホントの
ように流されたり……と、かなり不本意で迷惑で不名誉なことを
されているのを耳にするが、俺も……

今は嫌々な感じにマスコミの記者に付き纏われていた。

「だからさ……恋仲ではないし、。。。なんてもつての他でしてな
いから……」

「いや、怪しいですね……………その顔は。」

「俺がそんなエロな顔をしてるのか？」

「チ、チ……人は外だけじゃ分からないんです。」

まあ、いい人だと思ってたら強盗だったとか、殺人犯だったとかい
うことを今まで経験談として聞いたこともあったしなあ……………良
く分かるけど。

「でもさ、それならアンタはもろにヤバい奴なんだな。」

「？」

私の何処がヤバいと？」

くそ……………

自覚してねえ、こいつめ……だからこんなにもしつこいのか。

だんだんと耐え切れなくなってきた俺は、ついに徐々に身を引きはじめ、逃走する準備を始める……

このままでは、まったく拉致があかないだ。

「さあ、白状してください!!」

奴が詰め寄ってきた。今だ!!

「だから、俺は無罪だあああ!!」

俺は、そう叫んで素早く一回転すると……

「こんなしつこい取材は始めてだあああ!!」

と叫んで全力で部屋を抜け、屋敷の中を駆け出した……

「さて、良いネタが出来てしまう事も知らないで逃げてしまうなんて……流石、阿求さんですね。」

と、奇妙にも笑みを浮かべている新聞記者が居たのを知らずに……

〃

「こんなしつこい取材は始めてだあああ!!」

ふふ、文はちゃんと仕事をしてくれましたね……

ふ、ふふふ……ふふふふふ……

さあ、このまま上手く行けば……光は私の手に……はいガゴン……！

「うわわわああああ……！」

「え？」

私が音の聞こえた方へ振り向く……

すると……

「阿求、あの頭がおかしい記者は何処から連れて来たああ……！」

ああ、私が立てた計画が………全て水の泡に……

つまり、光は予想のルートを遥かに外して私の居る場所へと到達した………んですね。

「流石に今回はタダでは、許さんぞおお……！」

……あれ？

まさかこれは……俗に言う『死亡フラグ』と言う物ですか？

たった今…私は、かなりヤバい状況下に置かれていた事に気がついた……

すぐに身体を反転させて逃げたい…が、身体が言うことを聞かずに動いてくれない……

これは、金縛り…ですか？

「うおおお！！」

廊下を駆け抜けて来る光が見える……

逃げたい………けど。身体が言うことを聞いてくれない。

私の頬から冷や汗がたれてゆく……

………そして、光が目の前へと来た時に私は確信した。

これは、

「フラグが立った」と………

~~~~~

「分かったか。」

「「……………」」

くそ、今度は返事をしないと来たか。

一体、何なんだコイツら？

「分かったか。」

「「……………」」

てか、拉致があかねえよ。

「まあ、とりあえず、案内をしてくれ。」

「わかりました。そのかわり記事は「ダメだ」……………」

「私もい「今回は待つ「良いですね」……………」

何だ、このやりにくさ。

誰かが誰の発言に割り込むという妨害のし合いになるっていうのもさ、何とも言えねえ……

しかし、こいつを乗せたら阿求は二人乗りの軽トラには乗らない。つまり、不可能なはずだ。

「阿求。軽トラは二人乗りだから無理だぞ。」

「いや、私は荷台に乗りますから大丈夫ですよ。」

……こいつ、俺を断れないようにやりやがった。  
意外に、やるな。

「良いのか？」

「逆に私が目立つ所に居ないとマズイですから。」

「まあ、そうだな……」

確かに、妖怪の山はそんな場所だろう。  
哨戒に回っていることもあるようだしさ。

「  
」

ただ、やはり阿求の機嫌の良さには何かひっかかるよな……

……まあ、しょうがないか。  
とにかく早めに鰻の原因が知りたいし、このヤバイ記者ともおさらばしたいからな。

というか、この記者ってさ……誰だよ。俺、実は名前も知らないんだけど……

「一つ疑問があるんだが、いいか？」

「何ですか？」

うん、言うなら今しかない。

「今更なんだけどさ……お前、誰だよ？」

「え？」

「あ………」

「え？」とお前知らなかったの？みたいに見られても知らないものは知らないし、「あ………」と言う風にヤバイ……と思ったのならばすぐに教えて欲しい。

「俺は、阿求に呼ばれたとしか聞いてないんだけど………」

そうだ、ホントに阿求に呼ばれたとしか俺は聞いてないんだよ。新聞記者とは言われたけど何処の新聞記者なのかも知らないしさ。

「あ………」

だから、黙るなって………」

「おい、阿求……これはどうゆうことだ？」

こいつは俺に紹介が終わってると思っていたみたいだけでも？」

口調こそ優しくするが、俺はある意味怒りが溢れて溢れ出す状態だ。

何せ、一時を記者にしつこい付き纏われ……さらに、このままで行くと変な捏造を……いや、間違えた。変に捏造して人を引き付けようとした記事がばらまかれることになってしまう。

そうすればあの二人はかなりの特をするし、俺はついに詰まれる。

……つまり、ここで未然に防がなければ俺の平穏なる日常に明日はない。

……うん、そうなんだろう。

俺は、厳しい現状を打破する方法を考え始め「彼女は文々。新聞の記者をやっている 射命丸 文と言っんですよ。」

……っ

俺が調度良い感じに仕上げようとしていたのにも関わらずに…

「はあ………」

次からは未然にちゃんと言ってくれよ。」

「善処します。」

………はあ。

ホントに分かってくれてるんだろうか？

そこが阿求らしいと言えば、阿求らしいんだけどな。

まあ、諦めるまで俺は付き合ってやるさ。

俺は、溜め息を一度ついて立ち上がると、

「こんな所で時間を費やしていても何だからさ。 出発しようか。」

と、言つて廊下から下駄箱まで行き、靴を履いて外に出て行つた。

さて、ホントの戦いはここから。

鰻が何故『入荷』しないのかを突き止めるのが今回の俺が自分で決めたノルマである。  
運び屋（運送業者）としても、今回の流通が止まっている原因を知りたいしな。

~~~~~

「
」

あのあと、特に何もなくて俺は阿求と文を乗せ、軽トラで人里から出発していた。

「
」

がしかし、何故だか何だかは知らないが……
さっきと打って変わって阿求の機嫌が異常に良いのだ。
異常？にだ。

まあ、本当は相手が機嫌が良いのに越したことはないのだが、あまり良すぎてもそれが何故なのか気になる訳で……

「光――！」

「！？？」

「……………何だ？」

「今、何を考えてたんですか？」

「……………何か、前にもこんな展開がなかったか？」

「いや、何故か分からないけど阿求の機嫌がとても良いなあって。」

「まあ、そう……ですけど……」
機嫌が良ければこうなるのか。
うん、勉強にな………って、ならねえよ――！！

そして、俺が後ろを向けば……

「……………（ニヤニヤ）」

窓から荷台に乗っている文屋がものすごくニヤニヤしているのが見える。

……はあ。

「光、前を向いて運転しなきゃ危ないですよ。」

「……………ああ、悪い。　　そうだな。」

どうやら、今日はこの二人に勝利の軍配が上がったらしい……………

てか、俺は俺で頑張ったんだぞ……………

鰻、いきなり始まった身に迫った危機…（前書き）

どうしてこうなった？

鰻、いきなり始まった身に迫った危機…

山に登りだしてから、一時間あまりが経過した。

時間が経過してしまったのは生きている者ならば誰でも実感していることなのだろうが、俺は今そのようなことを言っている暇はないのである。

理由？ そんなのは……

「ナニ、これええええええええええ！？」

「これ、鰻なんですかね？」

「まあ、そうなるんじゃないですか？」

何故か俺たちが休憩をしている時に突如目の前に現れた、謎の超巨大鰻を見て各自いろいろ感じていたからだ。

阿求はあのデカさが気持ち悪いのか、絶叫しているし、それに対して俺は文に質問をし、文は普通に返すという…… まあ、つまりよく説明が出来ない。

実際、俺も出会いがけの時は少しパニックになりかけていたからな……

こんなにデカイ鰻など、絶対にいないと思うだろう。　　が、残念ながらここは幻想郷。

そんな理屈などは在りはしない。

しかし、今の俺は皆さんから見ればかなり落ち着いていて冷静沈着のように見えるかもしれないが……　　残念ながら、それもまた違う事実だ。

「おい、文……　　この鰻、さつさと殺らなきゃ不味いだろ？」

「そうですね。」

「なら、さつさと片付ける方針で行かないか？　　阿求だって混乱してるしよお。」

俺が愛銃のハイパワーを握る手の平には大量の汗が滲み出ている、俺の心の中はよくあるような物語の主人公のような焦る気持ちで埋め尽くされている。

つまり、このままでは『ヤバい』　　どうにかしなければ『な

らない』

この、二つがそろってしまった今。 ナニをしまいが誰かがワンテンポを置かない限り、俺はおそらく成功しないだろう。

理由？ そんなのは自分で考えろ。 テンプレートな何かだからな。

「文、な、な、な、ナニをしているんですか！？ さっさとあのいろいろとヤバイデカい鰻を片付けてくださいよ！……！」

「いや、まだです。 今の状態で、焦ってはいけない。」

後ろから見ても分かる。

文が巨大な鰻に向ける視線が今までと変わった…… あいつ、何を
するつもりだ？

「文、どうするつもりだ？」

「光さん……」

「なんだ？」

「私が、良いと言ったら阿求さんを連れて山から全速力で下ってください。」

「…………だが、本当にそれでいいのか？」

俺は文の後ろの位置に居る。だから、文の顔は直接見えないわけであり、声で物事を判断しなければいけない状況であるのだが……今の話し方の限りはそれが一番の方法なのだろう。

……………が、ひとつだけ気になってつつかかっていることがある。

それは……………この鰻があまりにも『電気』鰻の外見に似ているからだ。

実のこと俺は何度か電気鰻を間近で見たことがある。

そして、その記憶を引きずり出してアレを見ると、その種の電気鰻に被るのだ。

もし、文が電気鰻を知らなかったとしたら……………いくら大妖怪だという（阿求談）彼女であっても巨大な電気鰻の放つ電撃は初見でよけることが出来ないはず。

不味い、まずい…マズイ。

俺は真実を言うべきなのか？

それとも、それは知らない情報なのか？

どっちだ？

畜生、今のような時に迷っている暇など残されていない！！
俺よ、

迷うな！！ 焦るな！！
そして、恐ることなく確かな一步を
踏み出すんだ！！

「文！！
そいつは、電撃を対外から射出して攻撃をしてくる筈
だ！！ 直接攻撃時や奴の体に気をつけろ！！」

「嘘っ！？」

「本当だ！！
あとは、頼んだぞ！！」

いきなりの忠告に驚く文だが、俺もさっき文に言われたことを破っている。

『私が、良いと言ったら阿求さんと全力で山から下ってください。』

俺は、そう言われた。
が、相手が電気鰻だと仮定出来た事を見れば…これが今俺が取れる最善の策だ。」

もし、あの電気鰻が単なるデカブツでなく妖怪化していたら、電撃はどうなる？

体から放出された電撃は空気を切り裂くように飛び交い、普通の人間でしかない俺と阿求はきわめて危険な状況下に置かれることになる。

それだけは、それだけは最低でも避けなくてはならない。

あつてはならない……

その思いが俺の頭の中を埋め尽くした時、自然に体が動き出した。

俺の脚はすぐさま地面を強く蹴って走り出すと、地面にへたり込む阿求を抱えて自分の軽トラが止めてある場所へと駆ける。

もう、何も考える余裕はない。

一刻も早く、一刻も速く……『この場から切り抜けるんだ！』

そう、俺は心のなかで叫ぶとエンジンキーを入れてエンジンを始動させ、そのままの勢いで軽トラックを発進させた。

新作予告（仮）（前書き）

続きが書けないので、細々と書いていた新作を投稿する前に予告として出してみました。

もし、投稿するならばこの作品の次話制作を優先しているので来週中を目安とします。

新作予告（仮）

朝起きたら顔を洗うとか、朝食食べたならその後歯を磨くとか、そんなような世間一般で普通に行われているから『常識』っていうんだろ？

それで、その常識っていう当てはめると『人は歳をとる』のような事があてはまる筈。

だってさ、歳をとらないだとか可笑しい話しだろ？

疑問形ばかりの文になっているけど、他に例を挙げれば『人は空を飛べない』だとか、『時間を遡れない・止められない』のような挙げれば挙げるほど馬鹿馬鹿しさが満天になるモノばかりだ。

そう、本当に馬鹿馬鹿しいモノだ。

『人が空を飛ぶ。』

『人が時間を止められる。』

『魔法が存在する。』

なんて有り得ないのだから。

「それで、今日は突然休暇になったから此処へ来たと」

「それで正しいわ。以前から休暇が出来たらまた此処へ来てみたかったの」

「まあ、こつちとしては美人な客が増えるから大歓迎なのだけれど」

しかし、俺が絶対に有り得なく馬鹿馬鹿しいと考えていたその三つの項目は……俺の中に在った『一般常識』という絶対に破られなかった筈の壁をなんと、もろともせずにブチ破って見せた。

つまり、世界は違うのだが有り得てしまったのだ。

「お世辞を言っても私は客だから何にも出ないわよ」

「いいや、お世辞なんかじゃあない」

補則をするが、俺は約一年くらい前にこの世界へやって来た。

最初はただただ目の前の現実の有り得なさに嘆いていたが……

人間という生物は恐ろしいもので、この一年くらいの短い月日で以前の常識から外れた有り得ないことが起きようと何にも思わなくなってしまった。

つまり、俺もここに適応してしまった訳だ。

「んで、今日はどれにする？」

「逆に聞くけど、何かオススメはあるの？」

「ジャンルを指定してくれないとオススメは数が多すぎてだな……」

まあ、良い。 それなら俺が選んで持って来ても良いか？」

「別に良いけど…… 何を持って来るつもり？」

「それは『お楽しみ』と言っつのが約束だ。」

~~~~~

閑話

とある夏の深夜時…

P r o l o g u e - (前書き)

テスト直前なんで、いつもの通り執筆欲が出てきました。  
まあ、本編ではなくリハビリの閑話を入れます。

「~~~~~」

数分間が経って、一曲の演奏を俺は終える。

……ひとり、ひっそりとした自然の中で静かにギターを弾くと言うのもたまには悪くないものだな。

ギターを軽トラの荷台にそっと置いて立ち上がると、俺は夜更け間近の夜空を見上げる。

そして、一度大きく息を吸い、ゆっくりと吐く。

まだ夏なのに関わらず、空気が少しひんやりと感じるこのまた、昼とは違った感覚味わえるのは深夜という特権なのか何か。

深夜に出歩くのは俺の習慣でなければ、自ら進んで出て来た訳でもない。

だってさ、夜は妖怪や妖獣に襲われる確率が昼間と比べて、比にならない程あがってしまうんだぜ。

つまり、俺が拳銃とかの護身武器を持とうが何をしようが……特例以外の奴らは夜が深くなればなるほど、異常な程に危険なのさ。

……まあ、説明が長くなりそうだからぶっちゃけてしまっ。

今日、俺はとあるやり取りの都合上、約束を守る為にここに来た。

ただ、それだけなんだよ。

うん。

俺はもう一度、吸った空気をゆっくりと吐くと……

視線をゆっくりと戻し、目的の人物がくるまで若干の警戒を始めた。

~~~~~

閑話 とある夏の深夜時…

1 (前書き)

ちと、携帯からなので再投稿。

俺の元に深夜の呼び出しが入った手紙が来たのは今から三日前のことだった。

その日、阿求は作業の為に俺の所へは来ず、別に誰が来てなにをしたと言っ訳でもなかった。

……ただただ平穏な一日。

俺はその久しぶりの平穏に仕事を片付けてから心を休ませてゆっくりとしていた事を覚えている。

が、しかし。今となって考えてみれば、この平穏も何かの予兆だったのではないか？

……だつてさ、ここ（幻想郷）に来てから『平穏』ということが全く無くなつたんだよ？

気を抜けばとある意味で喰われそうになるし、人里では頭突きが多発してるし、神社に行けばお札が飛んでくる……

なんだよ、この俺の生活は。

ああ、ちょっと「ナニソレ」と笑いたい。

ああ、笑いたければそっちも笑って良いぞ……

……話がズレた。

それで、手紙が来たのがその平穩だった日の夕方時。

手紙の内容は『明々後日の深夜に渡したい物があるので、湖に来て下さい』という短い文であり、その字は綺麗であった。そう、あれは綺麗な字だった……

いや、いやいや……今更だが、何故俺は何も疑問に思わなかったんだ！？

明かに怪しい。

うん、何か怪しい。

いつもの俺であれば普通無視をしたりする。が、今回は何故か何も疑問に思おうともせず、に約束場所まで来てしまった。

……あれ？　このまま行くと俺、死ぬかも知れないな。

今の発想はどこぞの誰か（妖怪）が俺の態度に腹を立てて馬鹿正直に手紙を送り付けてきたという考えである。

…まあ、誰も居ないから喋りに喋ってしまったが、そんなの俺は知ったこっちゃない。

死ぬなら死ぬで弱肉強食？それとも魑魅魍魎？　という単語の意味のままなんだろうから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9212r/>

幻想の運び屋

2011年12月12日09時47分発行